

# 学校保健研究

ISSN 0386-9598

VOL.43 NO.4

2001

Japanese Journal of School Health



学校保健研究

*Jpn J School Health*

日本学校保健学会

2001年10月20日発行

本誌の直接出版費の一部として平成13年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付を受けた

# 学校保健研究

第43巻 第4号

## 目 次

### 巻頭言

- 村田 光範  
子どもの遊び .....266

### 原 著

- 亀山(松岡)良子, 白木まさ子  
女子短大生のダイエット実施時期及びその方法に関する研究 .....267
- 浦田 秀子, 福山由美子, 田原 靖昭  
男子学生の体型と体型認識に関する研究 .....275
- 堀 篤実  
中学生の意欲低下とCDIスコア, 心身症状および家族関係との関連 .....285

### 報 告

- 上延富久治, 古田 敬子, 美馬 信, 須藤 勝見  
文部・厚生両省による幼児・児童・生徒の体位計測値についての比較検討 .....299

### 共同研究

- 渡邊 正樹, 野津 有司, 荒川 長巳, 渡部 基, 市村 國夫, 下村 義夫  
青少年の危険行動とその関連要因に関する基礎的研究  
—国内外の研究動向と今後の研究課題— .....310

### 会 報

- 第48回日本学校保健学会のご案内(第5報) .....323
- 常任理事会議事概要 .....349
- 機関誌「学校保健研究」投稿規定 .....351
- 日本学校保健学会第11期役員選挙結果公示 .....352

### 地方の活動

- 第48回近畿学校保健学会の開催報告 .....354

### お知らせ

- 第2回動脈硬化教育フォーラム—生活習慣病の患者指導— .....357
- 編集後記 .....358

巻頭言

# 子どもの遊び

村田 光 範

Play in Childhood

Mitunori MURATA

子どもたちに日常的な身体活動が減少していることは深刻な問題である。平成4年に行われた東京都教育委員会の調査によると、学校以外で運動やスポーツをしている割合は、小学生72.3%、中学生で44.2%、高校生で22.7%であった。そして学校以外で運動やスポーツをしない理由として、時間がない49.3%、遊ぶ場所がない24.5%、遊ぶ仲間がない11.4%などをあげている。

また、日本学校保健会「平成10年度児童生徒の健康状態サーベイランス事業報告」によると、学校での体育時間などを含めて1週間に体を動かした総時間数が12時間以内のものが半数以上に及んでいる。子どもの遊びが少ないことは、日常的な身体活動の減少にもつながっているのである。

身体を動かさないということは、子どもの心身の発育・発達に大きな影響を及ぼすのである。身体の面からみると筋骨格系の発育が悪くなることが懸念されるし、思春期の成長促進現象に伴って心臓や肺臓が急速に大きくなる時期に適切な運動をしないであると、心肺機能が十分に発達しないことになる。これらのことは中・高年になってから、たとえば骨粗鬆症の進展に影響したり、心肺機能が低いことが老後のQOLに関係する可能性が高いのである。

最近では近所で子どもたちが群がって遊んでいる風景を全く見かけなくなった。子どもは自然発生的に群れをつくって遊ぶことによって、①ルールという約束事があること、②場面場

で支配するものと支配されるものがあること(集団における役割分担)、③体力や知力が必要なこと、④技術的熟達が必要なこと、⑤的確な判断の下に行動することが必要なこと、⑥何にもまして、友達と一緒にいることの楽しさを身をもって覚えるのである。言い換えると、これらのことは大人になってからの社会生活の基本である。

子どもが自然発生的に群れを作り、身体を動かして遊ぶことは、健全な人間関係をきづきあげる上できわめて重要なことである。

子どもの日常的な身体活動を増すという意味でも、また子ども同士の間関係をよくするという意味でも、子どもたちが子どもたち自身で遊ぶ機会を失っていることの意味を社会、ことに学校はもっと深刻に受け止めねばならない。

今は、「向こう3軒両隣」では子どもが群れをつくることのできないので、地域の子子どもたちが集まる学校、とくに小学校の生活の中でどうすれば子どもたちが自然に遊ぶ機会を持つことができるのかを検討しなくてはならないと思っている。

遊ぶという言葉には、「遊び人」、「遊んでばかりいる。」といったように余りよい意味の響きがない。しかし、今は子どもの心身の発育・発達にとって遊びのもつ意味を真摯に検討すべき時期である。

筆者は以上の問題を遊びとしてのスポーツを通じて解決すべく努力しているところである。

原 著

女子短大生のダイエット実施時期  
及びその方法に関する研究

亀 山(松岡)良 子 白 木 まさ子

静岡県立大学食品栄養科学部

A Study on Methods of Weight Loss  
in Female College Students at Different Periods of Their Lives

Yoshiko Kameyama-Matsuoka, Masako Shiraki

*School of Food and Nutritional Sciences, University of Shizuoka*

We investigated various aspects of the subjects' lifestyle and weight loss ①interest ②experience ③methods ④age; elementary school, junior high school, high school and college. The subjects were 435 female college students.

The results were as follows:

1) About 90% of the subjects were interested in weight loss, and about 70% of them had experienced weight loss.

2) With regard to age, the majority of subjects who had experienced weight loss, experienced it at high school age. The percentages of those who had had the first experience at elementary school age, at junior high school age and at high school age were 7%, 31% and 52% respectively.

3) The methods of weight loss frequently adopted were reducing meals, refraining from snacks and taking up exercise or sports. The majority of the subjects who had used special food or equipment for losing weight at high school age had started doing it from elementary school age.

4) The weight, body mass index and body fat of the subjects who had started weight loss from elementary school age or from junior high school age were higher than those of the subjects who had started losing weight from high school age or hadn't even tried to lose weight.

5) The people who are trying to lose weight now, want to improve their lifestyles by maintaining regular meals, refraining from snacks, increasing the vegetable content of their meals and doing exercise or sports. In addition, obese subjects (BMI $\geq$ 25.0) among them pointed out that their unbalanced diet had to be improved.

These results obtained for female college students suggest that it is necessary to improve the health education system started from the childhood for formation of right dietary habit, under the cooperation of school and home.

---

Key words : female college students, physical measurements, period of weight loss, methods of weight loss, improved dietary life-style

女子短大生, 身体計測, ダイエット実施時期, ダイエット方法, 食生活改善

---

## I. はじめに

近年、若年女子の体型は痩身 (BMI<18.5) の傾向が顕著になってきているにもかかわらず、自分の体重に対して満足している者は少なく、理想とするBMIはかなり低値であるといわれている<sup>1)2)</sup>。一方、体重の減量を行う理由としては「きれいで (かっこよく) ありたいから」という者が過半数を占め、健康面より外観の容姿を重視する傾向と「痩身=美」とする風潮がうかがえる。

若年女子の体重減量やダイエットに関する報告には、これまでに、食行動や食物制限の実態<sup>3)4)</sup>や様々なダイエット方法に対する意識調査<sup>5)</sup>等がある。そこで、今回、著者らは研究の視点を少し広げ、ダイエット行動を起こす以前のダイエットへの関心の程度や、それが実践へ移行する割合、また、ダイエット経験者がどの時期にどのようなダイエット法を行ったのか、さらに、ダイエット実施者の生活習慣や食生活に対する問題意識などについて検討を行った。その結果、若干の知見を得たので以下に報告する。

## II. 調査方法

### 1. 調査時期及び対象者

調査は、1998年及び1999年の11月下旬から12月上旬に実施した。静岡県内の2つの短期大学

の1, 2年次に在籍する女子学生455名に対し調査の目的を説明し、理解を得られた435名を対象者とした。平均年齢は19.2±1.5歳である。調査対象者には、記入法を説明し、その場で回答を記入させ、直ちに回収した (回答率100%)。続いて、調査票を提出した者から身体計測を行った。

### 2. 調査内容

#### 1) アンケート調査

①生活習慣に関わる12項目、②食生活状況に関わる2項目、③ダイエットに関わる5項目を設定した。

#### 2) 身体計測

各対象者の身長、体重、体脂肪率を測定した。体脂肪率の測定はタニタTBF-305を用い、インピーダンス法により行った。

### 3. 分析方法

アンケート調査項目における対象群間の比較には $\chi^2$ 検定を用い、身体計測値の比較には $t$ 検定を用いた。いずれも、危険率5%以下を有意な関係があるものとした。

## III. 結 果

### 1. ダイエットへの関心の程度と身体特性

表1に、ダイエットへの関心の程度と身体特性との関係を示した。体重、BMI、体脂肪率ともに、ダイエットへの関心がある者はない者 (「以前からない」「現在はない」) に比し、有

表1 ダイエットへの関心の程度と身体特性

		身長 (cm)	体重 (kg) (A)	BMI	体脂肪率 (%)	主観的理想体重 (kg) (B)	(B)-(A)
ダイ エ ツ ト へ の 関 心	以前からない n=39	157.4±5.0	46.7±5.4 <sup>**a</sup>	18.8±1.9 <sup>**c</sup>	21.8±3.7 <sup>**e</sup>	46.8±4.4	0.1±4.2 <sup>**f</sup>
	現在はない n=44	157.2±4.2	47.2±5.3 <sup>**b</sup>	19.1±1.9 <sup>**d</sup>	22.5±4.6 <sup>**f</sup>	46.7±3.4	0.5±4.7 <sup>**h</sup>
	あ る n=352	158.2±4.9	52.4±6.5 <sup>**g</sup>	20.9±2.3 <sup>**i</sup>	26.4±5.0 <sup>**j</sup>	46.9±3.5	5.5±5.1 <sup>**k</sup>

$t$  検定 \*\*p<0.01

a~h: 同文字間で有意差あり

意に高値を示した ( $p < 0.01$ )。身長は概ね157 cm程度、自分が理想とする体重（主観的理想体重）は47kg程であり、いずれも3群間に差はみられなかった。なお、全対象者の平均身長及び体重は158.0±4.8cm, 51.4±6.7kgであり、これは、平成10年度国民栄養調査結果<sup>9)</sup>の同年齢者のそれに近似していた。

## 2. ダイエットへの関心とダイエット経験との関係

表2に、ダイエットへの関心とダイエット経験との関係を示した。ダイエットへの関心が以前からない者は39名(9.0%)とわずかであり、

表2 ダイエットへの関心とダイエット経験 人 (%)

		ダイエット経験	
		あり	なし
ダイエットへの関心	以前からない n=39	0(0.0)	39(100.0)
	現在はない n=44	29(65.9)	15(34.1)
	あ る n=352	250(71.0)	102(29.0)
合 計		279	156

これら全員ダイエット経験がなかった。現在、関心がない者では、ダイエット経験者は65.9%であり、関心がある者では、ダイエット経験者は71.0%であった。

## 3. ダイエットの実施状況

ダイエット経験者279名(表2)について、ダイエットの実施状況を調べた。ダイエットの実施時期は表3に示すとおりである。開始時期や継続期間により、ダイエット実施時期が9種類に分かれた。これを小学生、中学生、高校生及び大学生の時期別にダイエット経験者をまとめると、小学生の時期は19名(◎印)、中学生

表3 ダイエットの実施時期

実 施 時 期	人数	%
1 小学生の時のみ (◎)	2	0.7
2 小+中+高 (◎, ○, △)	4	1.4
3 小+中+高+大 (◎, ○, △, □)	13	4.7
4 中学生の時のみ (○)	17	6.1
5 中+高 (○, △)	30	10.8
6 中+高+大 (○, △, □)	40	14.3
7 高校生の時のみ (△)	89	31.9
8 高+大 (△, □)	56	20.1
9 大学生になってから (□)	28	10.0

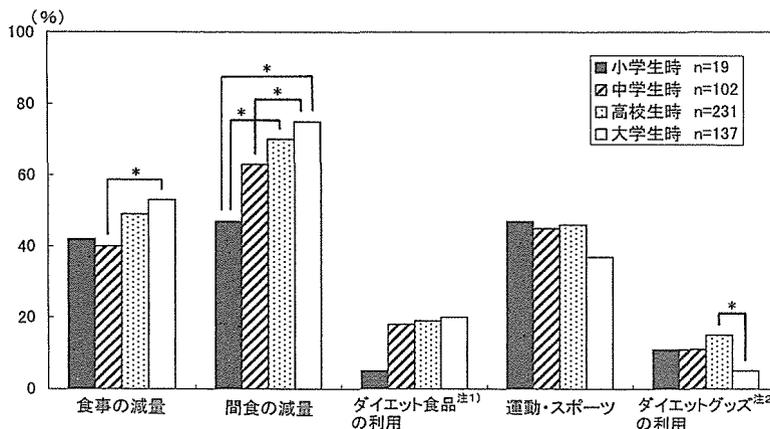


図1 ダイエット実施時期とその方法

$\chi^2$ 検定 \* $p < 0.05$

注1) りんごやヨーグルトなどの特定の食品やダイエット効果を表示して市販されている食品を含む

注2) ラップやテープ、指輪、サンダルなどの小物類を指す

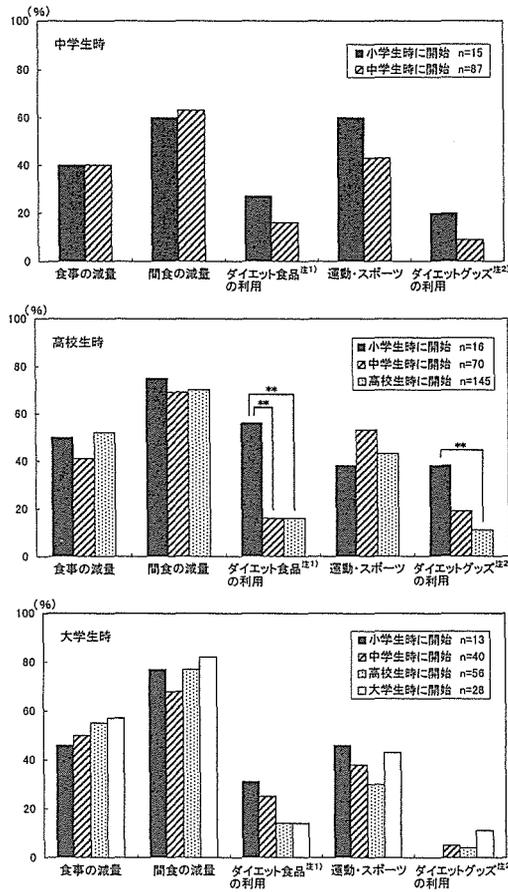


図2 ダイエット開始時期別のダイエット方法

$\chi^2$ 検定 \*\*p<0.01

注1) りんごやヨーグルトなどの特定の食品やダイエット効果を表示して市販されている食品を含む

注2) ラップやテープ, 指輪, サングラスなどの小物類を指す

102名(○印), 高校生231名(△印), 大学生137名(□印)であった。

図1に, これら4つの時期別に実施したダイエットの種類を示した。ダイエットの方法は「食事の減量」「間食の減量」「運動・スポーツ」「ダイエット食品の利用」「ダイエットグッズの利用」であり, このうち, 「ダイエット食品」にはりんごやヨーグルトなどの特定の食品とダイエット効果を表示して市販されている食品が含まれ, 「ダイエットグッズ」は, ラップやテープ, 指輪, サングラスなどが含まれる。すべての時期において「間食の減量」の実施頻度が最も

高く, 次いで「食事の減量」「運動・スポーツ」の順であった。各時期の特徴をみると, 「間食の減量」と「食事の減量」は高校生時, 大学生時の実施率が高く, 「間食の減量」では小学生時の実施率が高く, 「食事の減量」では中学生時の経験者が少なかった(ともにp<0.05)。「ダイエットグッズ」及び「ダイエット食品」は全期間を通して利用頻度は低いが, その中でも「ダイエットグッズ」は大学生時が最も低く(p<0.05), 「ダイエット食品」は小学生時が低い傾向にあった。

次に, ダイエット開始時期の違いが中学生から大学生までのダイエット方法に影響を及ぼし

ているか否かを調べた（図2）。「食事の減量」「間食の減量」「運動・スポーツ」については、すべての時期において実施頻度は高かったが、ダイエットの開始時期別による有意差はみられなかった。しかし、高校生の時期における「ダイエット食品」「ダイエットグッズ」の利用率は、小学生の時期からダイエットを始めた者が他群より有意に高かった ( $p < 0.01$ )。また、有意差が認められるには至らなかったが、小学生から開始した者は、いずれの時期においても、多くのダイエット方法の実施率が他群より高かった。

5種類のダイエットについて、その効果をみると、「効果があった」と回答した者の割合は「食事の減量」68.5%、「運動・スポーツ」66.7%、「間食の減量」65.3%、「ダイエット食品の利用」52.9%、「ダイエットグッズの利用」37.5%であった。

#### 4. ダイエット経験の有無と現在の体型

表4は、小学生・中学生の時期からダイエットを開始した者（105名）、高校生以降に開始した者（174名）及びダイエット経験がない者（160名）、これら3群間の現在の体重、BMI及び体脂肪率の平均値を示したものである。小・中学生の早い時期から開始した者は、他の2群に比し、体重、BMI及び体脂肪率のいずれも有意に高値であった ( $p < 0.05$ ,  $p < 0.01$ )。

#### 5. 現在のダイエット実施の有無と生活習慣・食生活に対する問題意識

次に、現在、ダイエットを実施している群（137名）と実施していない群（298名）に分け、「生活習慣の問題点」及び「食生活の改善点」の有無を尋ねた。「生活習慣」については、ダイエット実施群で91%（125名）、非実施群で84%（251名）、「食生活」については実施群で94%（129名）、非実施群で88%（262名）の者が問題ありと回答した。「生活習慣」「食生活」とも、問題ありの回答率は2群間に差がみられた ( $p < 0.05$ ) が、両群ともその比率は高かった。問題点の内容をみると、生活習慣については（図3）、すべての項目で2群間に有意差は認められなかったが、ダイエット実施群、非実施群とも80%の者が「運動不足」と答え、次いで、各々42%、48%の者が「睡眠不足」と答えていた。また、食生活については（図4）、両群とも概ね半数の人が「食事時間を規則正しくする」「間食を減らす」「野菜料理を増やす」の3つを改善点としてあげていた。このうち、「食事時間を規則正しくする」「間食を減らす」に有意差が認められ ( $p < 0.01$ ,  $p < 0.05$ )、どちらの項目もダイエット実施群の比率が高かった。さらに、ダイエット実施群をやせ ( $BMI < 18.5$ )、正常 ( $18.5 \leq BMI < 25.0$ )、肥満 ( $25.0 \leq BMI$ ) の体型別に3区分し、食生活の改善点の内容を調べたところ、すべての項目において、

表4 現在の体重、BMI、体脂肪率

	ダイエット経験あり		ダイエット経験なし n=156
	小・中学生から n=106	高校生以降 n=173	
体重 (kg) 平均値 ± SD	53.42 ± 8.05 <sup>*,a,b</sup>	51.17 ± 6.11 <sup>*a</sup>	50.16 ± 5.92 <sup>*,b</sup>
BMI 平均値 ± SD	21.53 ± 2.97 <sup>*,a</sup>	20.45 ± 2.10 <sup>*,c</sup>	19.92 ± 1.98 <sup>*,c,d</sup>
体脂肪率 (%) 平均値 ± SD	27.55 ± 6.32 <sup>*,f</sup>	25.39 ± 4.54 <sup>*,h</sup>	24.41 ± 4.45 <sup>*,g</sup>

t検定 \* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$

a~h: 同文字間で有意差あり

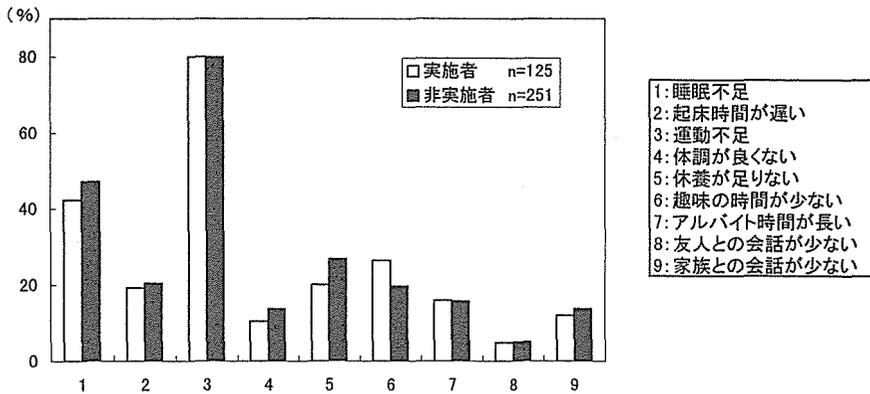


図3 現在のダイエット実施状況と生活習慣の問題点

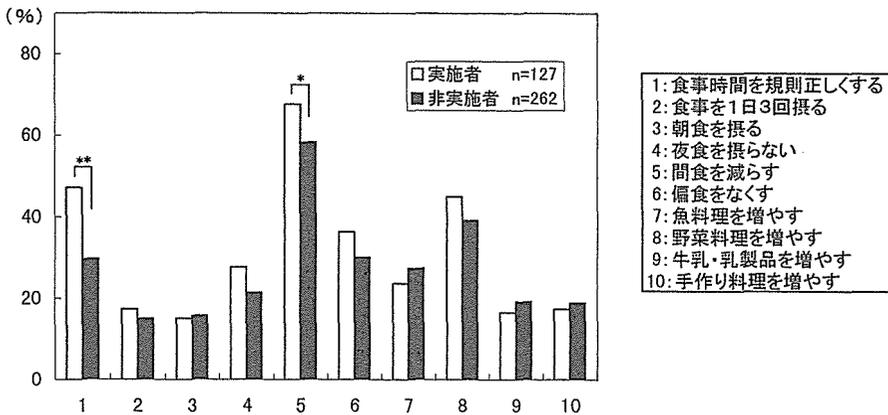


図4 現在のダイエット実施状況と食生活の改善点

$\chi^2$ 検定 \* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$

やせ, 正常, 肥満の順で改善の必要ありの回答率が高くなり, 「偏食をなくす」については, 肥満群が他群よりも有意に高かった ( $p < 0.05$ ).

#### IV. 考 察

ダイエットについて, これまで一度も関心を持ったことがない者はわずかであり, 本対象者の9割以上が現在, あるいは過去に関心がある(あった)と答えていた. 更に, 身体特性をみると, ダイエットへの関心が高いほど, 現体重, BMI, 体脂肪率とも高値を示しており, ダイエットへの関心の持ち方と肥満の程度に密接な関係があった. 一方, 理想とする体重はダイエットへの関心の程度による差はみられず, どの対象群も47kg程度であった. この値は他

の報告例<sup>7)8)</sup>ともほぼ一致している. この主観的理想体重と実身長より求めたBMIは19.0~18.9で, 日本肥満学会が標準としている22に比べてかなり低く, ほとんどが細身の体型であった. なお, 現体重と主観的理想体重の差は表1に示すように, +0.1~−5.5kgの範囲にあり, 木田ら<sup>7)</sup>の報告と同様, 願望する減量値は現体重を考慮したものであることが認められた.

ダイエットへの関心の程度が高いほどダイエット経験者の割合は高かった. そのダイエットの実施状況をみると, 食事や間食の減量は高校生以降に実施する頻度が高くなる傾向がみられたが, この時期に食事制限を開始する者が増えることは他の報告でも認められている<sup>2)4)</sup>. ダイエット食品やダイエットグッズを利用する者

は全体的に少ないが、特に、小・中学生の時期にダイエット食品の利用が低いのは、この年齢では、ダイエット食品への関心がまだ低いことや価格面での割高感が強いことなどが考えられる。一方、ダイエットグッズの利用が大学生で低いのは、学校の授業やテレビ・ラジオ、雑誌等を通して<sup>9)</sup>栄養や食事の情報を得る機会が増え、ダイエットグッズについての効果や安全性に対して疑問を持つようになるのではないかと考える。

全体的に高校生はダイエットへの関心が高く、既述のごとく、実際、ダイエット実施者が中学生、大学生に比べて多い。この中で、小学生の頃からダイエットを経験する者は、大学生までの間に種々のダイエットを試みる傾向にあり、特に、高校生の時期にはダイエット食品やダイエットグッズの利用が高くなっている。これは、この時期、食事や間食の減量に加え、これら食品類への関心が強まるのではないかとと思われる。

現体重、BMIをダイエット経験者・未経験者で比較すると、小学生・中学生の頃からダイエットを始めた群は、他群に比べ体重、BMIとも有意に高値であった。本調査では、対象者の小学生から高校生時点の肥満の有無及びその程度については調べていない。従って、小学生・中学生からダイエットを経験している者の中に、その当時高度の肥満だった者や、遺伝的に肥満になりやすい体質を持つ者が含まれているかどうかは不明であるが、肥満体質者が高頻度で存在するとは思えず、一般的には、小学生であっても、外観を重視したやせ願望からダイエットを実践する者がほとんどではないかと考える<sup>10)11)</sup>。ダイエット食品やダイエットグッズの利用は、食事制限に比べて効果が低く、その食事制限についても、若年層では、体重の減量に結びつく実践は少ないといわれている<sup>12)</sup>。さらに、厳しい食事制限は栄養バランスの不均衡を招いたり<sup>13)</sup>、場合によっては体重のリバウンドを生じることあり得る<sup>14)</sup>。以上より、ダイエットを早い時期から開始して、長期間様々な方法を組み合わせて行ったとしても、年齢的に

もダイエットに対する十分な知識を備えていたとは言い難く、期待するような体重減量には結びつかなかったのではないと思われる。

現在、ダイエットを実施している群では、今後、改善点として間食を減らす、食事時間を規則正しくする、野菜料理を増やす、偏食をなくす、夜食を摂らないことをあげている。これらの内容は、健康的及び効果的に体重減量を行う場合の基本であり、また、不必要なダイエットを防止することにもつながる。

幼児期の食習慣が青年期のそれに強く影響を及ぼすことや、大人になってからの栄養に対する関心は幼児期における保護者の栄養に対する関心度に影響されること<sup>15)</sup>、また、思春期の女子においては、体型に対する自己評価や体重減量に関わる食行動は、友人のそれらに大きく影響されること<sup>16)</sup>などが指摘されている。これらを考慮すると、幼児期から、家庭と学校が連携して、生活習慣の見直しや正しい食生活を営むことの大切さを教える健康教育の充実が強く望まれる。

## V. まとめ

女子短期大学生435名を対象に、身体計測及びダイエットの実施状況、生活習慣における問題意識等に関する調査を行い、次のような結果が得られた。

1. ダイエットへの関心がある(あった)者は9割であり、このうち実際にダイエットを経験した者は7割であった。
2. 小学生から大学生の実施期間のうち、高校生時にダイエットを経験した者が一番多く、また、高校生になってからダイエットを開始した者は経験者の半数を占めた。なお、小学生から始めた者は7%、中学生から始めた者は31%であった。
3. ダイエットの方法は、全実施期間を通し、食事の減量、間食の減量、運動・スポーツを行うが上位を占めたが、高校生時にダイエット食品やダイエットグッズを利用している者は小学生の時期からダイエットを始めた者に

多かった ( $p < 0.01$ ).

4. 小・中学生からダイエットを開始した者は、高校生以降に開始した者及びダイエット経験がない者に比べ、現体重、BMI、体脂肪率とも高値であった ( $p < 0.05$ ,  $p < 0.01$ ).
5. 現在、ダイエットを実施している者が、今後の食生活の改善点としてあげている項目は、食事時間を規則正しくする ( $p < 0.01$ ), 間食を減らす ( $p < 0.05$ ), 野菜料理を増やすであり、生活習慣においては運動不足の解消であった。さらに、肥満体型の者は、偏食をなくすことを改善点として上げていた ( $p < 0.05$ ).

以上の調査成績は、女子短大生の正しい食習慣形成のためには、幼児期から家庭と学校が連携して、生活習慣の見直しや正しい食生活を営むことの大切さを考える健康教育の充実の必要性を示唆している。

## 文 献

- 1) 健康・栄養情報研究会編：国民栄養の現状 平成10年国民栄養調査結果：45-51, 第一出版, 東京, 2000
- 2) Koszewski, W.M. and Kuo, M.: Factors that influence the food consumption behavior and nutritional adequacy of college women, *J. Am. Diet. Assoc.* 96 : 1286-1288, 1996
- 3) 柴谷理絵, 根岸由紀子, 水野清子ほか：女子短大生の食行動の実態とその背景, *栄養学雑誌*, 47 : 283-291, 1989
- 4) 井上知真子, 丸谷宣子, 太田美穂ほか：女子高校生及び女子短大生における細身スタイル志向と食物制限の実態について, *栄養学雑誌*, 50 : 355-364, 1992
- 5) 山口明彦, 森田勲, 武田秀勝：痩せ願望青年期女子学生の「美容」か「健康」かの志向の違いによる体型および減量法に関する意識について, *学校保健研究*, 42 : 185-195, 2000
- 6) 健康・栄養情報研究会編：国民栄養の現状 平成10年国民栄養調査結果：105, 第一出版, 東京, 2000
- 7) 木田和幸, 田伏千代子, 真野由紀子ほか：思春期女子の体型認識と理想像, *学校保健研究*, 37 : 561-566, 1994
- 8) 今井克己, 増田隆, 小宮秀一：青年期女子の体型認識と“やせ志向”の実態, *栄養学雑誌*, 52 : 75-82, 1994
- 9) 厚生省保健医療局健康増進栄養課監修：国民栄養の現状 平成6年国民栄養調査成績：155, 第一出版, 東京, 1996
- 10) 山下千代, 鹿島晴雄：やせ願望の心理学, *からだの科学*, 207 : 74-78, 1999
- 11) 筒井末春：ダイエットの功罪, *からだの科学*, 207 : 79-82, 1999
- 12) 小林幸子：女子高校生の体型別食意識と愁訴, *栄養学雑誌*, 45 : 197-207, 1987
- 13) Story, M., Neumark-Sztainer, D., Sherwood, N., Stang, J. and Murray, D.: Dieting status and its relationship to eating and physical activity behaviors in a representative sample of US adolescents, *J. Am. Diet. Assoc.* 98 : 1127-1132, 1135, 1998
- 14) Skender, M.L., Goodrick, G.K., Junco, D.J. et al.: Comparison of 2-year weight loss trends in behavioral treatments of obesity: Diet, exercise, and combination interventions, *J. Am. Diet. Assoc.* 96 : 342-346, 1996
- 15) Branen, L. and Fletcher, J.: Comparison of college students' current eating habits and recollections of their childhood food practices, *J. Nutr. Educ.* 31 : 304-310, 1999
- 16) Paxton, S.J., Schutz, H.K., Wertheim, E.H. and Muir, S.L.: Friendship clique and peer influences on body image concerns, dietary restraint, extreme weight-loss behaviors, and binge eating in adolescent girls, *J. Abnormal Psychology*, 108 : 255-266, 1999

(受付 00. 12. 14 受理 01. 8. 24)

連絡先：〒422-8526 静岡県市谷田52-1

静岡県立大学食品栄養科学部 (亀山)

原 著

男子学生の体型と体型認識に関する研究

浦 田 秀 子<sup>\*1</sup>, 福 山 由 美 子<sup>\*2</sup>, 田 原 靖 昭<sup>\*3</sup>

<sup>\*1</sup>長崎大学医学部保健学科看護学専攻

<sup>\*2</sup>千葉大学看護学部

<sup>\*3</sup>長崎大学教育学部保健体育学教室

Physique and Its Recognition in Male Students

Hideko Urata<sup>\*1</sup>, Yumiko Fukuyama<sup>\*2</sup>, Yasuaki Tahara<sup>\*3</sup>

<sup>\*1</sup> *Department of Nursing, School of Health Sciences, Nagasaki University*

<sup>\*2</sup> *School of Nursing, Chiba University*

<sup>\*3</sup> *Department of Health and Physical Education, Faculty of Education, Nagasaki University*

The incidence of obesity in males increases from the latter half of their 20s. Since obesity is a factor associated with lifestyle-related disorders, it is important to acquire the ability to manage one's health during adolescence. To obtain basic data for health education, we assessed physique, an objective parameter of the health state, in terms of the body mass index (BMI) and percent body fat (%Fat) measured by the near-infrared interactance method in 230 male students (age 18 to 22), and also evaluated the relationship between these parameters and the recognition of their physique. According to the classification using BMI, 6.1% of the students were classified as the low weight group, 86.5% as the normal weight group, and 7.4% as the obese group. According to the classification using %Fat, 12.2% of the students were classified as the <10% Fat group, 77.8% as the 10~<20% Fat group, and 10.0% as the ≥20% Fat group. In the normal weight group according to BMI, 3.5% of the students were classified as the ≥20% Fat group, indicating the masked obesity type. In the obese group according to BMI, 5.9% of the students were classified as the 10~<20% fat group, showing the muscularity type. Thus, physique could not be appropriately evaluated by BMI alone, and appropriate assessment of physique by measuring %Fat is important in health guidance.

Of all students, 40.4% considered themselves to be overweight. However, obesity was observed in 18.3% according to BMI and in 23.7% according to %Fat, showing a marked dissociation between the actual state and recognition. In the normal weight group according to BMI, only 38.7% considered their weight appropriate while 38.2% regarded themselves as overweight, and 23.1% regarded themselves as underweight. In the 10~<20% Fat group, 38.0% considered their weight to be appropriate, but 39.7% and 22.3% regarded them as overweight and underweight, respectively. Thus, evaluation of the relationship between the recognition of their physique and BMI as well as %Fat showed both orientation toward low body weight and that toward high body weight. The ideal BMI in these students was 21.1. Taking their wish for physique into consideration, a BMI of 21~22 appeared to be the ideal physique in males during adolescence.

---

Key words : male student, physique, BMI, percent body fat, recognition of physique

---

## I. はじめに

青年期の発達課題として、Havighurst<sup>1)</sup>は自己の身体構造を理解し、身体を有効に使うこと、つまり日常の健康管理を自分で行い、みずから鍛錬することがあげられている。男性では20代後半から肥満が増加しており<sup>2)</sup>、生活習慣病の予防や健康増進のために青年期に健康習慣を身につけることは重要である。健康状態の客観的指標の一つとして体型のもつ意義は大きく、また、自分のからだがどのようにみえるかということはアイデンティティの確立期にある青年期の学生にとって重要な問題である。これまで青年期女子の体型ややせ願望などの検討<sup>3~7)</sup>はなされているが、男子の体型認識に関する報告は少ない<sup>8~10)</sup>。そこで、健康教育の基礎資料とすることを目的に、体型および体型認識について検討した。体型の評価はBody Mass Index (BMI) と体脂肪率 (%Fat) を指標とした。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象

対象者は長崎大学の学生で、身体測定や体型に関する調査の目的や方法を説明し、協力が得られた251名のうち青年期後期の18~22歳で、調査用紙に欠損のあるものを除外し、230名を解析した。調査時期は6月である。

### 2. 調査内容

#### 1) 身長、体重およびBMIの算出

身長 (SHIRAI社製: 鋼鉄製) は厚手の靴下は脱がせ、体重 (エー・アンド・ディ社製、最小目盛り50g) は着衣の量を減算するようにあらかじめ入力しておき着衣のまま測定した。これら身長および体重からBody Mass Index (BMI = 体重 (kg) / 身長 (m)<sup>2</sup>) を算出した (実測BMI)。BMIによる判定は日本肥満学会の肥満判定基準<sup>11)</sup>により18.5未満を低体重

群、18.5~25未満を普通群、25以上を肥満群とした。

#### 2) %Fatの測定

肥満を判定するには体脂肪量の測定が不可欠であり、近赤外線法による体脂肪計FITNESS ANALYZER BFT3000 (ケット社製)<sup>12)</sup>により%Fatを測定した。測定は性別、身長、体重、体格、運動レベルを入力し、遮光帯で覆ったプローブを被験者の利き腕の上腕部の力こぶの頂点に垂直に押し当て、2波長の赤外線を用いて行う。10%未満、10~20%未満、20%以上に分類し、20%以上を肥満とした<sup>13)</sup>。

#### 3) 体型に関する意識調査

自記式質問紙により、現在の自分の体型に対する認識を、「太っている」、「ちょうどよい」、「やせている」の3段階で、また、現在の体重に対する今後の希望を「やせたい」、「このままでよい」、「太りたい」の3段階で評定を求めた。また、現在の身長で理想とする体重についても回答を求め、BMIに換算した (理想BMI)。

### 3. データの解析方法

#### 1) 体型評価

BMIは体脂肪量との相関が高いことから肥満の判定の指標とされており、BMIが%Fatをどの程度反映しているかその実態を知るために、それぞれの判定基準による分類とさらにBMI 1ポイント毎に分析した。

#### 2) 体型評価と体型認識

体型と体型認識の関係について青年期の傾向を知るために、BMIは1ポイント毎、%Fatは2ポイント毎に分析した。

#### 3) 実測BMIと理想BMI

理想とする体型を推測するために、体型認識別および%Fat 2ポイント毎の両者の平均値を分析した。

データの分析は、統計パッケージSPSS (Statistical Package for the Social Science) for

Windowsを用いた。平均値の差の検定には、t検定、一元配置分散分析を行い、必要に応じて多重比較を行った。

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 対象者の背景

平均年齢は19.2±1.0歳であり、身長、体重、理想体重、BMI (実測および理想)、%Fatの平均値は表1に示すとおりである。実測BMIが理想BMIより有意に高かった (P<0.01)。

BMIの分類では、低体重群が14名 (6.1%)、普通群は199名 (86.5%)、肥満群が17名 (7.4%)であった。%Fatの分類では、10%未満群が28名 (12.2%)、10~20%未満群が179名 (77.8%)、20%以上群は23名 (10.0%)であった。

#### 2. BMIと%Fatによる体型評価

実測BMIと%Fatとの相関係数は0.739であり (P<0.01)、図1に散布状況を示した。BMIの分類による%Fatの平均値は、低体重群10.2±2.2%、普通群14.2±3.4%、肥満群22.7±2.6%であった。

BMIの判定基準と%Fatによる分類との関係は、BMIで低体重群に分類される者のうち、%Fatで10%未満群は6名 (42.9%)であり、10~20%未満群が8名 (57.1%)であった。BMIで普通群では%Fat 10~20%未満群は170名 (85.4%)であり、%Fat 10%未満群が22名 (11.1%)、%Fat 20%以上群が7名 (3.5%)認められた。BMIで肥満群では、%Fat 20%以上群は16名 (94.1%)であったが、%Fat10

~20%未満群が1名 (5.9%)含まれていた (表2)。これをBMI1ポイント毎にみると、BMI

17未満では全員が%Fat 10%未満群があったが、17台では%Fat 10%未満群と10~20%未満群が半数、18、19台では%Fat 10~20%未満群が約80%を占め、20、21台ではさらに90%前後に増えていた。22台では%Fat 10~20%未満群が29名 (90.6%)であった。BMIの普通群のなかで%Fat 20%以上群は、22台に1名 (3.1%)、23台に2名 (10.0%)、24台に4名 (23.5%)含まれていた。BMI 25以上になると%Fat 20%以上群であるが、26台に%Fat 10~20%未満群が1名 (25%)が含まれていた (図2)。

#### 3. 体型認識

現在の体型を「太っている」と思っている者

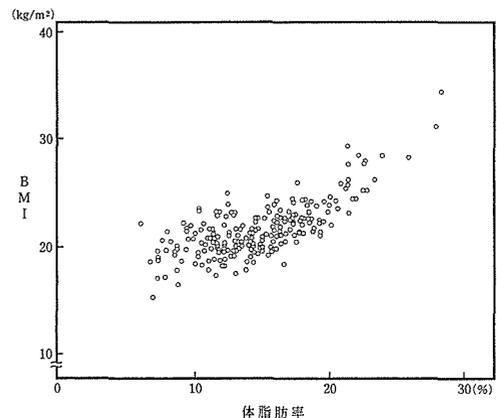


図1 BMIと体脂肪率の散布図

表2 BMIと体脂肪率との関係

	平均値±標準偏差	範囲
身長 (cm)	171.0±5.6	158.0~185.0
体重 (kg)	63.4±9.2	46.1~114.0
理想体重 (kg)	61.9±6.2	48.0~ 85.0
実測BMI (kg/m <sup>2</sup> )	21.7±2.6	15.3~ 34.8
理想BMI (kg/m <sup>2</sup> )	21.1±1.3	18.2~ 25.8
%Fat (%)	14.6±4.1	6.1~ 28.2

n = 230

\*\*P<0.01

BMI	人数 (%)		
	10%未満	10~20%未満	20%以上
低体重群	6 (42.9)	8 (57.1)	0 (0.0)
普通群	22 (11.1)	170 (85.4)	7 (3.5)
肥満群	0 (0.0)	1 (5.9)	16 (94.1)

「太っている」群)は93名(40.4%)で最も多く、「ちょうどよい」と思っている者(「ちょうどよい」群)は78名(33.9%),「やせている」と思っている者(「やせている」群)は59名(25.7%)であった。今後の体型への希望は「このままでよい」と思っている者(「このままでよい」群)が103名(44.8%),「やせたい」と思っている者(「やせたい」群)は88名(38.3%),「太りたい」と思っている者(「太りたい」群)が39名(17.0%)であった。

4. 体型評価と体型認識との関係

1) BMIと体型認識

BMIの分類と体型認識との関係は、肥満群では全員が「太っている」群であり、普通群では「ちょうどよい」群が77名(38.7%),「太っている」群が76名(38.2%),「やせている」群が46名(23.1%)であった。低体重群では「やせている」群が13名(92.9%),「ちょうどよい」群が1名(7.1%)であった(表3)。これをBMIの1ポイント毎にみると、17未満では全員が「やせている」群であり、17台では「やせている」群が87.5%,「ちょうどよい」群が12.5%

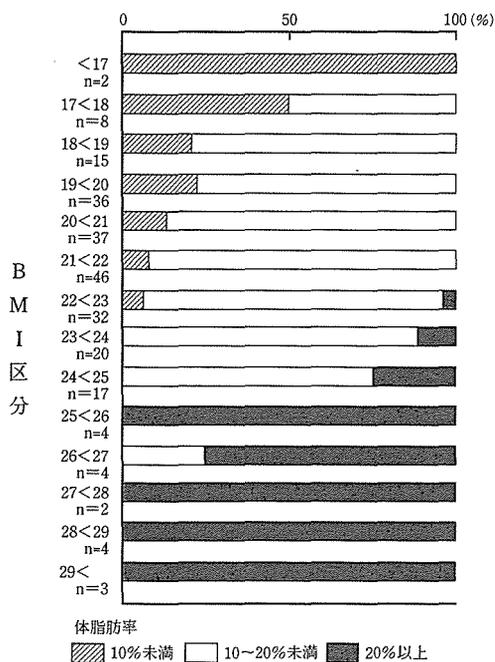


図2 BMIと体脂肪率との関係

であり、18台もほぼ同様の結果であった。19台では「やせている」群が61.1%,「ちょうどよい」群が36.1%,「太っている」群が2.8%含まれていた。20台では「ちょうどよい」群が56.8%であり「やせている」群と「太っている」群が21.6%と同率であり、21台では「ちょうどよい」群は20台と変わらないが、「太っている」群が32.6%に増え、「やせている」群が10.9%に減少していた。22台では「太っている」群が56.3%に増え、24以上になると全員が「太っている」群であった(図3)。

2) %Fatと体型認識

体型認識別の%Fatの平均値を表4に示した。「太っている」群が17.6±3.7%,「ちょうどよい」群が13.6±2.9%,「やせている」群は11.3±2.6%で、「太っている」群が有意に高かった(P<0.01)。また、「やせたい」群は17.4±3.9%,「このままでよい」群が13.7±3.0%,「太りたい」群は10.9±2.7%で、「やせたい」群が有意に高かった(P<0.01)

%Fatの分類と体型認識との関係を見ると、%Fat 20%以上群では「太っている」群が22名(95.6%),「ちょうどよい」群が1名(4.3%)であった。%Fat 10~20%未満群では「太っ

表3 体型評価と体型認識との関係

体型評価	人数 (%)			
	太っている	ちょうどよい	やせている	
BMI	低体重群	0 (0.0)	1 (7.1)	13 (92.9)
	普通群	76 (38.2)	77 (38.7)	46 (23.1)
	肥満群	17 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
体脂肪率	10%未満	0 (0.0)	9 (32.1)	19 (67.9)
	10~20%未満	71 (39.7)	68 (38.0)	40 (22.3)
	20%以上	22 (95.6)	1 (4.3)	0 (0.0)

ている」群が71名 (39.7%), 「ちょうどよい」群が68名 (38.0%), 「やせている」群が40名 (22.3%)であった。%Fat 10%未満群は「やせている」群が19名 (67.9%), 「ちょうどよい」群が9名 (32.1%)であった(表3)。これを%Fat 2ポイント毎にみると,%Fat 8%未満では81.8%が「やせている」群であり,%Fat 8~10%未満では「やせている」群が58.8%に減少し,「ちょうどよい」群が41.2%であった。%Fat 10~12%未満では「やせている」群が42.1%,「ちょうどよい」群が34.2%に減り,「太っている」群が23.7%含まれていた。%Fat 12~14%未満では「やせている」群が37.8%に減り,「ちょうどよい」群が48.6%で,「太っている」群が13.5%含まれていた。%Fat 14~16%未満では「ちょうどよい」群は45.5%,「やせている」群が20.5%で,「太っている」群は34.1%に増えていた。%Fat 16~18%未満では「太っている」群が62.2%に増加し「ちょうどよい」群が35.1%,%Fat 18~20%未満では「太っている」群が82.6%となり,「ちょうどよい」群は17.4%であった。%Fat

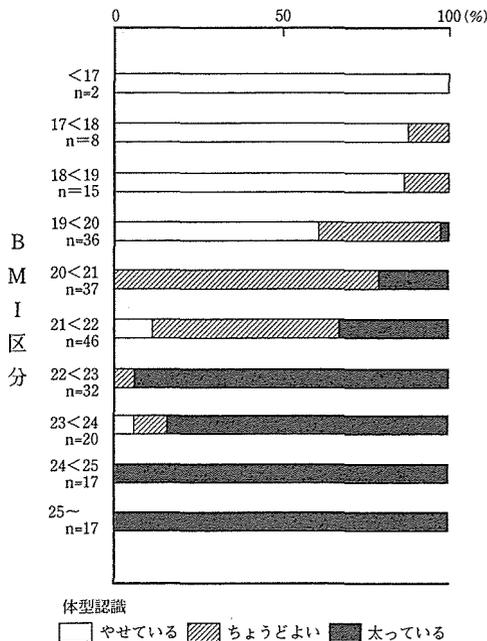


図3 BMIと体型認識との関係

20~22%未満では「太っている」群が92.3%となり,%Fat 22%以上では全員が「太っている」群であった(図4)。

5. 実測BMIと理想BMI

実測BMIと理想BMIが同値の者は7名(3.0%)で,理想BMIが高い者は82名(35.7%),一方,実測BMIより理想BMIが低い者は141名(61.3%)であった。

1) 体型認識と実測BMIと理想BMI

体型認識別に実測および理想BMIの平均値を表5に示した。実測BMIは「太っている」群23.6±2.5,「ちょうどよい」群21.0±1.2,「やせて

表4 体脂肪率の平均値  
—体型認識別—

	太っている (n=93)	ちょうどよい (n=78)	やせている (n=59)
%Fat(%)	17.6±3.7 (10.0~28.0)	13.6±2.9 (6.1~20.0)	11.3±2.6 (6.9~17.0)

分散分析表

[%Fat]					
要因	平方和	自由度	平均平方和	F値	P値
群間	1583.0	2	791.5	78.9	0.000
群内	2278.3	227	10.0		
合計	3861.2	229			

—体型希望別—

	やせたい (n=88)	このままでよい (n=103)	太りたい (n=39)
%Fat(%)	17.4±3.9 (8.3~28.0)	13.7±3.0 (7.4~23.0)	10.9±2.7 (6.1~17.0)

分散分析表

[%Fat]					
要因	平方和	自由度	平均平方和	F値	P値
群間	1338.6	2	669.3	60.2	0.000
群内	2522.6	227	11.1		
合計	3861.2	229			

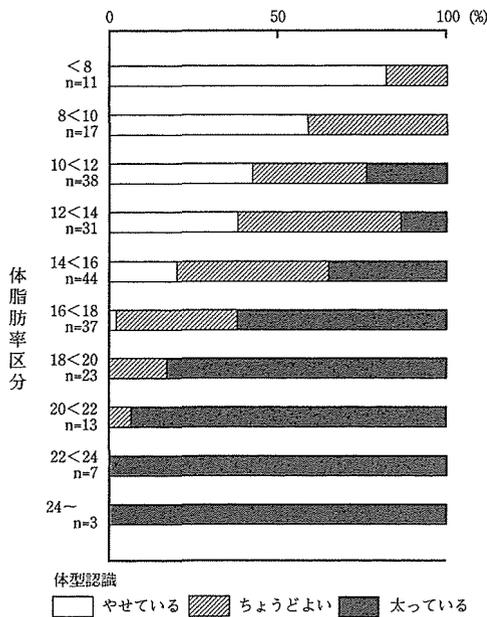


図4 体脂肪率と体型認識との関係

表5 実測BMIと理想BMIの平均値  
—体型認識別—

BMI	体型認識		
	太っている (n=93)	ちょうどよい (n=78)	やせている (n=59)
実測	23.6±2.5 (19.8~34.8)	21.0±1.2 (18.0~23.6)	19.4±1.4 (15.3~23.2)
理想	21.4±1.3 (18.4~25.6)	20.8±1.3 (18.2~25.8)	21.1±1.4 (18.3~25.7)

分散分析表

[実測BMI]

要因	平方和	自由度	平均平方和	F値	P値
群間	683.994	2	341.99	95.466	0.000
群内	813.203	227	3.582		
合計	1497.198	229			

[理想BMI]

要因	平方和	自由度	平均平方和	F値	P値
群間	14.790	2	7.395	4.173	0.017
群内	402.309	227	1.772		
合計	317.945	229			

—体型希望別—

BMI	体型希望		
	やせたい (n=88)	このままでよい (n=103)	太りたい (n=39)
実測	23.6±2.6 (19.6~34.8)	20.8±1.4 (17.8~27.9)	19.4±1.8 (15.3~23.6)
理想	21.3±1.3 (18.4~25.2)	20.8±1.2 (18.2~25.7)	21.8±1.6 (19.0~25.8)

分散分析表

[実測BMI]

要因	平方和	自由度	平均平方和	F値	P値
群間	583.997	2	291.98	72.580	0.000
群内	913.221	227	4.028		
合計	1497.198	229			

[理想BMI]

要因	平方和	自由度	平均平方和	F値	P値
群間	31.480	2	15.740	9.266	0.000
群内	385.619	227	1.669		
合計	417.099	229			

いる」群は19.4±1.4であった。理想BMIはそれぞれ21.4±1.3, 20.8±1.3, 21.1±1.4であった。実測BMIは「太っている」群が有意に高く (P<0.01), また理想BMIも「太っている」群が高かった (P<0.05)。さらに多重比較では「太っている」群と「ちょうどよい」群で差があった (P<0.05) が、「太っている」群と「やせている」群, 「ちょうどよい」群と「やせている」群の間には差がなかった。また, 体型の希望別では実測BMIは「やせたい」群は23.6±2.6, 「このままでよい」群は20.8±1.4, 「太りたい」群は19.4±1.8であり, 理想BMIはそれぞれ21.3±1.3, 20.8±1.2, 21.8±1.6であった。実測BMIは「やせたい」群が有意に高く (P<0.01), 理想BMIでは「太りたい」群が高かった (P<0.01)。さらに, 多重比較により「やせたい」群と「このままでよい」群, 「太りたい」群と「このままでよい」群には有意な差が

あったが (P<0.05), 「やせたい」群と「太りたい」群の間は有意な差ではなかった。

2) %Fatと実測BMIと理想BMI

%Fatの分類により両BMIの差をみると, %Fat 10%未満群では理想BMIが高い者が25名(89.3%)であり, 低い者が2名(7.1%), 同値の者は1名(3.6%)であった。%Fat 10%~20%未満群では, 理想BMIが低い者が116名(64.8%)であり, 高い者が57名(31.8%), 同値の者は6名(3.4%)であった。%Fat 20%以上群では全員が理想BMIが低かった。

%Fatの2ポイント毎に実測BMIと理想BMIの平均値を比較してみた(図5)。%Fat 14%未満では実測BMIより理想BMIが高かったが, %Fat 10~14%では両者には有意な差はなかった。%Fat 14%以上になると理想BMIが低く (P<0.01), %Fat 20%以上ではその差は大きく開いていた。実測BMIの平均値は, %Fat 16%以上で22以上, %Fat 20%以上で25以上であった。理想BMIは%Fat 18%未満でほぼ21, %Fat 20%以上でほぼ22であった。

IV. 考 察

青年期はライフサイクル上, 健康に対する自

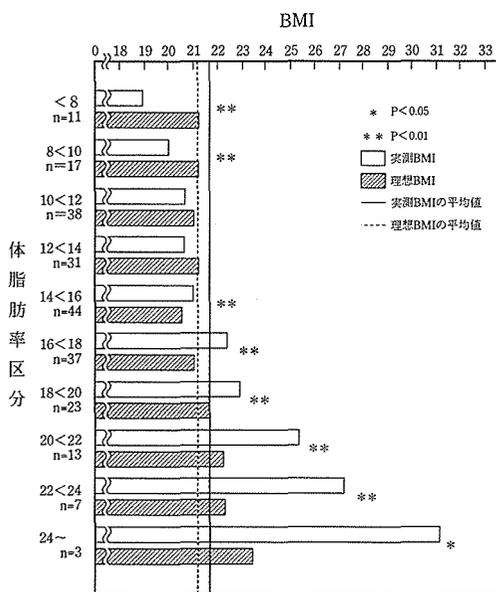


図5 体脂肪率区分による実測・理想BMI

己管理能力を身につける重要な時期である。青年期の健康状態が壮年期, 老年期に及ぼす影響は大きく, したがって, 青年期の学生の体型および体型認識を検討する意義は大きいといえる。

今回, %Fatの測定は近赤外線法によるBFT 3000 (ケット社製)を用いた。%Fatの測定で基準となるのは密度法である水中体重秤量法<sup>14)</sup>であるが, 実験室的な測定方法であり被験者への負担などからフィールドで測定するのは困難である。最近では簡便で非侵襲性の体脂肪測定器が使用<sup>15-17)</sup>されている。本器の測定値の精度や再現性などについて検討<sup>18-20)</sup>されており, 簡便性・携帯性・被験者への負担が少ないことから集団検診などフィールドにおいては有用な測定機器の一つと考える。

対象者の平均年齢は19.2歳, 身長, 体重およびBMIは同年齢者の全国的な平均値<sup>21)</sup>であり, 平均的な集団と判断された。青年期学生の%Fatは, 田中らの報告<sup>22)</sup>では, 水中体重秤量法13.1±6.2%, 皮下脂肪厚法による15.5±6.6%, インピーダンス法16.9±4.9%で測定方法による違いがあり, 本対象者は水中体重秤量法による測定値に近かった。%Fatで77.8%の者が10~20%未満群であり, またBMIの判定においても86.5%が普通群の者であった。一方, %Fatで肥満と判定される者は12.2%, BMIでは7.4%であった。平成10年度国民栄養調査結果<sup>23)</sup>ではBMIの判定基準による肥満者の割合は15~19歳で11.4%であり, 本対象者のほうが肥満者の割合は少なかった。

BMIと%Fatとの間には高い相関関係があったが, BMIで普通群であるが%Fatでは20%以上の者が3.5%含まれており, BMIの1ポイント毎の検討では, 普通群のなかの22~25未満の範疇で%Fat 20%以上の者が含まれていた。つまり正常体重者であるが, %Fatが多い, いわゆる「隠れ肥満」のタイプである。一方, BMIで肥満群であるが, %Fatで10~20%未満群が5.9%が含まれていた。つまり, 過体重であるが%Fatが少ない, いわゆる「筋肉質」のタイプである。上濱ら<sup>24)</sup>もインピーダンス法によ

て測定した%Fatで同様の結果を報告しており、肥満なのに肥満を見過ごされたり、肥満でもない者が肥満と判定されたりなどBMIのみでは適正に肥満を評価できない結果であった。「隠れ肥満」は、高脂血症や肝機能異常との関連も指摘<sup>25-27)</sup>されており、生活習慣の見直しなど健康指導を行うためにも%Fat測定による適正な体型の評価が重要である。

自分の体型について「太っている」群は40.4%、「ちょうどよい」群は33.9%、「やせている」群は25.7%であった。大学生を対象にした青山<sup>8)</sup>の研究では、「太っている」群が1975年は17%から1989年には28%へ増え、「やせている」群は60%から38%と減っていた。10年後の本研究では、「太っている」という肥満意識はさらに強くなり、「やせている」という認識が減っており、平成10年度国民栄養調査結果<sup>29)</sup>においても同様の結果が報告されている。女性のやせ願望は社会現象であるが、男子においても低体重志向者が増えているという結果であった。

以上のように、肥満意識が強くなっているが、BMIと体型認識との関係では、普通群では「ちょうどよい」と適正に評価している者が38.7%、「太っている」と過大に評価する者は38.2%、「やせている」と過小に評価する者が23.1%であった。日本肥満学会はBMIが22になる体重を標準体重として提唱している<sup>28)</sup>が、男子は22台は「太っている」群と「ちょうどよい」群がほぼ半数の割合であり、標準体重に対する男子の体型観が示された。%Fatと体型認識との関係では、%Fat 10~20%未満群では、「太っている」と過大に評価する者が39.7%で、「ちょうどよい」と評価する者(38.0%)より若干多く、また、「やせている」と過小に評価する者も22.3%含まれていた。これを2ポイント毎に検討すると、%Fat 10~12%で「太っている」群が23.7%含まれており、%Fat 14~16%では34.1%、%Fat 16~18%では62.2%に増加しており、%Fat 15%前後より「太っている」と認識している傾向であった。このようにBMIおよび%Fatと体型認識との関

係では、高体重志向とともにやせ願望による低体重志向という結果であり、男子の傾向と考えられる。

体型認識による実測BMIと%Fatの平均値ではいずれも「太っている」群および「やせたい」群の値が有意に高く、重さを実感した結果と考えられる。

体型と体型認識にズレがあるが、青年期の男性がどのような体型を理想としているかを理想体重から算出したBMIで検討した。理想BMIは21.1であり、標準体重として提唱されている22より若干低い値であった。%Fatの2ポイント毎の理想BMIの平均値では、%Fat 18%未満の者はほぼ21、%Fat 20%以上の者はほぼ22であった。%Fatが22%以上は全員が「太っている」群であるが、%Fat 22~24%ではほぼ22、%Fat 24%以上では23と現実の体重を考慮した体重を設定していると考えられた。したがって、理想BMIは%Fat 18%前後で2分されており、現実の体重を考慮した、標準体重に近い値を理想としていると考えられる。また、認識別および希望別での理想BMIは、「太っている」群と「やせている」群において、また「やせたい」群と「太りたい」群のそれぞれにおいて有意な差はなく、BMI 21~22が青年期男子の理想とする体型と推測された。

## V. 結 論

男子学生230名を対象に体型と体型認識についてBMIおよび近赤外線法による%Fatを用いて検討した。

1. BMIと%Fatによる体型評価では、BMIで普通群であるが%Fatで20%以上に属する者が3.5%認められた。つまり、隠れ肥満のタイプである。一方、BMIで肥満群であるが%Fat 10~20%未満群に属する者が5.9%認められた。つまり、筋肉質のタイプである。このように、BMIのみでは適正に体型を評価できず、%Fatの測定の重要性を確認した。
2. 「太っている」と認識している者は40.4%であったが、実際に肥満と判定される者は

BMIでは18.3%で、%Fatでは23.7%であり、認識との間には大きな乖離がみられた。

3. BMIの普通群において、「ちょうどよい」と適正に評価している者が38.7%、「太っている」と過大に評価する者は38.2%、「やせている」と過小に評価する者が23.1%であった。また、%Fat 10~20%未満群で「ちょうどよい」と評価する者は38.0%であったが、「太っている」が39.7%、「やせている」が22.3%であり、このように、BMIおよび%Fatと体型認識との関係では、低体重志向とともに高体重志向という結果であった。
4. 理想体重から求めたBMIは21.1で、標準体重よりやや低い値であった。%Fat 18%未満ではほぼ理想体重によるBMIは21、%Fat 20%以上ではほぼ22であり、現実体重を考慮して理想体重を設定していると考えられ、BMI 21~22が青年期男子の理想とする体型と推測された。

#### 文 献

- 1) Havighurst, R.J. 1953, 荘司雅子訳：人間の発達課題と教育, pp 274-301, 牧書店, 1958
- 2) 佐々木温子, 池田義雄, 後藤美帆, 他：20・30歳代におけるBMI増加からみた適正体重, 肥満研究, 3 : 114-118, 1997
- 3) 福永茂, 小林慧歩：女子大学生の体重認識, 学校保健研究, 35 : 96-404, 1993
- 4) 木田和幸, 田伏千代子, 真野由紀子, 他：思春期女子の体型認識と理想像, 学校保健研究, 37 : 561-566, 1994
- 5) 池田千代子, 遠藤伸子：女子学生のボディ・イメージの意識調査, 保健の科学, 40 : 567-572, 1998
- 6) 白石龍生：女子学生の「やせ願望」と減量に関する知識との関連, 思春期学, 17 : 460-465, 1999.
- 7) 橋本勲, 小幡夏子：若い女性の適正体重とダイエットの現状, 母子保健情報, 40 : 24-30, 1999
- 8) 青山昌二, 平田久雄, 杉山進：学生の身体意識に関する一考察. 東京大学教養学部体育学紀要, 24 : 25-32, 1990
- 9) 金本めぐみ, 鷺尾滯子：大学生の身体意識に関する研究, 上智大学体育紀要23 : 63-77, 1989.
- 10) 古川裕, 澤田淳：中・高・大学生のボディ・イメージ, 小児科診療, 58 : 1946-1952, 1995
- 11) 松澤佑次, 井上修二, 坂田利家, 他：新しい肥満の判定と肥満症の診断基準, 肥満研究, 6 : 18-27, 2000
- 12) Conway J.M, Norris K.H, Bodwell C.E: A new approach for the estimation of body composition: infrared interactance. Am. J. Clin. Nutr. 1984, 40 : 1123-1130.
- 13) Huenemann R.L, Hampton M.C, Shapiro L.R et al. Adolescent food practices associated with obesity. Federation Proceedings 1966 ; 25 : 4 - 10.
- 14) Brozek J, Grande F, Anderson J.T, et al. Densitometric analysis of body composition: Revision of some quantitative assumptions. Ann. N. Y. Acad. Sci. 1963 ; 110 : 113-140.
- 15) 阪本要一, 佐藤富男, 愛敬光代, 他：生体インピーダンス法による体脂肪の評価, 第12回日本肥満学会記録, 279-280, 1991
- 16) 中塘二三生, 田中喜代次, 羽間鋭男, 他：Bioelectrical Impedance法による日本女性の身体組成評価, 体力科学, 39 : 164-172, 1990
- 17) 稲上三佐子, 吉村学, 佐野敦, 他：両掌間誘導BI法体脂肪計の健診スクリーニング指標としての有用性検討, 肥満研究, 5 : 110-114, 1999
- 18) 澤井史穂, 白山正人, 武藤芳照, 他：近赤外分光法による体脂肪測定, 体力科学, 39 : 155-163, 1990
- 19) 勝野久美子, 西山久美子, 浦田秀子, 他：近赤外線法, インピーダンス法と水中体重法による体脂肪率の比較, 第13回日本肥満学会記録, 250-252, 1992
- 20) 大野誠, 池田義雄：簡易体脂肪測定法の比較, 肥満研究, 6 : 168-172, 1998
- 21) 健康・栄養情報研究会編：国民栄養の現状 平成10年国民栄養調査結果, pp 105-106, 第一

- 出版, 東京, 2000
- 22) 田中茂穂, 松坂晃, 服部恒明: 水中体重秤量法と比較した各種身体組成測定法による肥満判定精度, *肥満研究*, 6 : 168-172, 2000
- 23) 健康・栄養情報研究会: 国民栄養の現状 平成10年国民栄養調査結果, pp 29-64, 第一出版, 東京, 2000
- 24) 上濱龍也, 西村千尋, 中田健次郎: 青年期男女の肥満判定尺度としてのBody Mass Indexの妥当性, *教育医学*, 44 : 572-576, 1999
- 25) 藤瀬武彦, 長崎浩爾: 青年男女における隠れ肥満者の頻度と形態的及び体力的特徴, *体力科学*, 48 : 631-640, 1999
- 26) 梶岡多恵子, 大沢功, 吉田正, 他: 女子高校生における正常体重肥満者に関する研究—いわゆる隠れ肥満者の身体的特徴とライフスタイルについて—, *学校保健研究*, 38 : 263-269, 1996
- 27) 百瀬義人, 畝 博: 青年期学生の体脂肪率と生活習慣および食習慣との関連, *学校保健研究*, 40 : 151-158, 2000
- 28) 徳永勝人, 松澤佑次, 小谷一晃, 他: 種々の合併症を考慮した理想体重, 第9回日本肥満学会記録, 236-238, 1988
- (受付 01. 5. 16 受理 01. 8. 23)  
連絡先: 〒852-8520 長崎市坂本1-7-1  
長崎大学医学部保健学科看護学専攻  
(浦田)

原 著

中学生の意欲低下とCDIスコア, 心身症状  
および家族関係との関連

堀 篤 実

大垣女子短期大学幼児教育科

The Background of Junior High School Students  
with Little Interest in Activity :  
The Relations between CDI Score, Psychosomatic Complaints and Family

Atsumi Hori

*Ogaki Women's College Department of Preschool Education*

We performed a survey on the social and domestic background of children who had little interest in activities. We investigated the relationship between their indifference or apathy and their depression or psychosomatic complaints. Also, we investigated the influence their family had on each of them and considered the role their family played in the development of their condition. The subjects were 531 junior high school students (269 boys and 262 girls) in 1998. The following results were obtained : 1) the mean Children's Depression Inventory (CDI) score for children with little interest in activities was significantly higher than others ; 2) children with little interest in activities had significantly more psychosomatic complaints, especially students in second year junior high school ; and, most importantly, 3) irritability was the significant predictor of junior high school boys with little interest in activities, while headaches were of girls ; 4) girls with little interest in activities had unfavorable ideas about their parents, in particular, they thought poorly of their mothers ; 5) junior high school girls with little interest in activities thought their fathers didn't understand them and felt their mothers expected too much of them. We concluded that parents have a very important role in preventing children from having difficulties, and that children's complaints, such as irritability and headaches might be indicators of children at risk.

---

Key words : apathy and indifference, junior high school students, family, psychosomatics

意欲低下, 中学生, 家族, 心身症状

---

## I. はじめに

近年, 子どもの数は減少しているにもかかわらず, 不登校児童・生徒の数は増加している<sup>1)</sup>ことが報告されている。不登校は, 子ども達の活動意欲が低下していることとも強く関連しているものと思われる。意欲は人が様々な活動・

経験をする源であり, 子ども達は様々な経験を通して, 発達・成長していく。そのため, 子どもの意欲低下は早急にその原因を明確にし, 対応することが望まれる。また, 最近, 子どものストレスは増加傾向にある<sup>2)</sup>という報告や, 不定愁訴ともいべき様々な心身に関する訴えが, 子どもたちの間でも増加しているという先行研

究<sup>3,4)</sup>もあり、児童・思春期を取り巻く精神保健の重要性が注目されてきている。抑うつは最もかかりやすい現代のこころの病と言われ<sup>5)</sup>、精神的健康の指標として使われることも多い<sup>6)</sup>。そこで、筆者ら<sup>7)</sup>はこれまでに小学生を対象に、意欲低下や抑うつ気分および不定愁訴について調査をおこない、これらが深くかかわっていることを明らかにしてきた。

このような子ども達の問題に関しては、家族・家庭の影響が大きなウエイトを占めていると考えられる。しかしながら、家族社会学および発達心理学におけるこれまでの親子関係研究の多くは、対象となる子どもの年齢が乳幼児期に集中しており、思春期の子どもと親に関する研究はあまり注目されてこなかった<sup>8)</sup>。精神保健の研究において先駆的な米国においても、思春期の子どもとその親の養育行動の研究はそれほど古いものではない。この背景には、思春期は親から精神的に独立し始める時期に相当し、親からの自立は一つの発達課題とされ、親離れの遅れは発達課題がうまく乗り越えられていないと考えられていた<sup>9)</sup>ことがある。しかしながら、1980年以降、米国内で思春期の子どもとその家族関係に対する関心が高まり、研究の質・量ともに大きな発展をとげ、現在にいたっている<sup>10)</sup>。1980年以降におこなわれた思春期段階の親子関係研究が明らかにしたことは、思春期になっても親子関係のありようが子どもに大きな影響を及ぼしていることであった<sup>11)-13)</sup>。親子関係というのは乳幼児の頃やある特定の時期のみに重要な役割を果たすのではなく、人間が成長・発達していく過程で、絶えず大きな影響を及ぼし続けているものと思われる。

わが国において、親子関係を含む子どもを取り巻く家庭環境は、近年急激な変化に直面しているといわれている。核家族の増加、出生率の低下によるきょうだいの減少などからくる家族の少数化や、女性の有職率の増加、家事労働の外部化、住宅事情の変化など、社会文化的背景の変化も著しく、このような家庭の機能、家族の役割の変化が、子どもの発達に何らかの影響

を及ぼしているのではないかとと思われる。

そこで今回、中学生を対象とした調査により、思春期における子どもの意欲低下の背景を明らかにすることを目的とし、1) 意欲低下と抑うつ傾向の関連、2) 意欲低下と心身症状の関連、3) 家庭環境が子どもの意欲に及ぼす影響を検討した。

## II. 対 象

岐阜県内A中学校に通う全校生徒を対象に調査をおこない、有効回答は中学1年生184名(男子98名, 女子86名), 中学2年生174名(男子86名, 女子88名), 中学3年生173名(男子85名, 女子88名)であった。調査は1998年11月, 学校のホームルーム時に担任を通して一斉に実施した。調査にあたり教師, 父母及び生徒に対し, 調査の目的を十分説明し, Informed consentを得た。

## III. 方 法

### 調査内容

#### 1) 意欲低下の生徒

子どもは自分の心理状態を言葉に表現しにくいと言われている。しかし、義務教育の期間である中学生にとって、登校意欲の有無は最も口にやすく、子どもの活動意欲を表現するものではないかと考えられる。また、あらゆることに對しやる気をなくすことや興味が持たなくなることは子ども達の活動を停滞させる深刻な状態である。このような危機に落ちると、子どもであれ自分の感情を何らかの形で表現し、感じ取ることができるものと思われる。そこで意欲の低下をみる指標として、「学校に行く気がしない」、「何もやる気がしない」、「何も興味がない」の3項目を選び、そのおのおのについて、各々「あり」、「なし」で回答を求めた。3項目についてひとつでも「あり」と回答した生徒は、日常生活における様々な場面で意欲低下の疑いのある群(以下「意欲低下群」とする)とし、それ以外、つまり、「学校に行く気がしない」、「何もやる気がしない」、「何も興味があ

てない」の3項目についていずれも「ない」と回答した生徒は非意欲低下群とした。

## 2) 抑うつ評価

抑うつ状態を評価するための質問紙は、Kovacs<sup>14)</sup><sup>15)</sup>が作成した小児抑うつ調査票Children's Depression Inventory (以下「CDI」と略)の日本語版<sup>16)</sup>を使用した。最近2週間の状況に関する27の質問項目について生徒自身が回答した。各々の項目ごとに3択になっており、得点は抑うつ傾向の低いものから高いものへと順に0点，1点，2点となる。27項目を点数化し，合計したものをCDIスコアと呼び，このCDIスコアが高いほど抑うつ傾向が強いことを示す。

## 3) 心身症状の調査

心身症状に関しては，NHK世論調査部<sup>17)</sup>や田中ら<sup>18)</sup>における調査をもとに身体状態としては，「吐き気」，「腹痛」，「肩こり」，「立ちくらみ」，「頭痛」，「便秘・下痢」，「息苦しい」の7症状，精神状態としては，「思い切り暴れまわりたくなる」，「大声を出したくなる」，「何でもないのにイライラする」，「すぐ不安になる」の4症状を選び，それぞれ，「あり」，「なし」で回答を求めた。

## 4) 家庭環境調査

家庭環境および子どもと両親の家庭内での接触時間の指標として，家族形態（同居者，きょうだい数），母親の仕事の有無，父親の帰宅時間について回答を求めた。

## 5) 父親・母親に対するイメージの調査

自我同一性の獲得や自立が期待される年齢において，父親・母親に対し子どもが抱く肯定的あるいは否定的感情は発達に大きな影響を及ぼすものと思われる。そこで父親・母親に対するイメージの調査として，父親，母親各々が，「自分のことを理解してくれているか」，「自分の将来や勉強，スポーツの成績について期待しているか」，子どもから見て「親の生活は生きがいがあるか」，「親のような大人になりたいか」の4項目について「はい」，「いいえ」で回答を求めた。

## 統計的検討

各学年での意欲の低下が疑われる生徒の割合について男女別にカイ二乗検定で比較した。

また，意欲低下群と非意欲低下群の2群間で以下の比較を行った。

- 1) 平均CDIスコアを一元配置分散分析で比較した。
- 2) 11項目の心身症状に関し，「ある」と訴えた学童の割合について，各症状ごとにカイ二乗検定で比較した。
- 3) 意欲低下群について，非意欲低下群を対照として，男女別に多重ロジスティック分析を実施した。独立変数としては，学年および心身症状の「吐き気」，「腹痛」，「肩こり」，「立ちくらみ」，「頭痛」，「便秘・下痢」，「息苦しい」，「暴れまわりたくなる」，「大声を出したくなる」，「イライラする」，「不安になる」の11項目（あり・なし）を採用した。
- 4) 同居者，きょうだい数，母親の仕事の有無，父親の帰宅時間，父親・母親のイメージに関する質問についてもそれぞれカイ二乗検定で比較した。
- 5) 意欲低下群について，非意欲低下群を対照として，男女別に多重ロジスティック分析を実施した。独立変数としては，学年および父親・母親イメージの「自分のことを理解してくれているか」，「自分の将来や勉強，スポーツの成績について期待しているか」，「親の生活は生きがいがあるか」，「親のような大人になりたいか」の4項目（はい・いいえ）を父親・母親別に採用した。

## IV. 結果

### 1) 意欲低下群の割合

対象生徒の内，意欲低下群の割合は，中学1年生では男子6.1%，女子10.5%，2年生では男子27.9%，女子23.9%，3年生では男子23.5%，女子19.3%であった（表1）。男子において意欲低下が疑われた生徒の割合に学年差が認められ，2年生，3年生は1年生に比べ有

意に割合が高くなっていった ( $p < 0.01$ ) が、女子には学年差は認められなかった。また、いずれの学年においても意欲低下群の割合に男女差は認められなかった。

## 2) 2群の性別学年別CDIスコア

男女別の意欲低下群と非意欲低下群のCDIスコアの結果を各学年毎に表2に示した。意欲低下群のスコアは1年生男子では $23.5 \pm 6.0$ であり、1年生女子では $21.6 \pm 10.0$ であった。同様に2年生男子では $18.8 \pm 5.4$ であり、2年生女子では $20.7 \pm 6.1$ であった。また、3年生男子では $19.2 \pm 7.9$ であり、3年生女子では $21.4 \pm 7.9$ であった。いずれの学年においても男子および女子ともに意欲低下群のCDIスコアは非意欲低下群より有意に高かった (すべて $p < 0.01$ )。

## 3) 2群の身体的症状・精神的症状について

身体的症状(7項目)と精神的症状(4項目)について、「ある」と訴えた生徒の割合を意欲低下群、非意欲低下群別に表3に示した。

1年生男子では「頭が痛くなる」、「何でもないのにイライラする」という訴えは意欲低下群において多く (いずれも $p < 0.05$ )、「頭痛」を訴えた生徒は非意欲低下群では48.9%であったのに対し、意欲低下群では全員が頭痛を訴えていた。1年生女子では「便秘または下痢をする」という訴えは非意欲低下群の26.0%に対し、意欲低下群では77.8%で有意に多かった ( $p <$

0.01)。同様に2年生男子では「頭が痛くなる」、「急に息苦しくなる」、「思いきり暴れまわりたくなる」、「大声を出したくなる」、「何でもないのにイライラする」、「すぐ不安になる」という6症状について意欲低下群は非意欲低下群に比べ症状を訴える割合が高くなっていった (順に $p < 0.05$ ,  $p < 0.05$ ,  $p < 0.01$ ,  $p < 0.01$ ,  $p < 0.01$ ,  $p < 0.05$ )。2年生女子では「肩がこる」、「立ちくらみやめまいがする」、「頭が痛くなる」、「思いきり暴れまわりたくなる」、「大声を出したくなる」という5症状について、意欲低下群で訴える割合が高かった (順に $p < 0.01$ ,  $p < 0.01$ ,  $p < 0.01$ ,  $p < 0.05$ )。また3年生男子では身体的及び精神的症状のいずれにおいても意欲低下群と非意欲低下群の2群間には症状を訴える割合に有意な差は認められなかったものの、3年生女子では「頭が痛くなる」という症状について非意欲低下群では50.7%の生徒が訴えたのに対し、意欲低下群では82.4%もの生徒が訴えており、有意な差が認められた ( $p < 0.01$ )。

## 4) 心身症状と意欲低下との関連性

心身症状に関する多重ロジスティック分析の結果を表4に示した。男子では、意欲低下と有意に関連する症状は「何でもないのにイライラする」であり、学年が上がることも意欲低下と有意に関係していた。意欲低下を示す男子生徒

表1 対象者の意欲低下群と非意欲低下群の内訳 N (%)

	1年生		2年生		3年生	
	意欲低下群	非意欲低下群	意欲低下群	非意欲低下群	意欲低下群	非意欲低下群
男子	6(6.1)	92(93.9)	24(27.9)**	62(72.1)	20(23.5)**	65(76.5)
女子	9(10.5)	77(89.5)	21(23.9)	67(76.1)	17(19.3)	71(80.7)

$\chi^2$ 検定による意欲低下群の割合の学年差 \*\*:  $p < 0.01$

表2 意欲低下群と非意欲低下群におけるCDIスコア

	1年生		2年生		3年生	
	意欲低下群	非意欲低下群	意欲低下群	非意欲低下群	意欲低下群	非意欲低下群
男子	$23.5 \pm 6.0^{**}$	$12.4 \pm 5.5$	$18.8 \pm 5.4^{**}$	$12.1 \pm 5.7$	$19.2 \pm 7.9^{**}$	$12.1 \pm 5.7$
女子	$21.6 \pm 10.0^{**}$	$14.3 \pm 6.6$	$20.7 \pm 6.1^{**}$	$14.2 \pm 5.2$	$21.4 \pm 7.9^{**}$	$14.2 \pm 5.2$

非意欲低下群を対照とした t 検定 \*\*:  $p < 0.01$

表3 意欲低下群・非意欲低下群における心身症状を訴えた生徒の数および割合

	男子				女子			
	意欲低下群		非意欲低下群		意欲低下群		非意欲低下群	
	N	%	N	%	N	%	N	%
中学1年生								
吐き気・気分が悪い	4/6	66.7	38/92	41.3	6/9	66.7	26/77	33.8
腹痛	3/6	50.0	57/92	62.0	8/9	88.9	48/77	62.3
肩こり	4/6	66.7	27/92	29.3	7/9	77.8	38/77	49.4
立ちくらみ・めまい	3/6	50.0	41/92	44.6	7/9	77.8	50/77	64.9
頭痛	6/6	100.0*	45/92	48.9	7/9	77.8	40/76	52.6
便秘・下痢	2/6	33.3	26/92	28.3	7/9	77.8**	20/77	26.0
息苦しくなる	2/6	33.3	3/91	3.3	2/9	22.2	9/77	11.7
思い切り暴れまわりたくなる	5/6	83.3	37/92	40.2	6/9	66.7	30/76	39.5
大声を出したくなる	4/6	66.7	33/92	35.9	7/9	77.8	32/77	41.6
何でもないのにイライラする	5/6	83.3*	31/92	33.7	6/9	66.7	23/77	29.9
すぐ不安になる	4/6	66.7	39/92	42.4	8/9	88.9	43/77	55.8
中学2年生								
吐き気・気分が悪い	12/24	50.0	26/62	41.9	10/21	47.6	20/67	29.9
腹痛	18/24	75.0	33/62	53.2	15/21	71.4	39/67	58.2
肩こり	13/24	54.2	22/62	35.5	16/21	76.2**	29/67	43.3
立ちくらみ・めまい	13/24	54.2	29/62	46.8	15/21	71.4**	26/67	38.8
頭痛	18/24	75.0*	31/62	50.0	16/21	76.2**	28/67	41.8
便秘・下痢	10/24	41.7	25/62	40.3	8/20	40.0	13/67	19.4
息苦しくなる	6/24	25.0*	5/62	8.1	3/21	14.3	7/67	10.4
思い切り暴れまわりたくなる	19/24	79.2**	25/62	40.3	14/21	66.7**	20/67	29.9
大声を出したくなる	18/24	75.0**	23/62	37.1	14/21	66.7*	25/67	37.3
何でもないのにイライラする	20/24	83.3**	28/62	45.2	15/21	71.4	34/67	50.7
すぐ不安になる	17/24	70.8*	27/62	43.5	15/21	71.4	35/67	52.2
中学3年生								
吐き気・気分が悪い	9/20	45.0	29/65	44.6	9/17	52.9	30/71	42.3
腹痛	15/20	75.0	38/65	58.5	12/17	70.6	48/71	67.6
肩こり	9/20	45.0	32/65	49.2	11/17	64.7	35/71	49.3
立ちくらみ・めまい	14/20	70.0	33/65	50.8	10/17	58.8	49/71	69
頭痛	12/20	60.0	27/65	41.5	14/17	82.4**	36/71	50.7
便秘・下痢	6/20	30.0	20/64	31.3	6/17	35.3	24/69	34.8
息苦しくなる	6/20	30.0	15/65	23.1	7/17	41.2	15/71	21.1
思い切り暴れまわりたくなる	13/20	65.0	38/65	58.5	14/17	82.4	43/71	60.6
大声を出したくなる	13/20	65.0	36/65	55.4	13/17	76.5	43/71	60.6
何でもないのにイライラする	13/20	65.0	27/65	41.5	12/17	70.6	45/71	63.4
すぐ不安になる	8/20	40.0	32/65	49.2	11/17	64.7	42/71	59.2

非意欲低下群を対照とした t 検定 \*\* :  $p < 0.01$ , \* :  $p < 0.05$ 

がイライラすると訴えるオッズ比は，そうでない群に比べて2.73倍であった。また女子では，意欲低下と有意に関連する症状は「頭が痛くな

る」であり，1年生から2年生へ学年が上がることも意欲低下と有意に関係していた。意欲低下を示す女子生徒が頭痛を訴えるオッズ比は，

表4 心身症状に関するロジスティック分析結果

男子		オッズ比	(95%信頼区間)
吐き気	なし	1.000	
	あり	0.645	(0.293, 1.420)
腹痛	なし	1.000	
	あり	1.450	(0.621, 3.388)
肩こり	なし	1.000	
	あり	1.252	(0.612, 2.563)
めまい・立ちくらみ	なし	1.000	
	あり	1.137	(0.553, 2.337)
頭痛	なし	1.000	
	あり	2.202	(0.970, 4.999)
便秘・下痢	なし	1.000	
	あり	0.555	(0.246, 1.249)
息が苦しい	なし	1.000	
	あり	1.327	(0.537, 3.277)
暴れまわりたい	なし	1.000	
	あり	1.455	(0.576, 3.676)
大声を出したい	なし	1.000	
	あり	1.698	(0.711, 4.055)
イライラする	なし	1.000	
	あり	<u>2.728</u>	<u>(1.182, 6.297)</u>
不安になる	なし	1.000	
	あり	1.042	(0.491, 2.211)
学年	1	1.000	
	2	<u>5.159</u>	<u>(1.879, 14.165)</u>
	3	<u>3.903</u>	<u>(1.374, 11.083)</u>
女子			
吐き気	なし	1.000	
	あり	0.915	(0.414, 2.025)
腹痛	なし	1.000	
	あり	0.987	(0.403, 2.416)
肩こり	なし	1.000	
	あり	1.843	(0.857, 3.967)
めまい・立ちくらみ	なし	1.000	
	あり	1.008	(0.446, 2.282)
頭痛	なし	1.000	
	あり	<u>2.968</u>	<u>(1.269, 6.943)</u>
便秘・下痢	なし	1.000	
	あり	1.748	(0.827, 3.695)
息が苦しい	なし	1.000	
	あり	1.024	(0.412, 2.545)
暴れまわりたい	なし	1.000	
	あり	2.217	(0.862, 5.704)
大声を出したい	なし	1.000	
	あり	1.311	(0.511, 3.360)
イライラする	なし	1.000	
	あり	1.040	(0.426, 2.540)
不安になる	なし	1.000	
	あり	1.131	(0.484, 2.645)
学年	1	1.000	
	2	<u>2.991</u>	<u>(1.168, 7.655)</u>
	3	1.768	(0.685, 4.563)

そうでない群に比べて2.97倍であった。

### 5) 家族構成員について

同居している家族についておのおのの学年で意欲低下群、非意欲低下群の2群間で比較した結果では、いずれの学年においても男女とも有意な違いは認められなかった(表5)。

また、きょうだい数についてもおのおのの学年で比較するといずれの学年の男女においても、意欲低下群と非意欲低下群の両群には統計上の差はなかった(表6)。

### 6) 母親の有職率について

意欲低下群と非意欲低下群の母親が職業についている割合を比較すると、いずれの学年の男女においても9割弱の母親が何らかのの仕事に就いており、意欲低下群と非意欲低下群の両群には統計上の差はなかった。1年生で母親が職を持っていると回答した割合は意欲低下群で93.3%、非意欲低下群で84.4%であり、同様に2年生では意欲低下群で86.4%、非意欲低下群で82.3%、3年生では意欲低下群で86.5%、非意欲低下群で86.7%であった。この割合は全国における中学生の子どもを持つ母親の有職率<sup>19)</sup>と大差はなかった。

### 7) 父親の帰宅時間について

父親の帰宅時間の分布については、いずれの学年においても男女別の検討で意欲低下群と非意欲低下群の両群間に統計上の差はなかった(表7)。

### 8) 父親・母親のイメージ

父親・母親に対するイメージは表8に示すとおりで、1、2年生では男女とも父親・母親に関する質問項目で、意欲低下群・非意欲低下群の2群間では「はい」と回答する割合に有意な差は認められなかった。しかしながら、1年生の男子において、非意欲低下群の約4割は将来母親のような大人にはなりたいと答えたのに対し、意欲低下群では全員が将来母親のようにはなりたくないと答えていた。他方、3年生では、男女とも父親に対するイメージでは有意な差が認められなかったものの、母親については差が認められ、男子では「母親の生活は私から見て



表7 意欲低下群と非意欲低下群における父親の帰宅時間

平日・父親の帰宅時間	中学1年生			中学2年生			中学3年生					
	男子		女子	男子		女子	男子		女子			
	意欲低下群	非意欲低下群	意欲低下群	非意欲低下群	意欲低下群	非意欲低下群	意欲低下群	非意欲低下群	意欲低下群			
N	6	92	8	77	24	61	21	66	20	61	16	70
	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
18時以前	0.0	3.3	12.5	5.2	4.2	3.3	0.0	1.5	0.0	3.3	0.0	4.3
18時以降20時以前	66.7	48.9	37.5	51.9	29.2	50.8	66.7	53.0	45.0	54.1	43.8	54.3
20時以降22時以前	33.3	40.2	50.0	36.4	62.5	41.0	23.8	37.9	50.0	37.7	50.0	37.1
22時以降	0.0	6.5	0.0	6.5	4.2	4.9	9.5	6.1	5.0	4.9	6.3	4.3
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

生きがいがある」と答えた生徒の割合は非意欲低下群では62.1%であったのに対し、意欲低下群では27.8%と有意に低かった ( $p < 0.05$ )。また、「母親は私の将来や成績について期待している」についても、非意欲低下群では67.2%が「はい」と回答したのに対し、意欲低下群では「はい」と回答した生徒は40.0%と有意に低かった ( $p < 0.05$ )。女子では、「母親は私のことをわかってきている」について「はい」と答えた生徒の割合は、非意欲低下群では71.2%であったのに対し、意欲低下群では37.5%と有意に低かった ( $p < 0.01$ )。

9) 父親・母親イメージと意欲低下との関連性

父親・母親イメージに関する多重ロジスティック分析の結果を表9に示した。男子では意欲低下に関連する父親・母親イメージは認められなかった。女子では意欲低下と特に関連する父親・母親についてのイメージとしては「父親が自分のことを理解してくれていない」及び「母親が自分のことを期待している」があり、意欲低下を示す女子生徒が「父親が自分のことを理解してくれていない」と答えるオッズ比は、そうでない群に比べて3.70倍、「母親が自分のことを期待している」と答えるオッズ比は、そうでない群に比べて3.55倍であった。

V. 考 察

以上の結果より、中学生における意欲低下について検討してみると、意欲低下が疑われる生徒の割合は表1のように、1年生に比べ、2, 3年生で多く認められ、特に男子において顕著にこの傾向が認められた。すでに筆者ら<sup>7)</sup>が報告している小学6年生における意欲低下が疑われる児童の割合は1割弱であったことから、小学6年、中学1年という思春期前期に比べ、中学2, 3年になると、意欲の低下している子ども達がかなり増加しているものと思われる。中学生の年代は悩み多き時代といわれ、将来の進路選択や対人関係などに関して社会・心理的圧力を日常的に受けやすい<sup>20)</sup>。また、青年期にはそれまでの物の見方や感じ方が崩れ、

表8 意欲低下群・非意欲低下群の父親・母親に対するイメージ

	男子				女子			
	意欲低下群 N	%	非意欲低下群 N	%	意欲低下群 N	%	非意欲低下群 N	%
中学1年生								
父親は私のことをよくわかって くれている	3/6	50.0	57/82	69.5	2/6	33.3	47/71	66.2
お父さんの生活は私から見て生 きがいがある	1/6	16.7	49/81	60.5	3/6	50.0	43/69	62.3
将来，お父さんのような大人に なりたい	1/6	16.7	40/80	50.0	2/6	33.3	32/71	45.1
父親は私の将来や成績について 期待している	3/6	50.0	49/81	60.5	3/6	50.0	33/71	46.5
母親は私のことをよくわかって くれている	4/6	66.7	65/87	74.7	6/9	66.7	60/73	82.2
お母さんの生活は私から見て生 きがいがある	1/6	16.7	51/86	59.3	5/9	55.6	44/69	63.8
将来，お母さんのような大人に なりたい	0/6	0.0	35/84	41.7	4/9	44.4	38/71	53.5
母親は私の将来や成績について 期待している	3/6	50.0	53/84	63.1	6/9	66.7	35/73	47.9
中学2年生								
父親は私のことをよくわかって くれている	14/23	60.9	36/52	69.2	5/18	27.8	29/56	51.8
お父さんの生活は私から見て生 きがいがある	11/21	52.4	29/44	65.9	6/16	37.5	31/55	56.4
将来，お父さんのような大人に なりたい	9/20	45.0	21/46	45.7	2/16	12.5	17/54	31.5
父親は私の将来や成績について 期待している	8/19	42.1	31/46	67.4	7/17	41.2	27/54	50.0
母親は私のことをよくわかって くれている	15/23	65.2	41/51	80.4	12/19	63.2	48/63	76.2
お母さんの生活は私から見て生 きがいがある	10/21	47.6	27/42	64.3	9/19	47.4	38/59	64.4
将来，お母さんのような大人に なりたい	4/20	20.0	14/41	34.1	8/19	42.1	36/60	60.0
母親は私の将来や成績について 期待している	10/20	50.0	32/44	72.7	9/19	47.4	32/61	52.5
中学3年生								
父親は私のことをよくわかって くれている	12/20	60.0	29/56	51.8	5/15	33.3	28/51	45.9
お父さんの生活は私から見て生 きがいがある	9/19	47.4	30/56	53.6	7/14	50.0	26/55	47.3
将来，お父さんのような大人に なりたい	5/20	25.0	24/56	42.9	3/15	20.0	18/65	32.7
父親は私の将来や成績について 期待している	8/20	40.0	34/54	63.0	1/11	9.1	18/56	32.1
母親は私のことをよくわかって くれている	10/20	50.0	37/58	63.8	6/16	37.5**	47/66	71.2
お母さんの生活は私から見て生 きがいがある	5/18	27.8*	36/58	62.1	6/14	42.9	39/64	60.9
将来，お母さんのような大人に なりたい	5/20	25.0	19/58	32.8	3/15	20.0	30/62	48.4
母親は私の将来や成績について 期待している	8/20	40.0*	39/58	67.2	5/14	35.7	29/63	46.0

非意欲低下群を対照としたt検定 \*\*：p<0.01，\*：p<0.05

注)「はい」と回答した生徒の数および割合

表9 両親像に関するロジスティック分析結果

			オッズ比	(95%信頼区間)	
男子 父親	父親は私のことをよくわかってきている	はい	1.000		
		いいえ	0.473	(0.189, 1.186)	
	父親は私の将来や成績について期待している	はい	1.000		
		いいえ	0.798	(0.296, 2.152)	
	お父さんの生活は私から見て生きがいがある	はい	1.000		
		いいえ	0.915	(0.332, 2.521)	
	将来, お父さんのような大人になりたい	はい	1.000		
		いいえ	1.477	(0.491, 4.447)	
	母親	母親は私のことをよくわかってきている	はい	1.000	
			いいえ	2.333	(0.985, 5.526)
		母親は私の将来や成績について期待している	はい	1.000	
			いいえ	0.418	(0.158, 1.110)
お母さんの生活は私から見て生きがいがある		はい	1.000		
		いいえ	2.235	(0.750, 6.655)	
将来, お母さんのような大人になりたい	はい	1.000			
	いいえ	1.212	(0.310, 4.741)		
学年	1	1.000			
	2	<u>8.487</u>	<u>(2.859, 25,189)</u>		
	3	<u>4.829</u>	<u>(1.686, 13,832)</u>		
女子 父親	父親は私のことをよくわかってきている	はい	1.000		
		いいえ	<u>3.700</u>	<u>(1.169, 11.715)</u>	
	父親は私の将来や成績について期待している	はい	1.000		
		いいえ	0.486	(0.167, 1.411)	
	お父さんの生活は私から見て生きがいがある	はい	1.000		
		いいえ	0.544	(0.169, 1.755)	
	将来, お父さんのような大人になりたい	はい	1.000		
		いいえ	1.579	(0.446, 5.591)	
	母親	母親は私のことをよくわかってきている	はい	1.000	
			いいえ	2.088	(0.714, 6.109)
		母親は私の将来や成績について期待している	はい	1.000	
			いいえ	<u>3.550</u>	<u>(1.279, 9.851)</u>
お母さんの生活は私から見て生きがいがある		はい	1.000		
		いいえ	2.112	(0.545, 8.189)	
将来, お母さんのような大人になりたい	はい	1.000			
	いいえ	0.601	(0.155, 2.327)		
学年	1	1.000			
	2	2.357	(0.759, 7.321)		
	3	2.170	(0.680, 6.921)		

無秩序に近い状態に陥るが、これらは、発達にとって積極的意味を持つ<sup>21)</sup>といわれている。中学生の友人関係や親子関係における研究<sup>22)</sup>では、中学2年は中学生が大人になっていくにあたっての、一つの象徴的な節目といえるかもしれないといわれている。今回の調査で、意欲の面においても中学2年での変化が目立ち、中学生という時期において、特に中学1年から2年にかけて子どもたちの心理・精神面に変化が見られるものと考えられる。

また、表2のようにいずれの学年においても男女とも意欲低下群のCDIスコアは高く、意欲の低下が疑われる子どもたちはかなり抑うつ的になっているものと思われる。このような意欲低下と抑うつ傾向との関連は、塩川<sup>23)</sup>の一般中学生におけるCDIスコアと無気力感の緊密な関連を示す報告と一致するものであった。また、筆者らの先行研究<sup>7)</sup>では小学生においても、同様の関連をもつことが明らかされていることから、児童期、思春期を通して、一般の児童・生徒における意欲の低下と抑うつ感情の関連性が示唆される。

一般に、各種の身体症状には心理的なストレスが関係しているものがある。特に子どもの場合は、大人以上に心理的葛藤や情緒の混乱が身体症状となって現われやすいことはよく知られている<sup>24)25)</sup>。本研究においても、多彩な心身不調の訴えは、表3にみられるように明らかに意欲低下が疑われる生徒に多かった。特に2年生において、心身症状の訴えがあるかどうかということは、意欲の低下が認められるか否かで大きく違っており、意欲の低下が疑われる生徒は精神的にも身体的にもかなりのストレスを感じているものと思われる。また、意欲低下が疑われる生徒の訴えやすい心身の不調は、学年により微妙な差があった。しかしながら、「頭痛」の訴えについては、1年生男子、2年生男子、女子、および3年生女子で意欲低下が疑われる生徒の訴える割合が高く、いずれの学年においても見られる中学生の傾向といえよう。特に女子においては「頭痛」が意欲低下の関連要因で

あることが明らかにされ、思春期の子どもを示す頭痛についてさらにを検討する必要があるものと思われる。小学生においては腹痛と意欲低下に関連が認められていた<sup>7)</sup>ことから、発達に伴い、心理的ストレスに伴う身体症状が変化していることが伺える。

これまで、うつ病患者の抑うつ感情と攻撃性の関連について述べられてきている<sup>26)27)</sup>。また、一般の大学生を対象に、抑うつ感情をもつ者は攻撃性も示しやすいことが明らかにされてきた<sup>28)~30)</sup>。今回の研究では一般の中学生においても暴れまわりたくなる、大声を出したくなる、イライラするなど攻撃性の現われと思われる感情と意欲低下との関係が認められた。最近言われている「切れる」などと言う表現や中学生・高校生の精神保健の分野で注目されているいじめ、家庭内暴力、校内暴力などにあらわれている子どもの攻撃性の背景要因として意欲低下との関係を検討する必要があることを示唆するものと思われる。

今回の研究では、家族形態や父親の帰宅時間、母親の仕事の有無といった客観的条件は、意欲低下群と非意欲低下群では差が認められなかった。他方、家族に関して中学生における意欲低下に影響をおよぼしていると思われるものは、表8にみられるように子どもが内面に抱いている親に対するイメージのような主観的条件であり、これらの結果は、著者らが以前に小学生を対象におこなった意欲低下の調査結果と同様の傾向であった<sup>7)</sup>。しかしながら、小学生は父親のイメージと意欲低下に関連が認められたのに対し、中学生では母親のイメージと意欲の低下に関連が認められた。特に意欲低下が疑われる3年生の生徒は良い母親像を持っていなかった。3年男子で母親に対し生活に生きがいを感じていると認識している者が非意欲低下群では6割強であったのに対し、意欲低下群では3割弱にとどまっていた。また、母親は自分に対して期待をしていると感じている者が非意欲低下群では7割弱であったのに対し、意欲低下群では4割にとどまっていた。また、女子では母親が自分の

ことを理解してくれていると感じている者が非意欲低下群では7割強であったのに対し、意欲低下群では4割弱にとどまっていた。これらの結果から、母親から理解されていない、期待されていないというような子どもが母親に対して抱く「自分の存在が母親に受け入れられていない」という感情が子どもの意欲低下に大きく作用していることが伺えた。両親との心理的距離は発達的に変化する<sup>31)</sup>が、大学生を対象とした、アパシー傾向の研究<sup>32)</sup>で、女子学生においては母親に対し距離があるように感じているかどうかということが関連しているという報告があり、理解されているという感覚や期待されているという感覚は親に対する信頼感や距離を表すものと考えられ、思春期の子どもの精神的健康はその子どもの抱く母親像に深く関連していることが示唆される。今回の調査では、母親からの期待が無いと考えている中学3年の男子生徒は意欲が低下しており、男子にとっては親の「期待」に答えようとする気持ちが意欲につながるものと思われる。しかしながら女子では「母親からの期待」は意欲低下群の特徴的な訴えとなっており、親からの期待をプレッシャーとして捉えてしまうのではないかという一面が伺えた。

また、統計上の差はみられなかったが、いずれの学年においても男女とも「お父さんのような大人になりたい」、「お母さんのような大人になりたい」と感じている生徒が、非意欲低下群より意欲低下群で少ないのは、子どもの意欲低下と両親のイメージとの関連の可能性を示している。今後さらに被験者の枠を広げた詳細な検討が望まれる。

今回の研究は、岐阜県内のA中学校に通う生徒という限られた集団において調査されたものである。しかしながら、わが国では子どものメンタルヘルスに関する研究は歴史が浅く、思春期の親子関係に関する研究が少ないことから、このような、意欲の低下、精神的健康、家族環境・親子関係も含めた調査を行ったことは意義があると考えられる。意欲が低下している中学生に適切な対応をするためにも、また子どもの

意欲低下を早期に発見し予防するためにも、貴重な結果が得られたと考える。

## VI. 結 語

現代の中学生における意欲低下とCDIスコア、心身症状及び家族背景との関連について検討し、思春期の意欲低下に影響を及ぼす要因について以下のような結果を得た。

- 1) 意欲低下群に属する中学生の抑うつ傾向は高い。
- 2) 意欲が低下している中学生は心身症状を訴えやすく、特に2年生で顕著である。
- 3) 思春期の意欲低下群に特徴的な訴えは男子では「イライラ感情」であり、女子では「頭痛」である。
- 4) 意欲が低下している中学生は両親に対し良いイメージを持っていないが、特に母親に対する否定的認識が意欲低下と関連していた。
- 5) 思春期の女子の意欲低下群の持ちやすい特徴的な両親へのイメージは「父親から理解されていない」という思いと「母親から期待されている」という感情であった。

## 謝 辞

稿を終えるにあたり、ご指導いただきました金城学院大学大学院人間生活学研究科の若林慎一郎教授に対し、心より感謝申し上げます。

なお、本研究の一部は第46回日本学校保健学会(1999年11月)において発表した。

## 文 献

- 1) 文部省：平成12年度学校基本調査報告書，大蔵省印刷局，東京，2000
- 2) 木村圭子，朝倉隆司：中学生の人間関係と精神的健康における変化—1992年と1997年の比較，思春期学，17：83-94，1999
- 3) 識名節子，平山清武，喜屋武和恵：小学校高学年生の不適応徴候，小児科，16：45-50，1994
- 4) 内田勇人，松浦伸郎，諸富嘉男ほか：小学生の不定愁訴の背景，小児保健研究，56：545-555，1997

- 5) 坂本真士：自己注目と抑うつつ社会心理学，東京大学出版社，東京，1997
- 6) 高野清純：感情と発達の障害，福村出版，東京，1995
- 7) 堀（安藤）篤実，高田晴子，井上真人，若林慎一郎，岩田弘敏：学童の意欲低下の背景 家族，心身症状及びCDIスコアとの関連，岐阜大学医学部紀要，46：219-227，1998
- 8) 末盛慶，石原邦雄：有配偶女性の家族関係と社会的ネットワーク—「思春期の子育てと家族生活に関する調査」から—，総合都市研究，70：137-153，1999
- 9) 久世敏雄：現代青年の心理と病理，福村出版，東京，1994
- 10) Holmbeck, G.N., Paikoff, R.L. and Brooks-Gunn, J.: Parenting Adolescents Handbook of Parenting Vol. 2 Biology and Ecology of Parenting, Edited By Bronstein, M.H., 91-118, 1995
- 11) Field, T., Lang, C. and Yando, R. Bendell, D.: Adolescent's Intimacy with Parents and Friends: Adolescence, 30, 133-140, 1995
- 12) Jaffe, M.L.: Adolescence, J. Wiley & Sons, New York, 1998
- 13) Newman, B.M., Newman, P.R.: Development through Life—A Psychological Approach—(Third Edition), 1984 (福富護 訳：新版生涯発達心理学，川島書店，東京，1988)
- 14) Kovacs, M.: Rating scale to assess depression in school-aged children. Acta Paedopsychiatrica, 46：305-315, 1981
- 15) Kovacs, M.: The Children's Depression Inventory (CDI), Psychopharmacology Bulletin, 21：995-998, 1985
- 16) 村田豊久，堤籠喜，皿田洋子，中庭洋一，小林隆児：児童・思春期の抑うつ状態に関する臨床的研究—II CDIを用いたの検討—厚生省「精神疾患研究委託費」63公—3 児童・思春期精神障害の成因及び治療に関する研究，昭和63年度報告書，69-76，1989
- 17) NHK世論調査部編：現代中学生・高校生の生活と意識，明治図書出版，東京，1991
- 18) 田中英高，美濃真，寺嶋繁典，堺俊明，田中敏隆：一般学童における健康調査 第一報：身体的徴候の出現率について，日本小児科学会誌，95：2621-2627，1991
- 19) 総務庁青少年対策本部：子どもと家族に関する国際比較調査報告，455，大蔵省印刷局，東京，1996
- 20) 保健教育A班：学会共同研究最終報告I，学校保健研究，28：519-520，1986
- 21) Blos, P.: On Adolescence, A Psychoanalytic Interpretation. The Free Press of Glencoe, New York, 1962 (野沢栄司 訳：青年期の精神医学，誠信書房，東京，1971)
- 22) 森定美也子：中学生における対人ストレスと慰める存在 スクールカウンセラー活動の一環としてのストレス調査を通して，心理臨床学研究，18：523-528，2000
- 23) 塩川宏郷，宮本信也，柳澤正義：中学生の抑うつChildren's Depression Inventory (CDI) の妥当性に関する一考察，小児の精神と神経，33：291-295，1993
- 24) Smith, M.S.: Psychosomatic symptoms in adolescence. Med Clin North Am, 75：153-164, 1990
- 25) 若林慎一郎，大高一則，阿部徳一郎，金子寿子：神経症と児童青年精神科医療，児童青年精神医学とその近接領域，24：186-195，1983
- 26) Riley, W., Treiber, F.A. and Woods, M.G.: Anger and hostility in depression, Journal of Nervous and Mental Disease, 177：668-674, 1989
- 27) Moreno, A., Selby, M.J. and Fuhrman, A. et al.: Hostility in depression, Psychological Reports, 74：1391-1401, 1994
- 28) Wessman, A.E., Ricks, D.F. and Tyl, M.M.: Characteristics and concomitants of mood fluctuation in college women, Journal of Abnormal and Social Psychology, 60：117-126, 1960
- 29) 鈴木常元，佐々木雄二：軽催眠下における抑うつ者の攻撃性，催眠学研究，40：16-22，1995
- 30) 鈴木常元，安齋順子：抑うつ者の外面的および内面的攻撃性，心理臨床学研究，16：573-

581, 1999

- 31) 加藤隆勝：青年期の意識構造—その変容と多様化—, 誠信書房, 東京, 1987
- 32) 鉄島清毅：大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討—, 教育心理学研究, 41 : 200-208, 1993

(受付 01. 6. 6 受理 01. 8. 23)

連絡先：〒503-8554

岐阜県大垣市西之川1-109  
大垣女子短期大学(堀)

報告

文部・厚生両省による幼児・児童・生徒の  
体位計測値についての比較検討

上 延 富久治<sup>\*1</sup>, 古 田 敬 子<sup>\*2</sup>, 美 馬 信<sup>\*2</sup>, 須 藤 勝 見<sup>\*1</sup>

<sup>\*1</sup>元大阪教育大学

<sup>\*2</sup>大阪女子短期大学

Comparative Study of Physical Standards of the Infant, Children  
and Pupils Based on the Measurement Data Taken by  
the Ministry of Education and the Ministry of Health and Welfare

Fukuji Uenobe\*, Keiko Furuta\*\*, Sin Mima\*\*, Katsumi Sudo\*

\**Emeritus Professor of Osaka Kyoiku University*

\*\**Osaka Women's College*

In comparison of the measurement data taken by the Ministry of Education (the ME) and the Ministry of Health and Welfare (the MHW) in the same year with regard to the height and weight of infant, children and pupils, there was a general tendency that the values of the MHW were smaller than those of the ME with considerable differences for both sexes while it was vice versa little large at some ages of persons.

Therefore, for the purpose of clarifying the causes of differences in the data of recent five years (1994~1998) between the two ministries, we made a detailed comparative study of measurement data on height and weight surveyed by both ministries as well as their coefficients of variation  $\{(Standard\ deviation/average\ value) \times 100\}$ .

The result revealed that the differences between the data values from the two ministries were attributable to the measurement of the MHW. To be more specific, the ME data showed that the differences between the years were not significant, describing a smooth parabola for coefficient of variation curves on both height and weight. On the other hand, the MHW data described a rough curve with some complicated forms in respective years. From these findings, it was made clear that there were remarkable differences between the data of both ministries. As the originated cause of the difference in the data, it concluded that especially the size of subjects for the investigation in the case of the MHW was too small and it had a serious effect not to be overlooked.

---

Key words : "Statistics on the School Health", "Nutritive Researches for the Nation", average value of height and weight, coefficient of alteration, the number of persons of inquired object

「学校保健統計」, 「国民栄養調査」, 身長・体重の平均値, 変動係数, 調査対象人数

---

## はじめに

周知のように、厚生統計協会から毎年「国民衛生の動向」<sup>1)</sup>が出版され、その巻末に各種統計表が掲載されている。その中に「国民栄養調査」(以下、厚生省値と略称)と「学校保健統計調査」(以下、文部省値と略称)から引用された青少年の体位の全国平均値が掲載されており、これらは例年文部省(現文部科学省)値はその前年度、厚生省(現厚生労働省)値は前々年度のデータであるが、僅か一年違いの資料でありながら年齢によってはかなりの差がみられた。そこで、念のため同一年度調査による「国民栄養の現状」<sup>2)</sup>に掲載されている体位と、文部省値のそれ<sup>3)</sup>を照らし合わせてみると、一般に男女ともかなりの差で厚生省値が小であったが、年齢によっては厚生省値の方が僅かながら大のものも散見された。このような事実は、ある年度に限ってみられた現象でなく、文部、厚生両省ともに統計値が公表されるようになってから過去数十年に亘ってみられてきた、いわゆる“ねじれ現象”である。これを、対象となる母集団や計測時期などが異なれば、得られた計測値が異なるのは当然のことと看過するには、前述のごとく年齢によっては差がありすぎる。それぞれの差がどの程度のものかを明確にし、またなぜそのような差が生じたのか、その原因を探ることは大変重要なことであると考えたのが、本調査研究を行なった動機である。

著者らは永年、青少年の発育発達上の問題に少なからず関心を持ち、微力ながらそれに関連した研究<sup>4-10)</sup>と教育に携わってきたのであるが、その立場にある者として、このような事実をい

つまでもこのまま看過し、座視するわけにはいかない。文部、厚生両省の統計値のいずれが妥当であるか否かを分析し、その問題点を明確にすることは基本的に重要な事柄であると言える。

そもそも、これらの資料は、わが国を代表する保健統計資料として一般に広く活用されているであろうし、発育・発達関連の研究者や養護教諭は現状把握の必要上、全国の幼児・児童・生徒の性・年齢別の体位を知るために利用することも少なくない筈である。したがって、それらのデータが、理由の如何に拘わらず、妥当性を欠く事は許されない。ともあれ、本研究展開の意義は、それらのデータの適否を検証し、その改善に資することを目的としたところにある。

そこで著者らは最近の両省の体位計測値<sup>11,12)</sup>について詳細に比較検討し、両省間のデータの差が生じた原因として看過しえない事実を明らかにしたので、ここに報告する。

## 調査対象と方法

最近5年間(1994~1998年)の両省の身長および体重の男女別平均値ならびに変動係数〔標準偏差/平均値〕×100〕のそれぞれについて比較検討を行なった。また、厚生省データの調査対象者数については1986~1998年の13年間の年次推移も調査した。

なお、表1に示した如く、学校保健統計調査に掲載している年齢は4月1日現在の満年齢であるが、その調査時期は4月1日から6月30日までであり、一方厚生省値は調査時点の満年齢であるので、それが計測値に多少影響し、両省値間に差異が生じることになる。すなわち、両

表1 文部省と厚生省の身長・体重等調査方法の比較

	文 部 省	厚 生 省
(1) 調査時期	4月1日から6月30日まで	11月中
(2) 掲載年齢	4月1日現在の満年齢	調査時の満年齢
(3) 対象者数 5歳~17歳の合計	各年度 695,600人	1998年の場合 1,896人

表2 文部，厚生両省の身長測定値間の差と有意水準について

年齢	性別	1994年		1995年		1996年		1997年		1998年		
		実測値	補正值	実測値	補正值	実測値	補正值	実測値	補正值	実測値	補正值	
5歳	男	差 有意水準	0.4	-0.3	-0.8	-1.5 p<0.01	2.5 p<0.001	1.6 p<0.01	1.5 p<0.05	0.7	1.7 p<0.001	0.9
	女	差 有意水準	0.5	-0.3	0.3	-0.4	1.3 p<0.05	0.6	0.9	0.2	1.1	0.3
6歳	男	差 有意水準	0.8	0.1	0.2	-0.4	1.1	0.3	1.3 p<0.05	0.5	1.1	0.2
	女	差 有意水準	-0.1	-0.8	0.2	-0.5	1.3 p<0.05	0.5	1.5 p<0.01	0.6	0.4	-0.3
7歳	男	差 有意水準	1.0	0.4	0.7	0.0	0.4	-0.3	0.7	0.0	-0.2	-0.8
	女	差 有意水準	0.1	-0.6	0.7	-0.1	0.8	0.1	0.1	-0.5	0.3	-0.5
8歳	男	差 有意水準	1.3 p<0.05	0.5	0.4	-0.3	0.8	0.2	0.5	-0.2	0.6	-0.1
	女	差 有意水準	-0.1	-0.9	-0.2	-0.9	1.2	0.4	1.1	0.4	0.0	-0.7
9歳	男	差 有意水準	0.1	-0.5	0.1	-0.6	1.4 p<0.05	0.6	-0.1	-0.6	0.4	-0.1
	女	差 有意水準	-0.9	-1.5 p<0.05	-0.2	-0.8	0.3	-0.4	1.7 p<0.05	0.9	0.5	-0.4
10歳	男	差 有意水準	0.9	0.1	-0.3	-0.9	0.0	-0.6	1.5 p<0.05	0.7	1.7 p<0.05	0.9
	女	差 有意水準	0.9	0.0	1.5 p<0.05	0.5	1.4	0.6	1.6	0.7	0.2	-0.4
11歳	男	差 有意水準	0.8	0.0	0.5	-0.5	1.1	0.2	0.8	-0.2	1.1	0.1
	女	差 有意水準	0.2	-0.4	-0.4	-1.0	1.6	0.8	0.9	0.3	1.8 p<0.05	1.2
12歳	男	差 有意水準	1.2	0.1	-0.4	-1.2	1.4	0.5	0.3	-0.4	0.7	-0.2
	女	差 有意水準	0.5	0.1	-0.3	-0.7	0.3	-0.1	1.1	0.7	2.1 p<0.01	1.5 p<0.05
13歳	男	差 有意水準	-0.5	-1.0	0.9	0.1	1.3	0.5	2.1 p<0.01	1.3	0.5	-0.1
	女	差 有意水準	0.4	0.2	-0.3	-0.4	0.5	0.4	1.0	0.8	0.2	0.2
14歳	男	差 有意水準	1.4 p<0.05	0.8	0.2	-0.2	0.8	0.3	1.6 p<0.05	1.1	0.9	0.5
	女	差 有意水準	0.4	0.2	0.8	0.6	1.5 p<0.05	1.4 p<0.05	0.9	0.7	1.3 p<0.05	1.0
15歳	男	差 有意水準	0.2	0.0	0.3	0.2	0.0	-0.2	0.5	0.3	1.1	0.8
	女	差 有意水準	-0.3	-0.3	-0.3	-0.4	1.0	0.9	-0.2	-0.2	-0.7	-0.6
16歳	男	差 有意水準	0.1	0.1	0.6	0.3	0.0	0.0	0.7	0.5	0.2	0.1
	女	差 有意水準	-0.1	-0.1	-0.3	-0.3	1.0	1.0	0.5	0.4	0.4	0.5
17歳	男	差 有意水準	0.5	0.5	-1.0	-1.3 p<0.05	0.7	0.7	0.2	0.0	-0.1	-0.2
	女	差 有意水準	0.1	0.1	-0.5	-0.5	0.8	0.8	-0.4	-0.5	1.1	1.2 p<0.05

注：差（単位：cm）は文部省値と厚生省値との差を表わし、（-）符号は厚生省値が大であることを，その他はすべて文部省値が大であることを示す。  
有意水準の欄内にp値が記入されていないものは全てNSを示す。

省値を満年齢で比較した場合、文部省値については掲載年齢が4月1日現在の満年齢を採用しているながら、測定期間に約3ヶ月の幅があり、単純に考えても最大3ヶ月(約90日)分、平均1.5月(約45日)分、厚生省値よりもその値が大きいことになる。そこで、そのことを考慮し、機械的な比例配分による以下の式で補正値を算出し、その値についても比較検討を行なった。

$$\text{補正厚生省値} = \text{当年齢値} + (\text{1年上の年齢値} - \text{当年齢値}) \times 45/365$$

## 結果と考察

### 1. 身長について

#### (1) 平均値の比較

前述の如く、計測時点における年齢には両省間に多少のずれがあるので、その測定値が共に適正であれば、単純に考えても、厚生省値が小となるのは当然であろう。

表2は文部、厚生両省の身長測定値の差と、そのうち有意差のあったもののみを取り上げ、その有意水準について示したものである。

表を見て一目瞭然であるが、男子の場合、殊に1996年では未だ身長の低い幼児である5歳にも拘らず、実に2.5cm ( $p < 0.001$ )もの差があり、また1997年では5件も有意差がみられ、いずれも文部省値が高かった。調査した5年間のうち両省値間に有意差があったのは合計14件もあった。なお、1995年については有意差があった年齢はなかったが、17歳と5歳では逆に厚生省値が高く、これは些か信じがたい現象である。

調査方法で示した算式によって求めた補正厚生省値(以下単に補正値と略称)については、後述の体重についても勿論同様であるが、一般に、実測値の厚生省値よりも文部省値が大である場合は両省値間の差は小となり、逆に厚生省値の方が大である場合には、その差は更なる大となる。そこで、各年度における補正値によって両省値を比較すると、1994年では有意差がなかったものの、例えば13歳で実測値の差が0.5cm厚生省値の方が高かったのが、さらに1.0cmと高くなった。また、1995年では5歳と17

歳の実測値では有意差がなかったものが、有意差が生じ、いずれも厚生省値が高い。1996年の5歳では文部省値の方が1.6cm高く、依然として有意差が残っている。なお、5年間のうち、実測値、補正値合わせて有意差が最も多かったのが5歳で、5件もあったことは現分析段階で両省いずれか、または両省とも実測値に大きな過誤の疑いがあることを示唆している。

文部省の実測値が厚生省のそれよりも大である場合、測定時点における年齢差を補正することによって当然のことながら、両省値の差がかなり小さくなっていく。しかし、補正値をもってしても、なお、有意差が残るということは、単に前述の補正値を求めた根拠による調整だけでは補正しきれない要因が存在することを示唆している。後述の体重についても同様であるが、そこには、性・年齢差や、殊に両省の調査時期のずれに係わって生ずる季節変動<sup>12)~16)</sup>など、いくつかの要因の存在についても留意しなければならないが、それらのことが、一方において文部省値が高かったり、片や厚生省値が高かったりの原因にまでなっていると到底考えられな

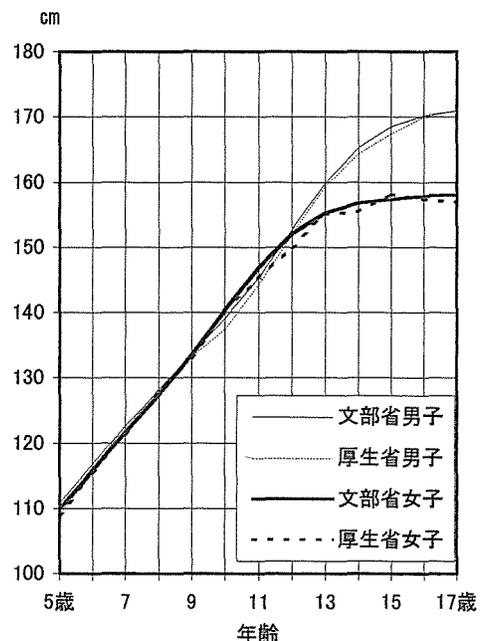


図1 身長計測値 1998年

い。

女子実測値においては、1996年の3件、1998年の3件といずれも文部省値が高かったのが目立っている。

なお、図1は一例として1998年男女の年齢別両省の身長を图示したものであるが、ことに厚生省値女子の曲線がガタついている有様がみられる。

これを男子と同様、補正值によって比較し有意差があったもののうち、1件は厚生省値の方が高く、他の3件はいずれも文部省値が高かった。

以上、女子の場合にも補正式を適用することによって両省値間に有意差の見られる件数は減少するが、1994年9歳のように実測値で有意差がなかったのが、補正值で新たに有意差が生じた例など、前述の調整だけでは補正しきれない要因が男子の場合と同様に存在することを示している。なお、5年間で、有意差がみられたのは、実測値、補正值合わせて13件あった。

以上、調査した5年間で、実測値の差に有意差がみられた年齢別件数では、男子5歳の1996

年～1998年にかけての3件が最も多く、補正值を合わせると1995年以降5件あった。また年度別では1997年の男女合せて7件が最も多く、1996年および1998年がいずれも5件と次いでいる。従って調査した5年のうち後半すなわち最近になる程、有意差のみられた件数の多い年度が多い傾向にあった。

(2) 変動係数の比較

文部省値の男子は、図2に示すように曲線がほぼ重なり各年度間にほとんど差がなく、平均値は各年齢とも一定の傾向をもって変動する安定した統計値であることを示している。その結果、すべての年度において12歳に一点集中的にピークがみられ、15歳にかけて急速に値が小さくなっている。すなわち、各年度とも12歳が最もばらつき（個人差）が大きく、16歳から17歳にかけて最も小さい有り様が明確に示された。

一方、女子の文部省値についての図は省略したが、いずれの年度とも10歳にピークがみられ、13歳にかけて急速に値が小さくなっており、14歳から17歳ではほぼ同じ水準でその値が最も小さくなっている。これは男子に比し、いずれの

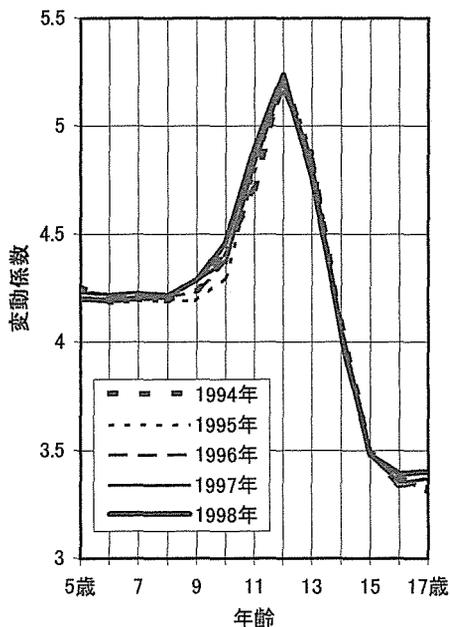


図2 身長変動係数 文部省男子

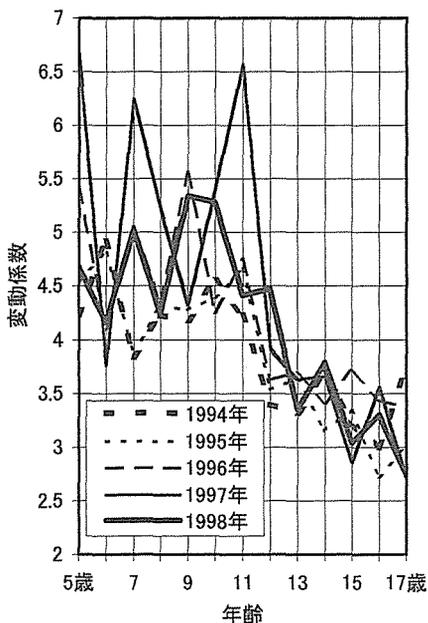


図3 身長変動係数 厚生省女子

表3 文部, 厚生両省の体重測定値間の差と有意水準について

年齢	性別		1994年		1995年		1996年		1997年		1998年	
			実測値	補正值	実測値	補正值	実測値	補正值	実測値	補正值	実測値	補正值
5歳	男	差	0.2	-0.1	-0.1	-0.3	1.6	1.3	0.9	0.5	0.7	0.3
		有意水準					p<0.001	p<0.001	p<0.05		p<0.05	
5歳	女	差	0.6	0.2	0.3	0.0	1.0	0.6	0.1	-0.1	-0.3	-0.5
		有意水準					p<0.01					
6歳	男	差	0.1	-0.2	0.4	0.0	1.3	0.9	0.4	0.0	0.3	0.0
		有意水準					p<0.01	p<0.05				
6歳	女	差	-0.4	-0.6	0.5	0.2	0.2	-0.1	0.4	0.0	0.2	-0.1
		有意水準										
7歳	男	差	0.7	0.4	-0.3	-0.6	0.8	0.3	0.1	-0.3	0.5	0.1
		有意水準										
7歳	女	差	0.3	-0.2	0.6	0.1	0.5	0.1	-0.2	-0.6	0.4	-0.1
		有意水準										
8歳	男	差	1.0	0.4	0.3	-0.1	-0.2	-0.5	-0.1	-0.5	0.8	0.4
		有意水準										
8歳	女	差	-0.4	-0.8	-0.5	-1.0	0.8	0.4	0.0	-0.2	-0.2	-0.6
		有意水準				p<0.05						
9歳	男	差	-0.7	-1.1	0.2	-0.3	0.4	-0.1	0.5	0.1	1.3	0.6
		有意水準										
9歳	女	差	-0.5	-0.9	-0.7	-0.8	1.0	0.6	1.5	0.9	0.4	-0.2
		有意水準							p<0.05			
10歳	男	差	-0.1	-0.5	-0.2	-0.8	0.0	-0.5	0.9	0.4	-0.4	-0.6
		有意水準										
10歳	女	差	0.6	0.0	2.2	1.3	1.8	1.3	1.2	0.4	0.3	-0.2
		有意水準			p<0.01		p<0.05					
11歳	男	差	0.5	-0.3	-0.8	-1.4	0.3	-0.3	1.0	0.4	2.1	1.3
		有意水準									p<0.05	
11歳	女	差	0.6	0.2	0.0	-0.5	2.8	2.0	-0.2	-0.6	1.5	1.1
		有意水準					p<0.01	p<0.05				
12歳	男	差	-0.2	-0.9	0.2	-0.4	1.3	0.7	1.8	1.3	1.1	0.5
		有意水準										
12歳	女	差	2.0	1.5	1.2	0.6	1.3	0.9	1.2	1.0	3.1	2.3
		有意水準	p<0.05								p<0.01	p<0.05
13歳	男	差	-0.3	-0.8	1.1	0.5	2.1	1.4	2.8	2.1	1.3	0.8
		有意水準							p<0.05			
13歳	女	差	1.5	1.3	-0.4	-0.4	1.5	1.4	2.6	2.3	-0.3	-0.3
		有意水準							p<0.01	p<0.05		
14歳	男	差	0.6	0.1	0.9	0.5	1.6	1.1	2.5	1.7	2.5	2.0
		有意水準							p<0.05		p<0.05	
14歳	女	差	2.5	2.0	2.3	2.1	3.0	2.7	2.9	2.5	1.9	1.7
		有意水準	p<0.01	p<0.05	p<0.05	p<0.05	p<0.001	p<0.001	p<0.01	p<0.01	p<0.05	
15歳	男	差	1.7	1.4	2.7	2.3	2.4	2.4	1.1	1.0	3.2	2.4
		有意水準			p<0.01	p<0.05	p<0.05	p<0.05			p<0.05	
15歳	女	差	0.4	0.4	2.1	2.0	2.3	2.1	1.4	1.3	1.7	1.6
		有意水準			p<0.05	p<0.05	p<0.05	p<0.05				
16歳	男	差	1.3	1.2	1.5	1.1	3.9	3.4	1.8	1.6	-1.3	-1.5
		有意水準					p<0.01	p<0.01				
16歳	女	差	1.0	1.0	1.8	1.8	1.3	1.5	1.8	1.7	2.0	2.0
		有意水準			p<0.05	p<0.05			p<0.05	p<0.05	p<0.05	p<0.05
17歳	男	差	1.6	1.5	-0.7	-1.1	1.4	0.9	1.9	1.7	-1.3	-1.5
		有意水準										
17歳	女	差	1.4	1.4	1.5	1.5	3.2	3.4	0.6	0.5	2.2	2.2
		有意水準					p<0.001	p<0.001			p<0.05	p<0.05

注: 差(単位: kg)は文部省値と厚生省値との差を表わし, (-) 符号は厚生省値が大であることを, その他はすべて文部省値が大であることを示す.

有意水準の欄内にp値が記入されていないものは全てNSを示す.

年度でも2歳早く個人差が大となり、同様に2歳早く小さくなっていることを意味するものである。なお、男子のピークの高さは各年度で5.2前後、女子では4.8前後と女子の方がやや低い。したがってピーク時にみられる個人差は男子の方がやや大きいことになる。

然るに、厚生省値では、図は省略したが、男女とも各年度のどれ一つを取り上げてみても正に十人十色の例えに相応しく、一つとして類似したパターンはなく、しかもすべてが異なった形の山あり谷ありの多峰性の曲線であった。従って図2と同じように5ヵ年の曲線を同一画面に画くと、男子(図は省略)、女子(図3)とも、まるで不協和音同志がそれぞれ勝手に奏でた、聞くに忍びない五重奏の例えに等しく、複雑怪奇な錯綜した曲線になり、その特徴を云々することは全く不可能なパターンで、正に論評するに値しない意味不明なものとなった。要するに各年度間、年齢間のばらつきが大きく、一定の傾向を示すに至っていない。これは大同小異であったので図は省略したが、補正值による変動係数についても、ほぼ同じ結果であった。従って、基本的な保健統計資料として活用するには大きな問題をはらんでいることを示唆している。

## 2. 体重について

### (1) 平均値の比較

身長と同様、実測値では厚生省値が小となって当然である。表3は文部、厚生両省の体重測定値の差と、そのうち有意差のあったもののみを取り上げ、その有意水準について示したものである。

表2と同様、表を見てその差が一目瞭然であり、男子15歳1998年の両省測定値の差3.2kg ( $p < 0.05$ )を筆頭に、同年齢5年間の有意差ありの件数3件、5歳についても同じく3件と、いずれも文部省値の方が大であった。各年度別で有意差の多かったのは、1996年および1998年、ともに4件、次いで1997年の3件の順であった。

これを補正值によって比較すると、1995年の15歳で2.3kgの1件、1996年は15歳の2.4kgお

よび16歳の3.4kgを含め4件に有意差があり、いずれも文部省値の方が大であった。

女子実測値については、1996年14歳の差3.0kgや17歳の差3.2kg (いずれも  $p < 0.001$ )を含む、同年の6件を最高に、1995年、1997年、1998年の各4件および1994年の2件に有意差がみられ、いずれも文部省値の方が大であった。

これを補正值によって比較すると、1996年17歳の差3.4kg ( $p < 0.001$ )を筆頭に、同年および1995年が各4件、次いで1997年および1998年の各3件など依然として有意差が残り、1995年の8歳を除いて文部省値の方が大であった。なお、前述の1995年の8歳は表3で明らかのように実測値では有意差がなかったのに、厚生省値の方が逆に1.0kg ( $p < 0.05$ )大となった。

なお、身長の場合と同様にして、調査した5年間のうち実測値で有意差が多くみられた年齢は、14歳の全年度、すなわち5件が最も多く、次いで16歳の3件で、これを補正值についてみても前者は4件、後者の3件に有意差が残ったままであった。

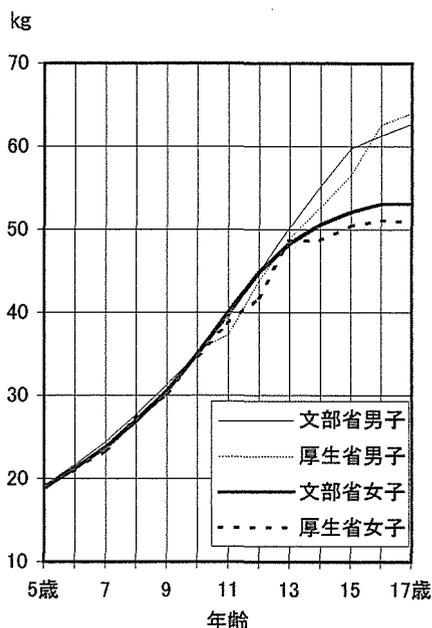


図4 体重計測値 1998年

また、年度別実測値の有意差で件数が最も多かったのは、1996年で男女合せて実に10件、この年度は補正值でも8件あり、次いで1998年の8件、1997年の7件の順であり、身長の場合と同様調査した5年間のうち、後半の1996年から1998年にかけて多い傾向がみられた。

以上、全般的にみて、両省間に有意差のあった件数は、実測値、補正值ともに男子よりも女子の方が多く、また一般に年齢の高い方にその傾向が強くみられた。図4はその一例として1998年の男女別年齢別の体重実測値を図示したものであるが、年齢が高くなるにつれて両計測値の差が大となる傾向が如実に示されており、図は省略したが補正值についても同じ傾向であった。なお、有意差のあった件数は、身長についてもさることながら、体重の方にはかなり多い傾向がみられた。しかも、補正してもなお有意差が消えないものが多いことから、両省の体重計測値に大きな差のあることが明確に示された。

(2) 変動係数の比較

文部省値の男子については、図5に示した如

く、1994年および1995年のピークはともに12歳の約21.8であったが、1996年以降はいずれも11歳にあり、その値はそれぞれ22.3、22.5および22.8と逐年的に僅かながら漸増傾向にあった。従って、11歳頃を中心に体重の個人差が逐年的に大きくなっていることがわかる。また、体重の変動係数は身長のそれよりも遥かに大きく、男子の場合、例年5歳で約3.4倍、11歳で約4.4倍、17歳で約4.8倍と年齢が大きい程その差が大きくなる傾向がみられた。なお、身長の変動係数の最小値が例年16歳から17歳あたりであったのに対し、体重の場合は5歳であった点が特徴的な違いである。つまり、身長については16歳から17歳にかけて個人差が最も小さく、体重については幼児の方が個人差が小さいことを示している。

女子の文部省値については図を省略したが、1995年のピークは11歳の20.3で、それ以外の年度はすべて10歳にピークがあり、1994年は20.6、1996年は20.9、1997年は21.1、1998年は21.0と、いずれもほぼ同水準であった。また、男子の場合と同様、体重の変動係数は例年身長

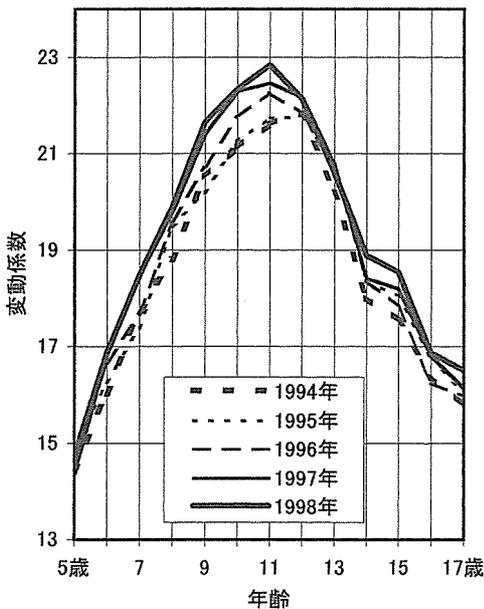


図5 体重変動係数 文部省男子

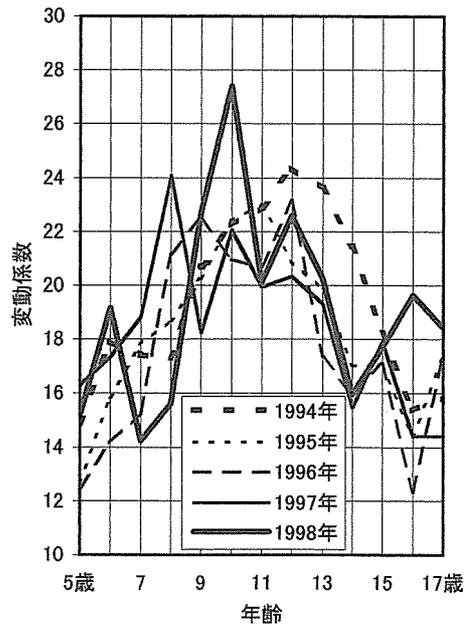


図6 体重変動係数 厚生省男子

のそれよりも相当大きく、5歳で約3.3倍、10歳で約4.4倍、17歳で約4.5倍であった。この事は、各年齢男女とも体重の個人差が身長のものよりも非常に大きいということを意味している。なお、体重の変動係数の最小値は、男子の場合と異なり、例年5歳と16歳から17歳にかけてはほぼ同水準であった。また、図は省略したが、カーブの特徴はいずれの年度も11歳から14歳にかけて急速に値が小さくなっており、その後17歳に至るまで傾斜はかなり緩やかになっている。

一方、厚生省値については身長の場合と同様、図6に示したように各年度間、年齢間のバラツキは極端に大きく、一定の傾向を見出すことは全く不可能なパターンであった。なお、図は省略したが、補正值によるパターンについても補正による改善はみられず、同様傾向であった。

以上の如く、両省間の各年齢男女ともにみられた身長及び体重に差異が生じた主な原因は、厚生省の実測値のみならず補正值を用いて描いた変動係数曲線が多峰性の山あり谷ありの大きな乱れを示したことを勘案すれば、厚生省から公表されているデータの数値そのものに起因していることが明白で、それを否定する論拠は見出せない。

### 3. 両省の調査対象人数について

両省とも調査対象に地域的な偏りがないよう配慮して調査を行っており、そのこと自体特に問題はないようである。

文部省の場合、各年度、男女とも調査人数は一定しており、5歳は36,190人、6歳から11歳までは、いずれも22,560人、12歳から14歳はいずれも37,600人、15歳から17歳はいずれも21,150人計347,800人である。従って、表1に示した如く、対象者総数は各年度とも695,600人で、年齢当たりの平均人数は男女とも約26,800人であった。なお、各都道府県における標本抽出方法は、確率比例抽出法により抽出している。

一方、厚生省の統計資料の場合、「国民栄養の現状」に記載された調査方法によれば、身長・体重ともその計測にあたっては細心の注意

を払い厳密を期して実施されているようである。しかし問題はその調査対象人数である。ちなみに、1994年から1998年までの対象人数のうち、最多人数と最少人数を挙げるとそれぞれ次の通りであった。男子では1995年10歳の116人、1997年5歳の57人、女子については、1994年11歳の92人、1997年5歳の53人であった。

なお、厚生省の1986年から1998年に至る調査対象者総数の年次推移をみると、図7に示す如く、男女ともどうしたことが、概ね遞減傾向にある。著者らの調べた範囲では「国民栄養の現状」に調査人数が記載されたのは、1971年（昭和46年）からであり、その年度の男女別調査対象総数はそれぞれ2,845人と2,588人であった。ちなみに、1998年（男子974人、女子922人）においては、対象人数が元々多いとはいえない1971年に対し男子は僅か34.2%に、女子は35.6%にまで減少していた。ともあれ、厚生省の場合、最近の年齢当り対象人数が男女とも多くて100人強、少なくても僅か50数人では、信頼性且つ普遍性ある体位計測値が得られるとは到底考えられない。サンプル数が多い程、より信

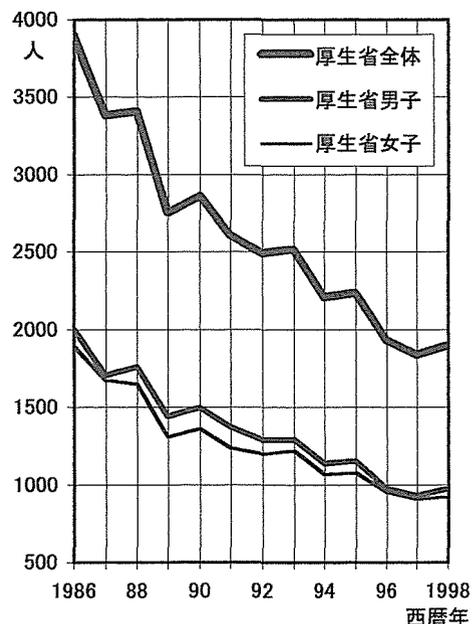


図7 厚生省調査対象者総数の年次推移

頼性の高いデータが得られることは、今や統計学の常識である。にも拘らず、どうしたことが、過去数十年に亘りその常識を無視した、無価値の誤った統計データでありながら、今日なお日の目をみているところに、看過し得ない問題があると言えよう。要するに、これでは統計学の基礎に抵触すると言って過言でなく、このような僅少な対象人数では信憑性あるデータが得られる筈がないと断言せざるをえない。

「国民栄養の現状」の冒頭に記された“国民栄養調査の沿革”によると身体調査の項目中に身長・体重が加えられたのは昭和22年であり、その翌年の23年にはじめて全国規模の調査が行なわれるようになった。爾来、厚生省担当部局自身、わが国を代表する健康指標に関する統計資料と自負しつつ公にされ、恐らく、多くは何の疑いもなく健康栄養関係各界に広く活用され、今日に至っていると推測される。ともあれ、本調査研究で明らかになった信憑性の乏しい基礎データでは、少なくともそれから派生する「国民栄養の現状」に記載されているBMIなど他のいくつかの項目の調査結果にも必然的に過誤をきたしていることにもなる。

本年は、正しく新世紀の初頭であり、また、旧来の厚生省が厚生労働省として再編された年でもある。願わくは、この際、本研究で明らかにされた事実を真摯に受け止め、それを踏まえて今後の教訓として活かし、戦後何十年に亘り出版され、また毎年マスコミを通じて全国津々浦々に広く報道されてきた全国国民対象の唯一無二の「国民栄養の現状」に盛られている内容全般についても、抜本的な見直しと再検討が行なわれることを切に期待するところである。

## まとめ

文部（現文部科学）、厚生（現厚生労働）両省間の身長および体重の各年度計測値に、大小さまざまな差異がみられた。本調査研究はそれぞれの差の程度を明確にし、その原因究明と、それらのデータの適否を検証することを目的として、主として1994年から1998年の5年間の資

料について分析し、概略以下に示すような結果を得た。

1. 身長実測値の両省値間に有意差があったのは、男子では1997年の5件をはじめ、全体合わせて11件でいずれも文部省値が高かった。補正值で有意差のあったのは、1995年の2件でいずれも厚生省値が高く、文部省値が高い他の1件を合わせて3件であった。  
女子の実測値では、1996年および1998年の各3件をはじめ、全体合わせて9件でいずれも文部省値が高い。補正值で有意差のあった1994年の1件は厚生省値が高く、他の3件では文部省値が高かった。
2. 身長変動係数曲線については、文部省値の男女とも各年度間にほとんど差がないカーブが描かれていた。一方厚生省値および補正值では男女とも各年度間、年齢間のばらつきは極めて大きく、一定の傾向は全く見られなかった。
3. 体重実測値で両省間に有意差があったのは、男子では、1996年および1998年の各4件をはじめ、全体合わせて12件でいずれも文部省値が高かった。補正值で有意差があったのは、1995年の1件、1996年の4件で、いずれも文部省値が高い。  
女子の実測値では、1996年の6件を筆頭に、全体合わせて実に20件で、いずれも文部省値が高かった。補正值で有意差のあったのは、1995年の1件を除いては、すべて文部省値の方が高く、全体合わせて、これまた15件にも及んでいた。
4. 体重変動曲線は、文部省値の各年度男女のいずれもほぼ類似した放物線状のカーブを描いていた。一方、厚生省値および補正值とも身長の場合と同様、各年度、年齢間のばらつきは極端に大きく、一定の傾向を見出すことは全く不可能なパターンであった。
5. 両省の調査対象人数については、文部省の各年度の年齢当り平均人数は男女とも約26,800人であった。一方厚生省の男女別年齢当り平均人数を1971年までさかのぼって調

べたところ、それぞれ219人と199人であったのが、逐年的に遞減傾向にあり、1998年の男女はそれぞれ僅か75人および71人であった。

以上の結果から、両省計測値間に差が生じた原因としては、厚生省値に大きな原因のあることが判明した。すなわち、各年度の厚生省値の変動係数曲線は一つとして類似したパターンはなく、しかもそのすべてが異なった山あり谷ありの多峰性の全く意味不明の曲線であった。このことからわかるように、両省値間に生じた差は厚生省値そのものに起因していることは明明白白である。その元を正せば、厚生省の調査対象人数があまりにも僅少であった点に、大方の原因があり、それが結果としてデータそのものに大きな過誤を生じたと断定せざるをえない。

なお、著者らは過去2回、本学会において通算10年間（1986～1990年、1991～1995年）の文部・厚生両省の統計データについて比較検討を行い発表してきたが、今回の調査研究を含め、いずれも同じような結果が導出されていた。

## 文 献

- 1) 厚生統計協会：身長・体重の平均値、性・年齢階級別、児童・生徒の身長・体重・胸囲・座高の平均値及び標準偏差、国民衛生の動向、460、厚生統計協会、東京、1985
- 2) 厚生省保健医療局健康増進栄養課監修：体位の平均値及び標準偏差（性、年齢階級別）、国民栄養の現状、129、第一出版、東京、1986
- 3) 文部省：年齢別身長・体重・胸囲・座高の平均値及び標準偏差、学校保健統計調査報告書、19、大蔵省印刷局、東京、1985
- 4) Ando, I., Uenobe, F., Goto, E., et al.: Etudes des Enfants Obèses à Osaka, *Memoirs of Osaka Kyoiku Univ. Ser. V.* 16, (2) 77-84, 1967
- 5) Ando, I., Uenobe, F., Nakai, M., et al.: Métabolisme Lipideque des Enfants Obèses, *Memoirs of Osaka Kyoiku Univ. Ser. III.* 17, (2) 155-159, 1968
- 6) 上延富久治、萱村俊哉、奥村佳世ほか：青年期における健康問題に関する調査研究(I)―体位、体型および食生活の実態について―、大阪教育大学紀要、第Ⅲ部門、36(2)：225～237、1987
- 7) 上延富久治、山本信弘、光藤雅康ほか：青年期における健康問題に関する調査研究(Ⅱ)、大阪教育大学紀要、第Ⅲ部門、37(1)：75～86、1988
- 8) 上延富久治：心身の発達と小児および青少年の保健、(杉浦正輝、成田功編著)、新しい学校保健、55～100、建帛社、東京、1993
- 9) 須藤勝見、安地眞理子：学校保健統計による身長別標準体重に関する研究、大阪教育大学紀要第Ⅲ部門、第45巻第1号、147～156、1996
- 10) 上延富久治編著：学校保健、公衆衛生学要論、181～191、建帛社、東京、2001
- 11) 文部省：年齢別 身長・体重・胸囲・座高の平均値及び標準偏差、学校保健統計調査報告書、大蔵省印刷局、東京、1995～1999
- 12) 厚生省保健医療局健康増進栄養課監修：体位の平均値及び標準偏差（性、年齢階級別）、国民栄養の現状、第一出版、東京、1996～2000
- 13) 東郷正美、鈴木庄亮、鈴木路子ほか：発育発達にみられる地域差に関する研究、「地域・家庭環境の小児に対する影響に関する研究」報告書：108、1990
- 14) Gindhart, P.S.: The effect of seasonal variation on long bone growth, *Human Biol.* 44 : 335-350, 1972
- 15) 島太郎、中川一郎：小児の発育と栄養所要量、p. 83. 朝倉書店
- 16) Togo, M.: Seasonality of growth in man. In: *Seasonal Effects on Reproduction, Infection and Psychoses.* ed. T. Miura SPB Academic Publishing. Hague, pp. 151-157, 1987
- 17) 東郷正美：個人の発育と集団の発育、身体計測による発育学、3～13、東京大学出版会、東京、1998

(受付 01. 3. 3 受理 01. 8. 23)

連絡先：〒518-0642 名張市桔梗が丘西2-1-

25

(上延)

共同研究

青少年の危険行動とその関連要因に  
関する基礎的研究  
—国内外の研究動向と今後の研究課題—

渡 邊 正 樹\*<sup>1</sup> 野 津 有 司\*<sup>2</sup> 荒 川 長 巳\*<sup>3</sup>  
渡 部 基\*<sup>4</sup> 市 村 國 夫\*<sup>5</sup> 下 村 義 夫\*<sup>6</sup>

\*<sup>1</sup>東京学芸大学 \*<sup>2</sup>筑波大学体育科学系 \*<sup>3</sup>島根大学保健管理センター  
\*<sup>4</sup>北海道教育大学札幌校 \*<sup>5</sup>常磐短期大学 \*<sup>6</sup>岡山大学教育学部

Perspectives of Adolescent Risk Behavior Surveys : An Overview of Adolescent  
Risk Behavior Surveys and Some Directions for Future Research

Masaki Watanabe\*<sup>1</sup> Yuji Nozu\*<sup>2</sup> Osami Arakawa\*<sup>3</sup>  
Motoi Watanabe\*<sup>4</sup> Kunio Ichimura\*<sup>5</sup> Yoshio Shimomura\*<sup>6</sup>

\*<sup>1</sup>*Tokyo Gakugei University*

\*<sup>2</sup>*Institute of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba*

\*<sup>3</sup>*Health Administration Center, Shimane University*

\*<sup>4</sup>*Hokkaido University of Education Sapporo*

\*<sup>5</sup>*Tokiwa Junior College*

\*<sup>6</sup>*Faculty of Education, Okayama University*

The aim of this article was to review adolescent risk behavior surveys and to propose some directions for future research in Japan. First of all, the significances of surveys were discussed. Secondly, we took a general view on the main surveys in Japan and other countries. Surveys in Japan were classified into six categories: tobacco, alcohol and illegal drug use; sexual behaviors; dietary behaviors and physical activities; traffic-related safety behaviors; violence and bullying; suicidal behaviors. Lastly, we pointed out some problems about a national survey and directions for future research.

Key words : risk behavior, adolescents, instruments and data collection, correlates, national survey

危険行動, 青少年, 調査方法, 関連要因, 全国調査

## I 青少年の危険行動研究の意義

近年, 国内外において青少年の生命や健康を損なう様々な危険行動(あるいは健康危険行動と呼ばれる)が注目を集めている\*. 危険行動には, 交通事故につながる無謀な行動, 暴力, 喫煙・飲酒・薬物乱用行動, 性感染症や望まない妊娠につながる危険な性的行動, 自殺を含む

自傷行為など従来問題行動として捉えられていた行動に加え, 生活習慣病につながる食行動と身体運動も含まれている. 特に米国では, 疾病管理センター(CDC)が隔年で実施している全米規模の調査(Youth Risk Behavior Surveillance, 以下YRBSとする)の他, 青少年を対象としたさまざまな危険行動調査が実施されている.

もちろんこのような危険行動調査は、個々の危険行動別には日本においても過去に数多く実施されている。しかしこれらを改めて包括的な危険行動としてとらえ、調査・分析していく意義として、次のような点が挙げられる。

まずこれら危険行動は、青少年の現在および将来の傷病や死亡の直接的・間接的な原因となっていることが挙げられる。ちなみに日本では1歳から20歳までの死亡原因の第1位は不慮の事故となっており、10歳以降では自殺が死亡原因第3位以内に入っている<sup>1)</sup>。また危険行動の多くが青少年期に始まり、成人以降も継続する可能性が高いという共通した特徴が指摘できる。特に喫煙、飲酒、不適切な食習慣・運動習慣は日本人の3大死因（悪性新生物、心疾患、脳血管疾患）につながる危険性が高い。

第二に、それぞれの危険行動は互いに関連をもち、同時もしくは連続的に生じるという点が指摘できる<sup>2)</sup>。例えば、飲酒する者は同時に喫煙する可能性も高く、さらに喫煙や飲酒が薬物乱用の入り口（ゲートウェイ）になる可能性があることも知られている。また飲酒は危険な性的行動や無謀な自動車運転などと結びつきやすい。すなわち、ある危険行動は別の危険行動を誘発させ、健康を阻害する可能性がより高くなるのである。

さらに危険行動に対する予防教育の基礎資料を得るという点からも、危険行動調査は重要な意味を持つ。米国では、前述のCDCによる危険行動調査結果を、学校健康教育の効果を調べるという目的で使用している州もある<sup>3)</sup>。危険行動においては個々の行動間の関連や背景の共通性などが予測されるので、その防止教育には、特定の健康問題に限定されない、一貫した理念や継続性をもつ包括的な健康教育(Comprehensive Health Education Program)が効果的であると考えられている。しかし従来欧米を中心に包括的な健康教育プログラムの開発が進められているものの、青少年の所属する社会の文化や規範が危険に対する意識や行動に対して影響を与えることは否定できない<sup>4)</sup>。したがって我

が国に適した健康教育を構築していくために、日本の青少年に対する危険行動調査は有意義な情報を得る上で不可欠である。

本研究は、今後の大規模な青少年危険行動調査の実施を踏まえ、これまで行われてきた危険行動調査の概要を整理し、今後の青少年危険行動調査の研究に関する課題と展望を示すことが目的である。

(渡邊正樹, 野津有司)

## II 青少年の危険行動に関する海外の主な研究

この章では、CDCによるYRBSと、それ以外の海外における主要な危険行動調査についてその概要を述べる。

### 1. YRBSについて

米国の疾病管理センター(CDC)では、1990年からほぼ隔年(1990年, 1991年, 1993年, 1995年, 1997年, 1999年)で継続的に、全米規模のYouth Risk Behavior Surveyを実施している<sup>5-15)</sup>。この調査の目的は、米国における青少年の様々な危険行動を包括的に捉えて問題の所在やその動向を把握することである。これらのデータは、青少年の危険行動を防止するための教育や対策の成果を評価する指標の一つとして役立てられている。また、青少年の危険行動に共通して有効な防止教育プログラムを開発するための基礎資料としても利用されている。

調査対象は、国内50州およびコロンビア特別区(90年については、プエルトリコ、ヴァージン諸島を含む)から3段階で標本抽出された第9学年から第12学年までの生徒で、参加した学校数は110~155校(学校における回収率70~79%)、回答者数は10,904~16,296名(生徒における回収率86~90%、全体の回収率60~70%)である。調査方法については、無記名自記式の多肢選択による質問紙調査法で、訓練された専門家(ただし、1999年には記述がない)が2~5月に各教室に出向いて、事前に親の承諾を得られた生徒を対象に調査を行っている。

調査内容は、1990年から1999年まで基本的に

表1 YRBSの調査年, 参加州・校数, 回答者数, 回収率および質問数

調査年	参加州数	参加校数	回答者数	全体の回収率*	質問数
1990	23州	124校	11,631人	64%	70
1991	28	137	12,272	68	75
1993	42	155	16,296	70	87
1995	44	110	10,904	60	88
1997	42	151	16,262	69	89
1999	45	144	15,349	66	92

\*全体の回収率 = 最終的な回答者数 / 標本抽出対象校の全生徒数 × 100

は変わっておらず, 故意または不慮の事故に関係する行動 (交通安全行動, 暴力, 自傷行動など), 喫煙, 飲酒, 薬物乱用, 望まない妊娠およびHIVを含む性感染症に関係する性行動, 危険なダイエットを含む食行動, 身体運動などである。調査項目数については70~92問で, 若干の増減がみられる (表1)。

調査結果については, 全国の動向を分析することを中心としながら, 特定の地域, 民族, 危険行動などに焦点を当てた分析もみられ, これまでに少なくとも120編余りの報告が示されている。

全国的な動向の一部を紹介すると, 1991年から1999年にかけて改善された危険行動は, シートベルトの未着用 (25.9%→16.4%), 自転車運転中のヘルメット未着用 (96.2%→85.3%), 飲酒運転の同乗 (39.9%→33.1%), 銃の携帯 (1991データなし, 1993: 7.9%→4.9%), 学校内への武器の持ち込み (1991データなし, 1993: 11.8%→6.9%), 殴ったり蹴ったりの暴力 (42.5%→35.7%), 学校内での暴力 (1991データなし, 1993: 16.2%→14.2%), 自殺願望 (29.0%→19.3%), 無煙たばこの使用 (1991・1993データなし, 1995: 11.4%→7.8%), 性交経験 (54.1%→49.9%), 4人以上の相手との性交経験 (18.7%→16.2%), 最近の性交時でのコンドーム使用 (46.2%→58.0%), ストレッチ運動 (47.8%→53.6%) などであった。他方, 悪化した危険行動は, 頻繁 (この30日間で20日以上) の喫煙 (12.7%→16.8%), 大麻の使用経験 (31.3%→47.2%),

コカインの使用経験 (1.7%→4.0%), 医師の処方外でのステロイドの使用経験 (2.7%→3.7%), 最近の性交時でのピルの使用 (20.8%→16.2%) などであった。

なお, CDCでは他にも, 大学生や普通高校を退学した者が通う「代替高校」の生徒の危険行動についても注目し, それぞれを対象に同様の内容の危険行動調査を行っている<sup>16)17)</sup>。

(野津有司, 渡部 基)

## 2. その他の危険行動調査

次に前記のYRBS以外の主要な青少年危険行動調査を取り上げる。なおここで取り上げた調査は1990年以降に実施され, 複数の危険行動を調査しているものに限定した。

ミネソタ大学などが行ったThe National Longitudinal Study on Adolescents Healthでは, 1994年から翌年に7年生~12年生を対象とした危険行動とその関連要因が調査された<sup>18)</sup>。この調査では危険行動としてうつ状態, 自殺の試み, 暴力, 喫煙, 飲酒, マリファナの使用, 性的行動 (最初の性交年齢と妊娠経験の有無) が取り上げられ, 関連要因としては個人的要因, 家庭環境, 学校環境が取り上げられている。この調査の対象者は約9万人を対象とした質問紙調査に加え, 約1万人を対象とした自宅における面接調査を行った点が特徴的である。特に面接調査においては, 関連要因について詳細な項目が尋ねられている。また回答形式も, 回答者はイヤホンで質問を聞いた後, 直接パーソナル・コンピュータへ回答するという形式を用いて, 秘匿性を保つ工夫を行っている。この調査

の結果、個人的要因による影響が最も大きいことが明らかになったが、家庭環境や学校環境が良好であることが危険行動を抑制していることも指摘された。

The National Survey of Adolescent Males は、1988年以降数回に渡り継続的に行われている調査である<sup>19,20)</sup>。1995年には15歳～19歳の男子を全米から1,729人抽出し、家庭における面接調査を実施している。この調査の特徴的な点は、ハイスクールの生徒だけではなく、生徒以外の学校に通っていない青少年も調査対象としている点である。後者は前者に比較して、危険行動をとりやすいことが報告されている。なお調査の当初の目的は、主に青少年男子の性的行動の実態把握であったが、その後複数の危険行動を調査するようになった。

Search Institute (米国ミネソタ州) は全米の6年生から12年生までの青少年計約10万人を対象に、危険行動とその関連要因とされるAssets (長所あるいは利点という意味) を調査し、40のAssetsが危険行動に関係していることを明らかにした<sup>21)</sup>。危険行動としては、飲酒、たばこ、薬物乱用、性交、うつ状態と自殺の試み、反社会的行動 (万引き、器物破壊など)、暴力、学校での問題 (不登校、成績不振)、飲酒運転、ギャンブルが取り上げられている。

Assetsは、それぞれ20項目の外的Assets・内的Assetsに区別される。外的Assetsとは子どもたちを取り巻く社会環境のことであり、具体的には家庭、学校、地域と青少年との関係を示している。例えば外的Assetsの中の「支援」は、家族、学校、地域 (近所の人々) が青少年を支援してくれているかどうかを表す。それ以外には家庭、学校などにおけるルールが存在、他者からの好ましい影響、社会活動ができる環境の他、青少年自身が社会の中で重要な役割を演じることができるかどうか、外的Assetsに含まれる。内的Assetsは青少年自身の要因である。主体的に学習に取り組んでいるかという「学習への関わり方」、正直さや誠実さのような「肯定的な価値観」、意思決定や対人コミュニケー

ションのようなスキルの側面である「社会的な能力」、そしてセルフ・エスティームや目標観などを含む「前向きなアイデンティティ」が内的Assetsを構成している。

Search Instituteの調査では、これら40のAssetsの中で自分に該当するAssetsの数が多い者は危険行動をとる可能性が低く、逆にAssetsの数が少ないと危険行動をとる可能性が高くなるということが明らかになっている。つまりこれらAssetsで挙げられている条件を満たすような対策を講じることで、青少年の危険行動を阻止することが期待できるわけである。わが国でもそのまま当てはまるかどうかは検討の余地があるものの、今後の危険行動対策に参考になる点が多い。

上記以外にも米国では、州規模の危険行動調査は数多く行われている。例えばカリフォルニア州が行っているCalifornia Healthy Kids Surveyでは、州内の学区に対して青少年の危険行動調査の実施と評価を行い、さらに必要な情報提供も行っている<sup>22)</sup>。

米国以外でも、オランダ、スペイン、フランスなど各国で同様の調査が実施されている<sup>4)23)24)</sup>。  
(渡邊正樹, 市村國夫)

### Ⅲ 国内の主な調査

ここでは日本で過去行われた危険行動に関する調査を行動別に分類し、調査の概要を紹介する。ここで取り上げた調査は、1990年以降に行われたもので、青少年本人に対して直接回答を求めている調査のみに限定している。なお表2に調査の一覧を示したが、調査方法に関して詳細が不明なものについては記載を割愛した。研究によっては複数の危険行動を測定している調査もあるが、便宜上6つの危険行動 (①喫煙・飲酒・薬物乱用、②性的行動、③食生活・身体運動、④交通安全行動、⑤暴力、⑥自傷行動) に分類した。本文中に示した①—1などの番号は、表2の中の調査番号に対応している。

#### 1. 喫煙・飲酒・薬物乱用

我が国では、青少年を対象とした喫煙、飲酒、薬物乱用行動に関する調査は決して少なくはな

表2 我が国における青少年の危険行動に関する主な調査 (1990年以降)

危険行動の分類: ①喫煙・飲酒・薬物乱用, ②性的行動, ③食生活・運動, ④交通安全行動, ⑤暴力⑥自傷行動

調査分類番号 および調査名	調査事業 の主体	調査年月	調査対象	調査方法		
				場所	実施者	回答方法
①-1 高校生における飲 酒問題	国立療養所 久里浜病院	1990年 6月-12月	・全体: 8,538名(男子3,982名, 女子 4,556名) ・校種: 高校(1学年2,522名, 2学年 3,603名, 3学年2,413名)	教室	学級担任教員	自記式 無記名 質問紙
①-2 青少年の喫煙実態 に関する全国調査	国立公衆衛 生院疫学部	1990年12月 -1991年1 月	・全体: 57,383名(男子29,719名, 女子 27,664名) ・校種: 中学校1-3学年(男子15,369 名, 女子14,728名), 高校1-3学年 (男子14,350名, 女子12,936名)	教室	教員	自記式 無記名 質問紙
①-3 防煙とその実態把 握に関する調査研 究	財団法人健 康・体力づ くり事業財 団	1995年10月 -12月	・全体: 3,681人(男子2,105名, 女子 1,576名) ・校種: 小学校4-6学年1,081名(男 子550名, 女子531名), 中学校1-3学 年1,024名(男子541名, 女子483名), 高校1-3学年1,576名(男子1,014名, 女子562名)	教室	学級担任教員	自記式 無記名 質問紙 密封用封筒
①-4 1996年度未成年者 の喫煙行動に関す る全国調査	国立公衆衛 生院疫学部	1996年12月 -1997年1 月	・全体: 115,814名(男子57,116名, 女 子58,698名) ・校種: 中学校1-3学年42,798名(男 子21,471名, 女子21,327名), 高校1- 3学年73,016名(男子35,645名, 女子 37,371名)	教室	学級担任教員	自記式 無記名 質問紙 密封用封筒
①-5 児童生徒の覚せい 剤等の薬物に対す る意識等調査	文部省体育 局学校健康 教育課	1997年5月	・全体: 73,428名(男子37,225名, 女 子36,203名) ・校種: 小学校5-6学年17,108名(男 子8,628名, 女子8,480名), 中学校1- 3学年26,943名(男子13,878名, 女子 13,065名), 高校1-3学年29,377名 (男子14,719名, 女子14,658名)	—	—	自記式 無記名 質問紙
①-6 平成9年度 青少年のエイズ・ 健康行動に関する 調査研究	秋田県 秋田県教育 委員会	1997年10月 中旬-11月 初旬	・全体: 6,858名(男子3,555名, 女子 3,303名) ・校種: 高校1-3学年(1学年33.1%, 2学年33.2%, 3学年33.7%)	体育館, 大 教室など (生徒間を 約2メートル 離す)	学級担任教員	自記式 無記名 質問紙 密封用封筒
①-7 薬物乱用に関する 全国中学生意識・ 実態調査	国立精神・ 神経セン ター	1998年10月	・全体: 71,928名(男子36,740名, 女子 35,056名) ・校種: 中学校1-3学年(1学年 23,089名, 2学年24,287名, 3学年 24,552名)	—	教員	自記式 無記名 質問紙 密封用封筒
①-8 喫煙, 飲酒, 薬物 使用行動と社会規 範に関する調査	SDAY研究 プロジェクト	1997年 2-3月 1998年12月	・全体: 2,884名(男子1,494名, 女子 1,390) ・校種: 中学校2学年866名(男子435 名, 女子431名), 高校2学年2,018名 (男子1,059名, 女子959名)	教室	教員	自記式 無記名 質問紙 密封用封筒
①-9 薬物乱用に関する 世論調査	総理府広報 室	1999年11月 18日-28日	・全国15歳以上の者: 3,548名(男子 1,608名, 女子1,940名)	—	調査員	調査員によ る面接聴取
②-1 思春期のパート ナー関係について の調査	厚生省エイ ズ対策研究 推進事業 HIV疫学研 究班	1994年 6-9月	・全体1,968名(男子838名, 女1,128名) ・校種: 中学生11.6%, 高校生24.1%, 専門学校生4.4%, 短大生2.1%, 大 学生21.0% ・年齢: 13-19歳53.0%, 20-24歳46.8%	自宅(郵送)	—	自記式 無記名 質問紙
②-2 エイズに関する調 査 Akita AIDS Education for Ado lescent Survey (AAAS)	秋田県健康 教育研究会	1994年 9-10月	・全体高校1-3年7,309名 ・男子3,851名, 女子3,458名	体育館ある いは大教室 (直接配布)	学級担任教 員	自記式 無記名 質問紙 密封用封筒
②-3 東京都幼・小・高 心障学級・養護学 校の性意識・性行 動に関する調査	東京都幼稚 園・小・中 高・心障性 教育研究会	1999年1月	・全体12,856名 ・中学校1-3年男子1,448名, 女子 1,276名 ・高校1-3年男子1,567名, 女子1,601 名	不明	検査者	自記式 無記名 質問紙 密封用封筒

調査分類番号 および調査名	調査事業 の主体	調査年月	調査対象	調査方法		
				場所	実施者	回答方法
②-4 全国国立大学生 Sexual Health Study	厚生省エイズ 対策研究事業 HIV感染症の 疫学研究班 国立大学保健 管理施設協議 会エイズ特別 委員会	1999年 4-6月	・全体13,645名 ・校種：大学1年男子5,314名, 女子 4,160名, 4年男子2,168名, 女子 1,458名	自宅が原則 (直接配布)	—	自記式 無記名 質問紙 密封用封筒
②-5 日本人のHIV/ AIDS関連知識, 性行動, 性意識に ついての全国調査 (HIV & SEX in JAPAN Suvey)	厚生省エイズ 対策研究事 業HIV感染 症の疫学研 究班	1999年 6-7月	・全体3,562名(男子1,762名, 女子 1,800名) ・年齢(18-24歳): 男子216名, 女子 205名	自宅あるい は自宅以外 の調査員面 前(直接配 布)	トレーニング を受けた 調査員	自記式 無記名 質問紙 密封用封筒
②-6 青少年の性行動— わが国の中学生・ 高校生・大学生に 関する調査報告 (第5回)	日本性教育 協会	1999年11月 -2000年1 月	・全体: 5,492名(男子2,846名, 女子 2,646名) ・校種: 中学校1-3年2,187名, 高校 (普通科および職業科) 1-3年 2,176名, 短大1-2年112名, 大学 1-4年1,017名	教室(直接 配布)	生徒と面識 のない校外 の監督者	自記式 無記名 質問紙
③-1 児童生徒の食生活 等実態調査	日本体育・ 学校健康セ ンター	1995年11月	・全体10,928名(男子5,483名, 女子 5,383名, 不明62名) ・校種: 小学校5年5,549名, 中学校 2年5,379名 ・その他保護者	自宅	—	自記式 無記名 質問紙
③-2 体力・運動能力調 査	文部科学省 スポーツ・ 青少年局	毎年実施	・小学生, 中学生, 高校生, 高等専門 学校学生, 短大生, 大学生約7万名	学校	—	運動習慣につ いては記名 自記式 質問紙
④-1 自転車の安全かつ 適正な利用の促進 に関するアンケート 調査	総務庁交通 安全対策室	1998年 10-11月	・仙台市など自転車利用率が高い全国 7都市の15歳以上男女全体1,172名	郵送・留置	—	自記式 質問紙
⑤-1 非行原因に関する 総合的調査(第3 回)	総務庁青少 年対策本部	1998年9月	・全体9,620名 ・校種: 小学校5,6年2,532名, 中学 校1-3年3,023名, 高校1-3年 3,255名, 大学生(20歳未満)780名 ・その他, 非行少年1,270名	—	調査実施は 外部機関に 委託	自記式 無記名 質問紙 ただし非行少 年に関しては 聞き取り
⑤-2 青少年の暴力観と 非行に関する調査 研究	総務庁青少 年対策本部	1999年 9-11月	・全体2,089名 ・校種: 中学校1-3年998名, 高校1 -3年1,091名 ・その他非行少年1,403名	学校 (非行少年 は鑑別所)	—	自記式 無記名 質問紙 密封用封筒
⑤-3 児童生徒のいじめ に等に関するアン ケート調査	児童生徒の 問題行動等 に関する調 査研究協力 者会議	1994年12月 -1995年1 月	・全体9,420名 ・校種: 小学校4-6年2,048名, 中学 校1-3年4,694名, 高校1-3年 2,678名 ・その他保護者約1万名, 教員約600名	学校	—	自記式
⑤-4 小学生の生活に関 するアンケート調 査	法務省人権 擁護局	1995年 10-11月	・小学校5,6年生10,848名	—	子どもの人 権専門委員	自記式
⑤-5 いじめ・登校拒 否・校内暴力問題 に関するアンケー ト調査	総務庁行政 監察局	1997年 10-11月	・小学校4-6年, 中学校1-3年計 16,824人 ・その他保護者および教師	学校	—	自記式 無記名 質問紙 密封用封筒
⑥-1 高校生にとっての 生と死(モノグラ フ・高校生)	ベネッセ教 育研究所	1997年 4-5月	・公立高校1-3年生2,216人	学校	—	自記式

い。ここでは、調査の実施が1990年以降で、調査対象が全国規模または大数であることを条件とし、今回可能な範囲で報告書入手できた9つの調査<sup>25-33)</sup>について、注目される点を述べる。

まずは、調査方法についてである。①—9「薬物乱用に関する世論調査」<sup>33)</sup>は調査員による面接調査法であるが、その他の調査は、無記名自記式の質問紙調査法で、学級担任などの教員によって実施されている。この場合、生徒が正直に回答できるように、密封用封筒を用いて回答用紙を回収するなどの工夫が多くみられる。また、①—6「青少年のエイズ・健康行動に関する調査研究」<sup>30)</sup>では、調査場所として体育館や大教室を指定し、生徒間を約2メートル離して実施するようにしている。この種の調査では、生徒のプライバシー、回答の秘匿性を十分に保障することは重要な課題であるので、こうした工夫がさらに徹底される必要がある。

二つ目は、学校の回収率についてである。調査事業の主体が文部省（現文部科学省）や教育委員会の調査では90%以上の高い回収率が確保されているが、財団法人や研究機関などでは10数%から60%台になっている。研究機関などが調査主体となる調査では、学校の協力を得るための十分な説明に加えて、強力な何らかの工夫が必要であることがうかがえる。

三つ目は、調査対象についてである。全国地域を対象に無作為抽出した大数の調査がいくつかみられ、喫煙、飲酒、薬物乱用以外の危険行動調査と比べると全国的な把握が図られていると思われる。

四つ目は調査内容についてである。喫煙、飲酒、薬物乱用の経験についてはほぼ共通して取り上げられており、また、将来の行動の予測についても多くの調査で扱われている。もちろん、現在の状況についても、とくに喫煙および飲酒に関しては詳細に調査されている。しかし、具体的な質問文や選択肢はそれぞれの調査の特徴がみられ異なっているので、調査結果をそのまま比較することは難しい状況である。例えば、現在喫煙者の定義については最も共通性がみら

れたがそれでも、①—2「青少年の喫煙実態に関する全国調査」<sup>26)</sup>では「この1ヶ月に1度でも喫煙したことのある者」であり、①—3「防煙とその実態把握に関する研究」<sup>27)</sup>では「ここ1ヶ月間に1本以上タバコを吸った者」であるなど、微妙に異なっている。各調査結果の比較を可能にする点から言えば、こうした行動に関する最小限の質問項目については、できる限り共通して用いることが望まれる。

最後に、我が国では青少年の喫煙、飲酒、薬物乱用行動に関して、同一の内容と方法で継続的に実施した調査は、今までのところ見当たらない。青少年の喫煙、飲酒、薬物乱用の動向を正確に把握するためには、計画的な動向調査が不可欠であり、今後の大きな課題である。

(野津有司)

## 2. 性的行動

性的行動に関する調査内容については、大きく二つに分けて述べることにする。一つは、性交を含む様々な性的行動の実態把握について、もう一つは、それらに影響をおよぼす関連要因（以下、関連要因と称す）についての内容である。

厚生省研究班による調査②—1<sup>34)</sup>と②—5<sup>35)</sup>、また厚生省研究班・国立大学保健管理施設協議会の共同による調査②—4<sup>37)</sup>は、エイズ対策事業の一環として行われている。そのため、性交やコンドーム使用等の性的行動の実態把握に加え、関連要因として、HIV/STD（性感染症）等に関する知識や意識、性モラル等についての項目も設定している。

秋田県健康教育研究会による調査②—2<sup>35)</sup>では、性交の実態把握に加え、PRECEDEモデルを参考に、関連要因として、HIV/STD感染予防に関連した前提要因（知識や態度等）、実現要因（スキル）、強化要因（まわりの人々の支援的態度や行動）等から調査項目が構成されている。

東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会による調査②—3<sup>36)</sup>では、中学生および高校生において、性交やキス等の性的行動の実態把

握に加え、関連要因として、援助交際についての意識等についての項目も設定している。

日本性教育協会による調査②—6<sup>39)</sup>では、性交やキス等の性的行動の実態把握に加え、関連要因として、性に関する意識や学校への適応状況等についての項目も設定している。

調査対象については、その抽出方法のちがいにより、その総数が1,968～13,645名と、かなりの幅がみられた。

秋田県健康教育研究会による調査②—2は、秋田県下の全日制全64高等学校のうち、協力が得られた63校の各学年1クラスの全生徒を対象に実施している。この場合、エイズ教育に熱心なクラスなどに特定されることを避けるため、原則として各学年とも、第1番目のクラス（1組あるいはA組等）を対象としている。

厚生省研究班・国立大学保健管理施設協議会の共同による大学生を対象とした調査②—4では、全96国立大学のうち、協力が得られた26大学の第1学年と第4学年を対象としている。

厚生省研究班による18～59歳を対象とした調査②—5では、住民基本台帳に基づく層化2段無作為抽出法を用いている。

日本性教育協会による調査②—6では、全国から大都市、中都市、町村を各4地点、計12地点を抽出し、中学から大学まで、学生・生徒数、学校種別、学校規模を考慮しながら58校を選び、各学年からいくつかのクラスを抽出している。その後、全国の学生・生徒数の分布を考慮し、地点別、学校種別、学年別、性別に一定数を割り当てる形で無作為抽出法を用いている。

調査方法については、すべての調査で、自記式無記名の多肢選択による質問紙を用いている。調査時期、調査実施者および場所については、個々の調査によって異なる。

秋田県健康教育研究会による調査②—2では、9～10月に、学級担任教員が、原則として、生徒同士の間隔が2m以上離れて回答ができる体育館あるいは大教室で実施し、密封用封筒を用いて回収している。

厚生省研究班・国立大学保健管理施設協議会

の共同による②—4調査では、4～6月に、調査対象者に直接、配布し、自宅で回答することを原則として実施し、健康診断時に密封用封筒を用いて回収している。

厚生省研究班による調査②—5は、6～7月に、トレーニングを受けた調査員が、自宅あるいは自宅以外の場所に出向いて実施し、密封用封筒を用いて回収している。

日本性教育協会による調査②—6では、11月～翌年1月に、生徒と面識のない校外の監督者が、教室で実施している。また、この調査は、1974年以降、定期的実施されており、性的行動の経年的変化も明らかにしている。

調査内容については、すべての調査で性交経験について質問しており、性交経験の把握は調査の必須的な内容と言える。また、コンドームをはじめとした避妊法について質問する調査もいくつかみられ、今後はこうした調査項目についても十分検討する必要がある。さらに、関連要因については、個々の調査によって多様であるが、性的行動の選択に対して、より強く影響を及ぼすと考えられる要因を重視する必要がある。

調査対象数については、抽出する方法のちがいにより、かなりの幅がみられたが、できるだけ厳密な抽出を実施することにより、代表性の高い標本抽出をいっそう目指すべきである。

調査方法は、すべての調査で、自記式無記名の多肢選択による質問紙を用いており、現時点では、このような質問紙を用いることがよいと思われた。

(渡部 基)

### 3. 食生活・身体運動

食生活の実態に関する調査では日本体育・学校健康センターが5年毎に実施している「児童生徒の食生活等実態調査」<sup>40)</sup>が代表的なものと言えよう。平成7年度に実施された調査③—1は、46都道府県の350校に調査票を配布し342校から回収している。調査対象は小学校5年生及び中学校2年生とその保護者たちであり小学生5,549名、中学生5,379名から回答を得ている。

保護者数は児童生徒と同数となっている。調査内容は(1)食に対する意識(知識)、(2)食生活の実態、(3)食品及び料理に対する嗜好など6項目のテーマになっている。

子どもの食生活における問題は孤食、朝食の欠食、偏食などが考えられるが、この調査の結果では小学生の5.0%、中学生の14.4%が朝食を一人で食べていた。また、朝食の欠食では小、中学生とも約10%程の者が週2～3日は欠食すると回答しており、その理由に「時間がない」(39.0%)、「食欲がない」(25.0%)などを挙げていた。また、食品の嗜好では野菜類を嫌う者が著しく多く、肉類より魚類を嫌う結果が示されていた。

スポーツ活動の実施状況については昭和39年以来、文部省(現文部科学省)体育局が実施してきた体力・運動能力調査のなかに関連の調査項目が含まれている。この調査対象は全校の小学校から大学までの学齢期の男女、20～64歳の成年男女、65～79歳の高齢者男女から抽出している。平成11年度の調査結果③—2<sup>40)</sup>では、小学校児童12,529名(回収率92.6%)、中学校生徒7,859名(回収率92.9%)、高等学校生徒(全日制)7,139名(回収率93.8%)などの結果が示されている。調査項目は運動部、スポーツクラブへの所属の有無、運動・スポーツの実施頻度、1日当たりの運動・スポーツの実施時間の3項目で、それらの項目と体力テスト得点との関連が明らかにされている。小、中、高校のどの年代においても運動部、スポーツクラブに所属しているグループのほうが、運動・スポーツの実施頻度が高いほうが、また運動・スポーツ実施時間の長いほうが体力テストの得点が高く、逆に学校の体育の授業以外に運動・スポーツに取り組みないグループにおいては最も低い得点を示しており、運動・スポーツの実施が子どもの体力向上にとって重要であることが明らかにされている。

(市村國夫)

#### 4. 交通安全行動

交通事故は、青少年期における重大な死亡原

因となっている。例えば、平成10年には5～14歳、15～24歳の各年齢層において不慮の事故が死因順位の1位となっているが、その中で交通事故死亡は5～14歳で51.3%、15～24歳で80.9%も占めている<sup>1)</sup>。このような死亡事故の背景には、青少年本人の危険行動が存在することが十分に予想される。

しかしながら交通場面における青少年の危険行動についての調査は思いのほか少ない。その理由として、警察庁交通統計によって交通事故の詳細な実態が把握できることが挙げられるであろう。事故による死傷者の統計だけではなく、法令違反の統計からも危険行動の実態をある程度推測することが可能である。しかし事故に至らない危険行動の頻度や実行率は、事故統計を大きく上回っていると予想される。そのため交通事故統計とは別に、交通場面における危険行動の実態を把握することには意義があると思われる。

交通安全行動に関する調査研究が少ない中、総務庁が1998年に行った「自転車の安全かつ適正な利用の促進に関するアンケート調査」<sup>42)</sup>からは、自転車利用に関わる危険行動が、若干ではあるが知ることができる(④—1)。例えば、夜間のライト点灯を守る人は79.9%、信号機に従う人は77.5%という結果が得られている。しかしこの調査は15歳以上という広い年齢層を対象としており、青少年の実態を正確に把握できるわけではない。交通事故の重大さを鑑みるならば、やはり青少年の交通場面における危険行動を調べる必要性があるだろう。

(渡邊正樹)

#### 5. 暴力

青少年の暴力については、例えば刑法犯少年の検挙人員や文部科学省による「生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について」の報告書などから、その実態を推測することは可能である。しかし第3者に把握されない暴力の実態については、正確に捉えることは必ずしも容易ではない。その中で暴力に関連した比較的規模の大きな国内調査を行ったものとしては、総務

庁（現総務省）が行った一連の調査が挙げられる。なお総務庁が行った調査の多くは、学校に在学する生徒学生（一般群）だけではなく、補導されたり少年鑑別所入所中の少年ら（非行群）も調査対象としている点で特徴的である。しかしここでは一般群のみの結果を紹介する。

1998年に実施された「非行原因に関する総合的研究調査（第3回）」では、全国15都府県の小学校5年生～大学生（20歳未満）9,620人を対象に、非行の実態と原因について調査を行っている（⑤—1）<sup>43)</sup>。その中で、最近1年間にナイフを持ち歩いた経験のある中学生は2.7%、高校生は1.9%であった。また最近1年間に暴力をふるった中学生は3.3%、高校生は2.9%と報告されている。1999年に実施された「青少年の暴力観と非行に関する研究調査の概要」（⑤—2）では、全国5都府県の中・高校生2,089人を対象として調査を行い、親への暴力経験者が6.9%、教師への暴力経験者が0.6%、友人への暴力経験者が11.0%と報告されている<sup>44)</sup>。高校生よりは中学生の方が、女子よりも男子の方が暴力経験者の割合は高かった。なお総務庁が実施した他の同様な調査としては、1992年の「青少年の規範意識形成要因に関する研究」<sup>45)</sup>、1996～1997年の「青少年の友人関係と問題行動に関する研究調査」<sup>46)</sup>などがある。

また暴力とは別にいじめについても様々な調査が行われている。いじめ発生件数や発生学校数は文部科学省の調査結果で把握できるが、個々の青少年がいじめの加害者になったり、被害者になっている実態は、青少年への直接の調査が必要である。1994～1995年に実施された「児童生徒のいじめ等に関するアンケート調査」（児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力者会議）では、全国小・中・高等学校に在学する児童生徒約1万人を対象として、いじめの原因や背景を中心に調査が行われた（⑤—3）<sup>47)</sup>。その中で今の学年でいじめられた経験があると回答したのは、小学生で22%、中学生で13%、高校生で4%であった。また今の学年でいじめた経験があると回答したのは、小学生

で26%、中学生で20%、高校生で6%であった。

法務省が1995年に実施した「小学生の生活に関するアンケート調査の概要」（⑤—4）<sup>48)</sup>では、調査対象となった小学校5、6年生10,848人中の42.2%が、これまでにいじめを受けたことがあると回答した。

いじめの場合、身体への直接的な暴力以外にも、からかいや仲間はずれという多様な状態が考えられるため、直接的な暴力よりも経験率はかなり高くなる。いじめという行為自体は、たとえ身体への暴力がなくても、被害者へ大きな精神的ダメージを与え、時として自殺のような自傷行動へつながることもある。そのような意味から一種の危険行動としてとらえることが可能であるが、いじめという行動を包括的な危険行動調査に含めるかどうか、またその場合はどのような質問項目となるかなどは検討すべき課題であろう。

（渡邊正樹，荒川長巳）

## 6. 自傷行動

前節で述べた暴力やいじめ、あるいは自殺に関する実態を把握できる資料として、「生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について」という報告書があるが、あくまでも発生件数によるデータであり、危険行動という視点から調査されたものとは言えない。

それ以外に自傷行動に関する調査は、いじめや自殺がマスコミをにぎわした時期に散発的に実施されているだけ（例えば「高校生にとっての生と死（モノグラフ・高校生）」⑥—1<sup>49)</sup>）で、全国的かつ継続的なものはないようである。「自殺したいと思ったことがあるか？」など自傷行動を直接問う質問は、「ある」という回答を得た場合の現場の対処が難しく、いじめで自殺者が発生したといった余程せっぱ詰まった状況でなければ実施されないであろうと思われる。しかし、自傷行動は複雑な要因が絡んだ事象であり、ある時期それだけを取り出して調査しても解決策は見えてこないであろうと考えられ、継続的で計画的な調査が必要ではないかと思われる。

(荒川長巳, 渡邊正樹)

#### IV 今後の研究課題

これまで述べた内容を踏まえて, 青少年の危険行動に関する今後の研究課題を整理すると以下のようなになる。

我が国でこれまで行われた青少年の危険行動調査のほとんどは, 特定の行動に焦点が当てられており, 包括的に問題を把握しようとする視点が希薄であった。例外的に秋田県で行われた調査①—6のように危険行動全般を取り上げている研究もあるが, 全国調査となると皆無である。また特定の行動の調査であっても, 継続的に行われているものは数少ない。最初に述べたように, 青少年の危険行動を包括的に調査する意義は非常に大きい。そのための留意点を挙げると次のようになる。

まず第1に調査方法であるが, 無記名の自記式質問紙法が原則となるだろう。国内外の一部の調査では面接法を用いているものもあるが, 全国規模の調査の場合に面接調査では実施が困難である。また密封用封筒の使用や調査①—6で用いたような生徒の正直な回答を得るための工夫も, 十分考慮する必要がある。

第2に, 危険行動に関する質問項目を作成する上での注意点であるが, できるだけ他調査(特にYRBS)との比較が可能なように, 質問文や選択肢を考える必要がある。海外の実態との比較が可能になれば, 我が国の青少年の特徴的な問題や諸外国と共通した問題なども客観的に明らかにすることができよう。また経年的な変化を見るためにも, 継続調査においては, 質問文の変更はできるかぎり避けたほうが良い。

第3に厳密な標本抽出計画に基づくサンプリングが必要である。調査規模も含めて, できるだけ代表性が高い集団を抽出することが望ましい。また同時に回収率を高めるための工夫も必要である。

そして最後に, 継続的に調査を実施していくことが何よりも重要である。

しかし今後検討が必要な問題も残されている。

例えば危険行動の関連要因についてどのような質問項目を設けるかという点である。YRBSのように危険行動のみを尋ねている調査もあるが, 健康教育の視点から述べるならば, 重要と思われる関連要因を精選して, 質問項目に含める必要がある。しかしThe National Longitudinal Study on Adolescents HealthやSearch Instituteの調査にみられるように, 非常に数多くの関連要因が考えられる。この問題については, 我が国の青少年を取り巻く状況を考慮しながら, 慎重に検討を進めていく必要があるだろう。

(野津有司, 渡邊正樹)

#### 謝 辞

本研究は日本学校保健学会の学会共同研究として, 学会から援助を受けて行われました。学会および学会員の皆様に深謝申し上げます。

#### 注

\*ここで言う危険行動を示す用語としては, 単にRisk Behaviorだけではなく, Health Risk Behaviorが多く用いられているが, 本稿では両者は特に区別していない。また類似した概念としてはProblem Behavior, Reckless Behavior, Risk-taking Behaviorなどがある。これらは狭義の危険行動として捉えることも可能であるが, 本稿では危険行動とは区別した。

#### 文 献

- 1) 財団法人厚生統計協会: 国民衛生の動向2000年, 厚生統計協会, 2000
- 2) DiClemente, R.J., Hansen, W.B. and Ponton, L. E.: Adolescents at risk: a generation in jeopardy. In DiClemente, R.J., Hansen, W.B. and Ponton, L. E. (ed.) Handbook of adolescent health risk behavior, 1-4, Plenum Press, NY, 1996
- 3) Kann, L., Warren, C.W., Harris, W.A. et al.: Youth risk behavior surveillance—United States 1995, *Journal of School Health*, 66: 365-377, 1996
- 4) Tursz, A.: Problems in conceptualizing adoles-

- cent risk behaviors: international comparisons, *Journal of Adolescent Health*, 21 : 116-127, 1997
- 5) CDC: 1990 national school-based youth risk behavior survey tape documentation manual
- 6) CDC: Results from the national school-based 1991 youth risk behavior survey and progress toward achieving related health objectives for the nation. *Public Health Rep* 1993; 108 (Supp. 1): 47-55
- 7) CDC: 1991 national school-based youth risk behavior survey data documentation manual
- 8) CDC: Youth Risk Behavior Surveillance-United States, 1993. *MMWR* 1995 ; 44 : 1-55
- 9) CDC: 1993 national school-based youth risk behavior survey data documentation manual
- 10) CDC: Youth Risk Behavior Surveillance-United States, 1995. *MMWR* 1996 ; 45 : 1-83
- 11) CDC: 1995 national school-based youth risk behavior survey data documentation manual
- 12) CDC: Youth Risk Behavior Surveillance-United States, 1997. *MMWR* 1998 ; 47 : 1-89
- 13) CDC: 1997 national school-based youth risk behavior survey data documentation manual
- 14) CDC: Youth Risk Behavior Surveillance-United States, 1999. *MMWR* 2000 ; 49 : 1-96
- 15) CDC: 1999 national school-based youth risk behavior survey public-use data documentation, <http://www.cdc.gov/nccdphp/dash/yrbs/index.htm>
- 16) Grunbaum, J.A., Kann, L., Kinchen, S.A. et al.: Youth Risk Behavior Surveillance-National Alternative High School Youth Risk Behavior Survey, United States, 1998: *Journal of School Health* Vol. 70, No. 1 pp. 5-17, 2000
- 17) CDC: Youth Risk Behavior Surveillance: National College Health Risk Behavior Survey-United States, 1995, *MMWR*, 46 (SS-6) : 1-54, 1997
- 18) Resnick, M.D., Bearman, P.S., Blum, R.W. et al.: Protecting adolescents from harm: findings from the National Longitudinal Study on Adolescent Health, *JAMA*, 278 ; 823-832, 1997
- 19) Lindberg, L.D., Boggess, S., Porter, L. and Williams, S: Teen risk-taking: a statistical portrait, Urban Institute (Washington DC), 2000
- 20) Sonenstein, F.L., Pleck, J.H. and Ku, L.: National Survey of Adolescent Males-1988 and 1990-91, <http://www.socio.com/srch/summary/aids/aid09-10.htm>
- 21) Scales, P.C.: Reducing risks and building developmental assets: essential actions for promoting adolescent health, *Journal of School Health*, 69 : 113-119, 1999.
- 22) California Healthy Kids Resource Center, <http://www.hkresources.org/>
- 23) Tuinstra, J., Groothoff, J.W., Van Den Heuvel, W.J.A. and Post, D. : Socio-economic differences in health risk behavior in adolescence: Do they exist ?, *Social Science and Medicine*, 47 ; 67-74, 1998
- 24) Hidalgo, I., Garrido, G. and Hernandez, M. : Health status and risk behavior of adolescents in the north of Madrid, Spain, *Journal of Adolescent Health*, 27 ; 351-360, 2000
- 25) 鈴木健二：未成年の飲酒問題—高校生における飲酒問題—, (河野裕明, 大谷藤郎編), 我が国のアルコール関連問題の現状—アルコール白書—, 55-80, 厚健出版, 東京, 1993
- 26) 蓑輪眞澄, 尾崎米厚, 木村博和：中高生の喫煙, (財)日本心臓財団の研究助成による青少年の喫煙実態に関する全国調査報告書, 1992
- 27) 大島明：防煙とその実態把握に関する調査研究 調査報告書, (財)健康・体力づくり事業財団, 1996
- 28) 平成9年度厚生科学研究費補助金健康増進研究事業「防煙の実態に関する研究」班：1996年度未成年者の喫煙行動に関する全国調査報告書, 1998
- 29) 文部省体育局学校健康教育課：児童生徒の覚せい剤等の薬物に対する意識等調査報告書, 文

- 部省, 1997
- 30) 秋田県健康教育研究会:平成9年度青少年のエイズ・健康行動に関する調査研究—報告書—, 秋田県・秋田県教育委員会, 1998
- 31) 薬物依存・中毒者の疫学調査及び精神医療サービスに関する研究班:中学生における「シンナー遊び」・喫煙・飲酒についての調査研究, 国立精神・神経センター, 1997
- 32) 市村國夫, 下村義夫, 渡邊正樹:中・高校生の薬物乱用・喫煙・飲酒行動と規範意識, 学校保健研究, 43, 39-49, 2001
- 33) 総理府広報室:薬物乱用, 月刊世論調査, 32(7), 2-76, 2000
- 34) 宗像恒次:青少年のエイズとセックス, 183-211, 日本評論社, 1996
- 35) 秋田県健康教育研究会:高校生のためのエイズ教育, 1-69, 秋田県・秋田県教育委員会, 1995
- 36) 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会:1999年調査 児童・生徒の性, 1-168, 学校図書, 1999
- 37) 厚生省エイズ対策研究事業HIV感染症の疫学研究班・国立大学保健管理施設協議会エイズ特別委員会:平成11年度厚生科学研究費エイズ対策研究事業特別重点研究, HIV感染症の疫学研究班総会討議資料, 176-184, 2000
- 38) 厚生省エイズ対策研究事業HIV感染症の疫学研究班:平成11年度厚生科学研究費エイズ対策研究事業特別重点研究, HIV感染症の疫学研究班総会討議資料, 158-175, 2000
- 39) 日本性教育協会:青少年の性行動—わが国の中学生・高校生・大学生に関する調査報告(第5回), 1-70, 日本性教育協会, 2000
- 40) 日本体育・学校健康センター, 平成7年度児童生徒の食生活等実態調査結果報告書(概要), 日本体育・学校健康センター, 1986
- 41) 文部省体育局, 平成11年体力・運動能力調査報告書, 文部省, 2000
- 42) 総務庁交通安全対策室, 「自転車の安全かつ適正な利用の促進に関するアンケート調査」結果の概要, 総務庁, 1999
- 43) 総務庁青少年対策本部, 非行原因に関する総合的研究調査(第3回), 総務庁, 1999
- 44) 総務庁青少年対策本部, 青少年の暴力観と非行に関する研究調査の概要, 総務庁, 2000
- 45) 総務庁青少年対策本部, 青少年の規範意識形成要因に関する研究, 総務庁, 1993
- 46) 総務庁青少年対策本部, 青少年の友人関係と問題行動に関する研究調査, 総務庁, 1997
- 47) 児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力者会議, 児童生徒のいじめ等に関するアンケート調査結果, 文部省, 1996
- 48) 法務省人権擁護局, 小学生の生活に関するアンケート調査の概要, 法務省, 1996
- 49) 深谷昌志(監修), モノグラフ・高校生Vol. 51高校生にとっての生と死, ベネッセコーポレーション, 1997

(受付 01. 6. 30 受理 01. 8. 23)

連絡先 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町  
4-1-1

東京学芸大学教育学部第四部(渡邊)



- ① 小学生による「健康」についてのポスター発表（栃木県石橋町立石橋小学校5, 6年生）
- ② 実践報告  
 栃木県石橋町立石橋小学校  
 大内 光（校長），三尾谷由美子（養護教諭），水沼由美子（学校栄養士）  
 熊田好紀（教諭），古沢誠一（教諭）  
 西村早苗（女子栄養大学）
- ③ 教育講演  
 「総合的な学習」を成果あるものに導くために  
 森 昭三（筑波大学名誉教授）
5. 学会参加費（講演集代含む）
- 1) 7,000円（学生・大学院生は3,500円，学生証をご提示ください）
- 2) 懇親会費 5,000円
- 4) 講演集代のみ 3,000円
6. 行 事
- 1) 学会本部行事
- |           |           |                  |             |
|-----------|-----------|------------------|-------------|
| ① 理事会     | 11月16日（金） | 栃木県総合文化センター特別会議室 | 13:00—15:00 |
| ② 評議員会    | 11月16日（金） | 栃木県総合文化センター特別会議室 | 15:30—17:00 |
| ③ 総会      | 11月17日（土） | 栃木県総合文化センターサブホール | 13:00—13:50 |
| ④ 編集委員会   | 11月18日（日） | 栃木県総合文化センター和室（2） | 12:00—13:00 |
| ⑤ 学会活動委員会 | 11月17日（土） | 栃木県総合文化センター和室（1） | 12:00—13:00 |
| ⑥ 国際交流委員会 | 11月18日（日） | 栃木県総合文化センター和室（1） | 12:00—13:00 |
- 2) その他の関連行事
- ① 教員養成系大学保健協議会 11月16日（金） D会場（第2会議室）
- ② 日本教育大学協会全国養護部門 11月16日（金） E会場（第3会議室）
7. 交通・宿泊 事務局では一切取り扱いません。  
 日本旅行 宇都宮支店「第48回日本学校保健学会」係，伊藤氏へご連絡ください。  
 （電話：028-643-3110 FAX：028-643-3004 メール：utsunomiya\_office@nta.co.jp）
8. 英文抄録（プロシーディング）の刊行について  
 プロシーディングの原稿は平成13年12月14日（金）までに学会事務局（大妻女子大学，日本学校保健学会事務局）までご送付下さい（当日消印有効）

年次学会事務局

〒321-8505 宇都宮市峰町350 宇都宮大学教育学部保健体育研究室  
 第48回日本学校保健学会事務局（事務局長：益子詔次，補佐：千葉芳則）  
 電話&FAX：028-649-5381 メール：[mashiko@cc.utsunomiya-u.ac.jp](mailto:mashiko@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

※第48回年次学会に関するお問い合わせにつきましては，FAXにてお願いいたします。

日程

9 : 00 9 : 45 10 : 30 12 : 00 13 : 00 14 : 00 15 : 00 15 : 45 16 : 00 17 : 45 18 : 00

第1日	11月17日	受付	学会長講演	特別講演	昼食	総会	シンポジウム 1	シンポジウム 2	会員懇親会
							学会長特別「教育企画」①(子どもたちとの交流)	一般口演	

9 : 00 9 : 30 10 : 00 11 : 30 12 : 00 13 : 00 13 : 30 14 : 00 15 : 00 16 : 30

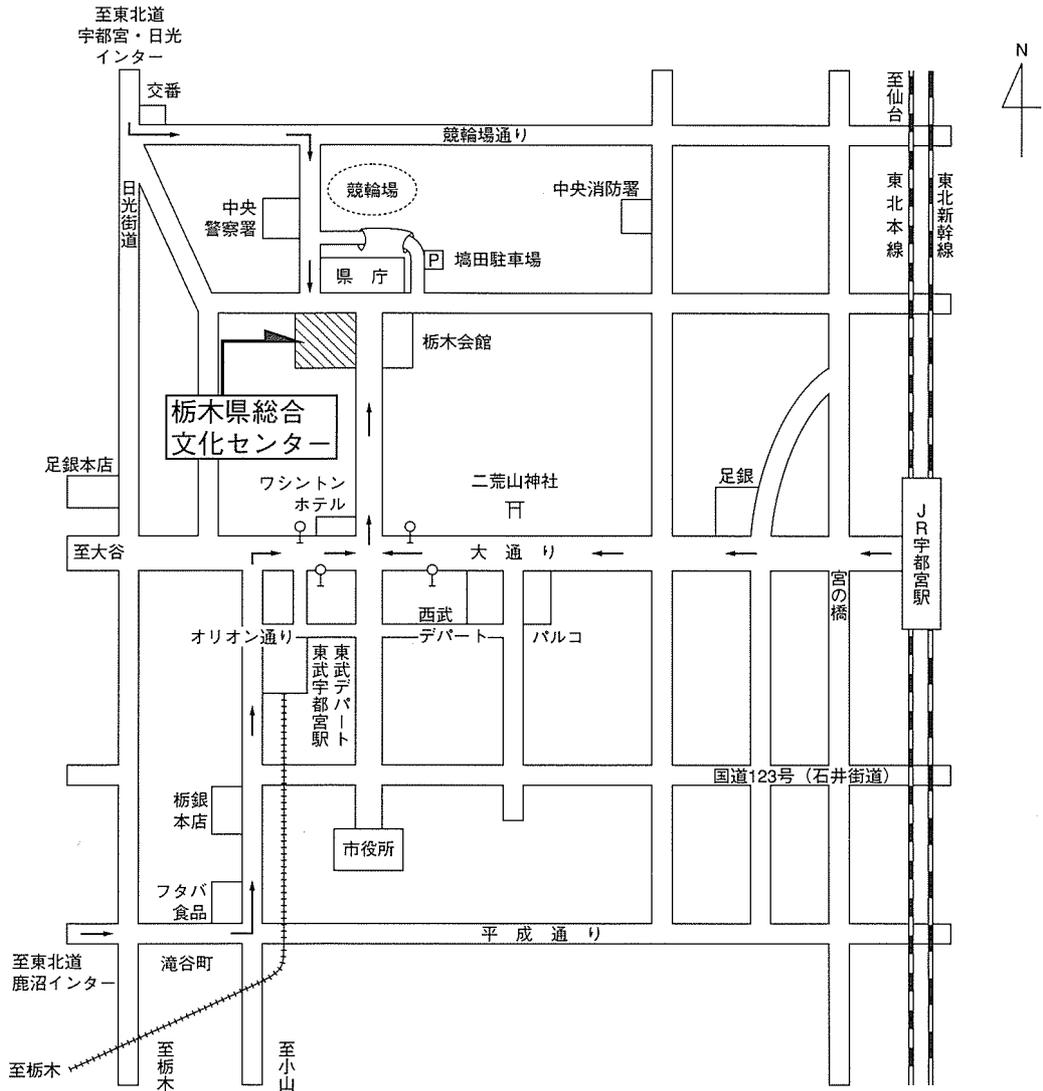
第2日	11月18日	受付	シンポジウム 3		昼食	学会長特別「教育企画」②	学会長特別「教育企画」③	自由集会
			一般口演			一般口演		
			ポスターセッション			ポスターセッション		

※午前・午後の一般口演は、より終了時刻が異なります。

会場	日時	11月17日(土)		11月18日(日)			
		午前	午後	午前	午後		
A会場 (サブホール)		学会長講演 特別講演	総会 シンポジウム 1・2	シンポジウム 3	学会長特別「教育企画」②, ③		
B会場 (第4ギャラリー B・C)			学会長特別「教育企画」① 懇親会	ポスターセッション	ポスターセッション		
C会場 (第1会議室)			養護教諭実践(1)(2)	健康意識・健康行動(1)(2)	養護教諭養成(1)(2)		
D会場 (第2会議室)			保健指導性教育	健康相談(1)	喫煙・飲酒(1)(2)	健康相談(2)(3)	
E会場 (第3会議室)			発育発達(1)	学校安全	保健学習(1)(2)(3)	原理・歴史	発育発達(2)
F会場 (第4会議室)			歯科心身障害 学校給食 保健環境	国際保健 健康増進	疾病予防・健康管理(1)(2)	疾病予防 健康管理(3)(4)	
G会場 (演劇練習室)			精神保健(1)		精神保健(2)(3)	健康評価	健康意識 健康行動(3)
第1ギャラリー		受付, クローク	受付, クローク	受付, クローク	受付, クローク		
第3ギャラリー		展示	展示	展示	展示		
第4ギャラリー-A		休憩室	休憩室	休憩室	休憩室		
和室 1			学会活動委員会			国際交流委員会	
和室 2						編集委員会	

栃木県総合文化センター案内図

栃木県宇都宮市本町1-8 ☎028 (643) 1000



《電車をご利用の場合》

●JR線———JR宇都宮駅 下車 バスで『県庁前』下車 徒歩で約3分 (西口)

●東武宇都宮線—東武宇都宮駅 下車 徒歩で約10分 (約700m)

《タクシーをご利用の場合》

●JR宇都宮駅から——タクシーで約5分 (約1,600m)

《バスをご利用の場合》

●JR宇都宮駅から——『県庁前』『池上町』停留所下車 徒歩で約3分 (関東バス) 作新学院, 戸祭, 江曾島行きなど (5分~10分毎)

《自家用車をご利用の場合》

●東北自動車道 鹿沼I.C.から約9km 約30分  
※周辺の有料駐車場をご利用ください。ただし、契約駐車場ではありませんので駐車料金がかかります。ご了承ください。

# 第48回日本学校保健学会 プログラム

## 第1日 A会場 (サブホール)

### ◆会長講演 (9:45~10:30)

学校健康教育のこれまでとこれから

宇都宮大学教授 和唐 正勝

### ◆特別講演 (10:30~12:00)

公衆衛生の思想と学校保健への期待

大阪大学大学院医学系研究科教授 多田羅 浩三 (日本公衆衛生学会理事長)  
座長 宇都宮大学教授 和唐正勝

### ◆シンポジウム1 (14:00~15:45)

これからの教科「保健」を考える

—教科再編を視野に入れて、私たちは何ができるのか、また何をすべきなのか—

(コーディネーター) 野津有司 (筑波大学体育科学系)

植田誠治 (茨城大学教育学部)

(シンポジスト) 友定保博 (山口大学教育学部)

岡出美則 (筑波大学体育科学系)

金子佳代子 (横浜国立大学教育人間学部)

### ◆シンポジウム2 (15:50~17:50)

栃木県の学校保健の現状と課題

(コーディネーター) 松本幸三 (栃木県医師会副会長)

(シンポジスト) 福田哲夫 (栃木県医師会)

佐貫直道 (栃木県歯科医師会)

仁木喜治 (栃木県薬剤師会)

福嶋 稔 (栃木県医師会)

青木楊子 (栃木県医師会)

大木洋一 (栃木県医師会)

豊田照子 (栃木県養護教育研究会)

奥澤康夫 (栃木県教育委員会)

## 第2日 A会場 (サブホール)

### ◆シンポジウム3 (9:30~12:00)

学校における“ケア”の役割と課題を考える

(コーディネーター) 瀧澤利行 (茨城大学教育学部)

- (シンポジスト) 秋田喜代美 (東京大学大学院教育学研究科)  
荒木田美香子 (浜松医科大学医学部看護学科)  
林 隆 (山口県立大学看護学部)
- (指定発言者) 大谷尚子 (茨城大学教育学部)

◆学会長特別「教育企画」

「総合学習での『健康』をどう活かすか」

- ① 小学生による「健康」についてのポスター発表 (栃木県石橋町立石橋小学校 5, 6 年生)
- ② 実践報告  
栃木県石橋町立石橋小学校  
大内 光 (校長), 三尾谷由美子 (養護教諭), 水沼由美子 (学校栄養士)  
熊田好紀 (教諭), 古沢誠一 (教諭)  
西村早苗 (女子栄養大学)
- ③ 教育講演  
「総合的な学習」を成果あるものに導くために  
森 昭三 (筑波大学名誉教授)

17日(土)午後

第1日 11月17日(土) C会場 (第1会議室)

養護教諭実践(1) (15:00—16:00) 座長 木村龍雄 (大阪教育大学)

- 1pC01 中学校における熟練養護教諭の実践 —語りから見えた実践を支えている思考様式—  
○小林冽子 (千葉大学教育学部) 中村泰子 (狛江市立第一中学校)
- 1pC02 養護教諭の職務の特質を生かした保健指導と保健学習  
—アンケート調査と実践事例の分析から—  
○太田泰子 (牛窓町立牛窓西小学校) 橋本淑子 (津山市立中道中学校)  
小山和栄 (岡山市立津島小学校) 狩谷礼子 (岡山大学大学院教育学研究科)  
石原昌江 (岡山大学教育学部)
- 1pC03 看護診断と養護 (教諭) 診断と学校診断についての考察  
○竹内宏一 (浜松医大・公衆衛生学) 甲田勝康 (浜松医大・公衆衛生学)  
中村晴信 (浜松医大・公衆衛生学)
- 1pC04 小中併置校における養護教諭の活動 —特に僻地小規模校との比較について—  
○津村直子 (北海道教育大学)
- 1pC05 保健室に来室した生徒への養護教諭の対応 —「メンタリング」の一つの試み—  
○加藤真弓 (江東区立第三大島中学校) 井田智子 (館林市立第九小学校)  
小林冽子 (千葉大学教育学部)

第1日 11月17日(土) C会場 (第1会議室)

養護教諭実践(2) (16:00—17:00) 座長 鎌田尚子 (女子栄養大学)

- 1pC06 保健室の位置についての研究  
○白石龍生 (大阪教育大学) 松永かおり (大阪教育大学)  
上野奈初美 (大阪成蹊女子短期大学) 桜井久恵 (兵庫県立伊丹北高等学校)  
北口和美 (西宮市立西宮高等学校)
- 1pC07 県立学校における保健室利用状況からみた養護教諭の職務の検討  
○外山恵子 (愛知教育大学大学院) 小林直美 (愛知県立福江高等学校)  
下村淳子 (愛知教育大学附属高等学校) 圓岡和子 (愛知県立三好養護学校)  
福田博美 (愛知教育大学) 天野敦子 (愛知教育大学)
- 1pC08 離島における養護教諭の活動実態 —全国調査の結果から—  
○後藤ひとみ (北海道教育大学旭川校)
- 1pC09 養護教諭のリフレッシュとネットワークコミュニティ  
○赤倉貴子 (東京理科大学工学部) 木場深志 (金沢学院大学文学部)  
石川育子 (金沢東高等学校)
- 1pC10 養護教諭特別科におけるカリキュラムの検討 —看護教育との関連から—  
○吉田瑠美子 (北海道教育大学札幌校) 荒島真一郎 (北海道教育大学札幌校)  
山田玲子 (北海道教育大学札幌校)

第1日 11月17日(土) D会場 (第2会議室)

保健指導・性教育 (14:48—16:00) 座長 数見隆生 (宮城教育大学)

- 1pD01 幼稚園における食に関する保健指導の検討 —(第2報)保健指導の効果について—  
○鈴木 薫 (岡山大学教育学部附属幼稚園) 鈴木泰恵 (岡山大学大学院教育学研究科)

下村義夫 (岡山大学教育学部)

- 1pD02 健康上問題を持った児童・生徒への養護教諭の対応  
○畑中高子 (神奈川県立衛生短期大学) 竹田由美子 (神奈川県立衛生短期大学)
- 1pD03 高校養護教諭の性意識 —第1報— 避妊をめぐる意識について—  
○杉村直美 (愛知県立安城高等学校)
- 1pD04 自我同一性からみた高校生の性行動の寛容さについての調査研究  
○前田恵里 (日本体育大学大学院健康科学スポーツ医科学系)  
永井大樹 (東京都立一橋高等学校) 本間啓二 (日本体育大学教職教育Ⅲ研究室)  
井筒次郎 (日本体育大学教職教育Ⅲ研究室)  
吉田瑩一郎 (日本体育大学大学院健康科学スポーツ医科学系)
- 1pD05 女子学生の月経に関する調査研究  
○永井大樹 (東京都立一橋高等学校) 小林 臻 (東京大学大学院医学系研究科)
- 1pD06 高校生の男女交際の意識とセルフエスティーム及び性教育に対する意識に関する研究  
○下村美佳子 (高知中央高等学校) 入谷仁士 (大阪教育大学)  
山本和代 (高知中央高等学校) 木村龍雄 (大阪教育大学)

**第1日 11月17日(土) D会場 (第2会議室)****健康相談(1) (16:00—17:00) 座長 盛 昭子 (弘前大学)**

- 1pD07 保健室来室者への看護過程の応用  
○田口聡美 (北海道教育大学札幌校) 荒島真一郎 (北海道教育大学札幌校)  
山田玲子 (北海道教育大学札幌校)
- 1pD08 公立高等学校における健康相談活動  
○大村道子 (北海道教育大学札幌校, 北海道札幌北高等学校)  
荒島真一郎 (北海道教育大学札幌校)
- 1pD09 小学校における健康相談活動  
○佐藤美和 (北海道教育大学附属札幌小学校) 荒島真一郎 (北海道教育大学札幌校)  
土井芳美 (北海道教育大学附属札幌中学校)
- 1pD10 中学校における健康相談活動  
○岩渕春美 (北海道教育大学札幌校, 札幌私立星置中学校) 荒島真一郎 (北海道教育大学札幌校)  
津村直子 (北海道教育大学札幌校)
- 1pD11 北海道の高等学校における保健室登校に関する調査  
○植野理恵 (北海道大樹高等学校) 芝木美沙子 (北海道教育大学旭川校)  
笹嶋由美 (北海道教育大学旭川校)

**第1日 11月17日(土) E会場 (第3会議室)****発育発達(1) (15:00—16:00) 座長 田原靖昭 (長崎大学)**

- 1pE01 過去15年間のタイ人の発育変化  
○大澤清二 (大妻女子大学) 國土将平 (鳥取大学)  
佐川哲也 (金沢大学) 笠井直美 (新潟大学)  
西嶋尚彦 (筑波大学) 家田重晴 (中京大学)  
下田敦子 (大妻女子大学) 綾部真雄 (成蹊大学)
- 1pE02 児童・生徒における皮下脂肪分布の年齢的变化  
○大坪紘司 (鳥取大学教育地域科学部) 國土将平 (鳥取大学) 松本健治 (鳥取大学)

大澤清二 (大妻女子大学)

西嶋尚彦 (筑波大学)

1pE03 鳥取県西部地震が保育園児の発育に及ぼす影響

○小西正智 (鳥取大学教育学部) 國土将平 (鳥取大学教育地域科学部)

松本健治 (鳥取大学教育地域科学部)

1pE04 鳥取県西部地震が児童の発育に及ぼす影響 —児童の発育パターンを検討—

○佐藤慎太郎 (鳥取大学教育学部) 國土将平 (鳥取大学教育地域科学部)

松本健治 (鳥取大学教育地域科学部)

1pE05 タイ国北部山岳少数民族の形態発育について (第三報) —カレン族, モン族の発育の比較—

○國土将平 (鳥取大学教育地域科学部) 大澤清二 (大妻女子大学人間生活科学研究)

佐川哲也 (金沢大学教育学部) 西嶋尚彦 (筑波大学体育科学系)

笠井直美 (新潟大学教育学部) 家田重晴 (中京大学体育学部)

綾部真雄 (成蹊大学文学部) 下田敦子 (大妻女子大学人間生活科学研究)

第1日 11月17日(土) E会場 (第3会議室)

学校安全 (16:00—17:00) 座長 齋藤 歎能 (横浜国立大学)

1pE06 学校管理下における日々の傷害発生要因と学校環境要因 —小学校児童についての観察—

○石樽清司 (滋賀大学) 谷田淳子 (北郷里小学校)

谷本智恵美 (浅井中学校) 西脇弘子 (第一小学校)

福西江利子 (美山中学校)

1pE07 放射能事故にみる学校対応と学校保健の役割

(1) 事故前の対策及び事故当日の対応機能上の問題点

○秋坂真史 (茨城大学教育学部教育保健) 中村朋子 (茨城大学教育学部教育保健)

佐竹 毅 (茨城大学教育学部教育保健)

1pE08 放射能事故にみる学校対応と学校保健の役割

(2) 事故後の学校及び養護教諭の対応と役割

○佐竹 毅 (茨城大学教育学部教育保健) 秋坂真史 (茨城大学教育学部教育保健)

中村朋子 (茨城大学教育学部教育保健)

1pE09 学童の錯視の実態とその応用に関する実験的研究 (XIV)

○阿部明浩 (千葉大)

1pE10 健康と体力と安全に関する研究 (ストレスと運動に関する調査:看護系学生)

阿部明浩 (千葉大学) ○濱口 拓 (千葉大学大学院)

金 明軍 (千葉大学大学院) 石崎幸俊 (千葉大学研究生)

崔 龍 (千葉大学研究生)

第1日 11月17日(土) F会場 (第4会議室)

歯科・心身障害・学校給食・保健環境 (15:00—16:00) 座長 野村和雄 (愛知教育大学)

1pF01 高校生の歯科保健行動とその背景

○丁子智恵子 (石川県立総合看護専門学校) 関 秀俊 (金沢大学医学部保健学科)

1pF02 養護学校における医療的ケアに関する研究 —文部科学省委嘱事業の取り組みについて—

○鎌田文代 (茨城大学大学院教育学研究科)

中村朋子 (茨城大学教育学部教育保健講座)

1pF03 小中高生におけるトリコチロマニアに関する実態調査

○濱田藍子（北海道上川郡風連町立風連中央小学校）

柿崎あすえ（北海道旭川市立東光小学校） 國岡美希（北海道教育大学旭川校）

笹嶋由美（北海道教育大学旭川校） 芝木美沙子（北海道教育大学旭川校）

1pF04 給食主任からみた食に関する指導の現状と総合的な学習への意識

○岡崎愉加（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科）

高橋香代（岡山大学教育学部養護教育講座）

1pF05 校舎建築材料としての木材が及ぼす教育環境形成効果に関する研究Ⅱ

○村瀬 悟（愛知教育大学大学院） 橋田絃洋（愛知教育大学）

## 第1日 11月17日(土) F会場 (第4会議室)

### 国際保健・健康増進 (16:00—17:00) 座長 詫間晋平 (川崎医療福祉大学)

1pF06 東オーストラリアにおけるライフスキル教育の調査研究

—主に、ライフエデュケーションセンターの実践—

○皆川興栄（新潟大学教育人間科学部） 園山和夫（北海道教育大学釧路校）

木村龍雄（大阪教育大学教育学部） 宮崎恭一（Can Do Harajuku）

1pF07 現職教育の現状の台日比較 —学校護士と養護教諭について—

○楊 欣 宜（千葉大学教育学研究科養護教育専攻 成田市立平成小学校）

1pF08 北タイにおける薬物乱用防止計画実施後の中高生の薬物に対する意識調査

○笠井直美（新潟大学教育人間科学部）

大澤清二（大妻女子大学人間生活科学研究所）

下田敦子（大妻女子大学人間生活科学研究所）

綾部真雄（成蹊大学文学部）

1pF09 女子大学生の身体活動量に関する一考察 —授業中の運動量と日常生活での運動量—

○上野奈初美（大阪成蹊女子短期大学） 福本絹子（大阪成蹊女子短期大学）

白石龍生（大阪教育大学）

1pF10 高校生における蓄積的疲労徴候（CFSI）と体力および運動習慣との関係

○川口和泉（日本女子体育大学大学院） 中村 泉（日本女子体育大学）

## 第1日 11月17日(土) G会場 (演劇練習室)

### 精神保健(1) (15:00—16:12) 座長 北村陽英 (奈良教育大学)

1pG01 神経性食欲不振患者の運動管理

○徳村光昭（慶応義塾大学保健管理センター慶応義塾大学医学部スポーツクリニック）

田中哲哉（慶応義塾大学保健管理センター） 藤田尚代（慶応義塾大学保健管理センター）

南里清一郎（慶応義塾大学保健管理センター） 木村慶子（慶応義塾大学保健管理センター）

渡辺久子（慶應義塾大学小児科）

1pG02 子どもの心の健康と支援に関する研究 —連携とネットワークづくりのための調査より—

○小出彌生（岡山大学教育学部） 森蔭美保（倉敷市立上成小学校）

中村美津子（岡山大学大学院教育学研究科）

1pG03 小学校における子どもの心の健康とその支援に関する研究

—養護教諭の役割を明らかにした支援システム作りのための調査より—

○難波知子（岡山大学大学院教育学研究科養護教育専攻）

小出彌生（岡山大学教育学部）

1pG04 高校生を対象にした進路志望別ストレス内容の検討

○塩野谷祐子 (洗足学園大学附属中学高等学校)  
林 姫辰 (福岡大学医学部公衆衛生学教室)

1pG05 中学生における価値観と思いやり行動経験の関連性

○本田優子 (熊本大学教育学部)

1pG06 中学生の精神健康度と家庭・日常生活要因との関係  
—静岡県西部における2年間の調査結果から—

○荒木田美香子 (浜松医科大学) 佐藤友子 (浜松医科大学)  
松本友子 (浜松医科大学) 金森雅夫 (浜松医科大学)  
森 昭三 (筑波大学名誉教授)

## 18日(日)午前

### 第2日 11月18日(日) C会場 (第1会議室)

#### 健康意識・健康行動(1) (9:30—10:30) 座長 家田重晴 (中京大学)

2aC11 男子大学生のライフスタイル・コントロール能力と健康状態の生成に関する因果モデル

○伊藤武樹 (宮崎大学教育文化学部) 伊藤菜緒 (九州保健福祉大学)  
田原義雄 (宮崎大学大学院教育学研究科)  
安部真由美 (宮崎大学大学院教育学研究科)  
島田彰夫 (神戸山手大学)

2aC12 女子大学生のライフスタイル・コントロール能力と健康状態の生成に関する因果モデル

○伊藤菜緒 (九州保健福祉大学) 伊藤武樹 (宮崎大学教育文化学部)  
安部真由美 (宮崎大学大学院教育学研究科) 田原義雄 (宮崎大学大学院教育学研究科)  
島田彰夫 (神戸山手大学)

2aC13 中学生の食行動調査 (EAT-2001, 北海道)

○鳥本 愛 (北海道教育大学札幌校) 荒島真一郎 (北海道教育大学札幌校)  
土井芳美 (北海道教育大学附属札幌中学校) 村山恵子 (北海道教育大学附属釧路中学校)  
榎波ゆかり (北海道教育大学附属函館中学校) 西川武志 (北海道教育大学札幌校)  
岡安多香子 (北海道教育大学札幌校) 山田玲子 (北海道教育大学札幌校)  
西 基 (札幌医科大学公衆衛生学教室)

2aC14 小学生における食事中の水分摂取と流し込みの関係

○松本恵子 (旭川市立台場小学校) 安部奈生 (北海道教育大学附属旭川小学校)  
芝木美沙子 (北海道教育大学旭川校) 笹嶋由美 (北海道教育大学旭川校)

2aC15 青年期における清潔意識・行動に関する研究

○坂下小織 (茨城大学大学院) 辻 清子 (茨城大学大学院)  
山道弘子 (茨城大学大学院)

### 第2日 11月18日(日) C会場 (第1会議室)

#### 健康意識・健康行動(2) (10:30—11:42) 座長 照屋博行 (福岡教育大学)

2aC16 小・中・高校生のボディ・イメージに関する研究

○森 慶恵 (名古屋市立西中島小学校) 下村淳子 (愛知教育大学附属高等学校)  
佐藤和子 (愛知教育大学養護教育講座)

2aC17 小学校における健康に関する知識の理解度についての研究

- 星埜京子(葛飾区立柴又小学校) 田中哲郎(国立公衆衛生院)  
西川路由紀子(目黒区立第一中学校) 広瀬菜々子(東京都立八潮高等学校)
- 2aC18 中学校における健康に関する知識の理解度についての研究  
○西川路由紀子(目黒区立第一中学校) 田中哲郎(国立公衆衛生院)  
星埜京子(葛飾区立柴又小学校) 広瀬菜々子(東京都立八潮高等学校)
- 2aC19 高等学校における健康に関する知識の理解度について  
○広瀬菜々子(東京都立八潮高等学校) 田中哲郎(国立公衆衛生院)  
星埜京子(葛飾区立柴又小学校) 西川路由紀子(目黒区立第一中学校)
- 2aC20 児童生徒の心身の健康に関する調査研究(2) —神戸の子どもへの体と心, 5年間の変化—  
○上岡綾子(神戸市立渚中学校) 神崎和枝(神戸市立須磨北中学校)  
魚住順子(神戸市立伊川谷小学校) 宮本有子(神戸市立西郷小学校)  
出井梨枝(神戸市総合教育センター)
- 2aC21 高校生のダイエット行動とライフスタイル及び疲労自覚症状との関連について  
○山本和代(高知中央高等学校) 下村美佳子(高知中央高等学校)  
入谷仁士(大阪教育大学) 木村龍雄(大阪教育大学)

## 第2日 11月18日(日) D会場(第2会議室)

喫煙・飲酒(1) (9:30—10:18) 座長 村松常司(愛知教育大学)

- 2aD12 薬物乱用防止高校生会議  
○原田幸男(東京都立深川高等学校) 石川哲也(神戸大学発達科学部)
- 2aD13 薬物乱用防止システムの国際比較(17) —オランダの薬物乱用の実態とその対策—  
○勝野真吾(兵庫教育大学疫学・健康教育学研究室)  
西岡伸紀(兵庫教育大学疫学・健康教育学研究室)  
永井純子(兵庫教育大学疫学・健康教育学研究室) 釜谷仁士(兵庫県立上郡高等学校)  
赤星隆弘(熊本県立教育センター) 吉本佐雅子(鳴門教育大学学校保健研究室)  
和田 清(国立精神神経センター精神保健研究所) 石川哲也(神戸大学発達科学部)  
川畑徹朗(神戸大学) 鬼頭英明(文部科学省)
- 2aD14 薬物乱用防止システムの国際比較(18) —デンマークの薬物乱用の実態とその対策—  
○吉本佐雅子(鳴門教育大学学校保健研究室)  
勝野真吾(兵庫教育大学疫学・健康教育学研究室)  
西岡伸紀(兵庫教育大学疫学・健康教育学研究室)  
永井純子(兵庫教育大学疫学・健康教育学研究室)  
釜谷仁士(兵庫県立上郡高等学校) 赤星隆弘(熊本県立教育センター)  
和田 清(国立精神神経センター精神保健研究所)  
石川哲也(神戸大学発達科学部)  
川畑徹朗(神戸大学) 鬼頭英明(文部科学省)
- 2aD15 薬物乱用防止システムの国際比較研究(19) —オーストラリアの薬物乱用の実態とその対策—  
○永井純子(兵庫教育大学疫学・健康教育学研究室)  
勝野真吾(兵庫教育大学疫学・健康教育学研究室)  
西岡伸紀(兵庫教育大学疫学・健康教育学研究室)  
釜谷仁士(兵庫県立上郡高等学校) 赤星隆弘(熊本県立教育センター)  
吉本佐雅子(鳴門教育大学学校保健研究室) 和田 清(国立精神神経センター精神保健研究所)

石川哲也 (神戸大学発達科学部) 川畑徹朗 (神戸大学) 鬼頭英明 (文部科学省)

**第2日 11月18日(日) D会場 (第2会議室)**

**喫煙・飲酒(2)・食事 (10:18—11:06) 座長 皆川興栄 (新潟大学)**

2aD16 高校生の喫煙と薬物乱用に関する知識の実態と容認的態度の関連性

○奥田大介 (鳥取大学大学院教育学研究科) 国土将平 (鳥取大学教育地域科学部)  
松本健治 (鳥取大学教育地域科学部)

2aD17 中学校保健授業におけるマルチメディアによる薬物乱用防止教育の実践Ⅱ

○小磯 透 (筑波大学附属中学校) 小山 浩 (筑波大学附属中学校)  
内田匡輔 (筑波大学附属中学校) 鈴木和弘 (国際武道大学)

高石昌弘 (国立公衆衛生院) 大澤清二 (大妻女子大学人間生活科学研究所)

斉藤 実 (大妻女子大学人間生活科学研究所) 石川哲也 (神戸大学)  
川畑徹朗 (神戸大学) 松本健治 (鳥取大学教育地域科学部)  
国土将平 (鳥取大学教育地域科学部) 笠井直美 (新潟大学)

勝野眞吾 (兵庫教育大学) 西岡伸紀 (兵庫教育大学疫学・健康教育学研究室)

渡邊正樹 (東京学芸大学) 和田 清 (国立精神神経センター精神保健研究所)

2aD18 小・中・高等学校における薬物乱用防止教育の実態について

○横嶋 剛 (宇都宮市立一条中学校) 和唐正勝 (宇都宮大学)

2aD19 女子学生の生活習慣と食生活

○堺みどり (和歌山信愛女子短期大学) 仲谷 淳 (和歌山信愛女子短期大学)  
大塚量子 (和歌山信愛女子短期大学)

**第2日 11月18日(日) E会場 (第3会議室)**

**保健学習(1) (9:30—10:18) 座長 下村義夫 (岡山大学)**

2aE11 ポートフォリオを利用した学校健康教育の評価

○渡邊正樹 (東京学芸大学教育学部)

2aE12 高等学校における科目「保健」に関する調査について

○北口和美 (西宮市立西宮高等学校) 桜井久恵 (兵庫県立伊丹北高等学校)  
白石龍生 (大阪教育大学)

2aE13 子どもの健康課題解決のための親の学習行動

○廣金和枝 (慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科, 慶應義塾大学保健管理センター)  
南里清一郎 (慶應義塾大学保健管理センター)

2aE14 養護教諭が担当する保健学習に関する調査研究

○永井大樹 (東京都立一橋高等学校)

前田恵里 (日本体育大学大学院健康科学スポーツ医科学系)

本間啓二 (日本体育大学教職教育Ⅲ研究室) 坪井美智子 (日本体育大学教職教育Ⅲ研究室)

吉田瑩一郎 (日本体育大学大学院健康科学スポーツ医科学系)

井筒次郎 (日本体育大学教職教育Ⅲ研究室)

**第2日 11月18日(日) E会場 (第3会議室)**

**保健学習(2) (10:18—11:06) 座長 渡邊正樹 (東京学芸大学)**

2aE15 授業実践が小学生の健康習慣とセルフ・エスティームに及ぼす影響

○鎌田美千代 (愛知教育大学附属幼稚園) 西川房代 (名古屋市立大手小学校)  
村松常司 (愛知教育大学) 村松園江 (東京水産大学)

佐藤和子 (愛知教育大学)

2aE16 アクティビティを使った教育効果 —自己理解, 他者理解, 共同・協同について—

○大塚貴史 (中京大学大学院) 家田重晴 (中京大学体育学部)

2aE17 「総合」と健康教育を繋ぐための一考察 —養護教諭として実践で得た教訓から—

○岩辺京子 (東京都中央区立中央小学校)

2aE18 「総合的な学習の時間」と健康教育

○中村和彦 (山梨大学教育人間科学部) 浅川和美 (山梨県立看護大学)

有井良江 (山梨県立看護大学) 大川明宏 (山梨大学大学院)

**第2日 11月18日(日) E会場 (第3会議室)****保健学習(3) (11:06—11:42) 座長 藤田和也 (一橋大学)**

2aE19 学校医とのT・Tによる保健学習の取り組みとその考察

○村井佐代子 (宇都宮市立星が丘中学校)

2aE20 中高生を対象とした記憶に残る健康教育の質の評価 —フォーカスグループを活用して—

○堀口真由子 (浜松医科大学医学部看護学科) 荒木田美香子 (浜松医科大学医学部看護学科)

2aE21 中学校保健体育学習指導要領における「性に関する指導」の変遷

—1958年から2001年現在までの分析—

○林 宏美 (鳴門教育大学学校保健研究室) 吉本佐雅子 (鳴門教育大学学校保健研究室)

**第2日 11月18日(日) F会場 (第4会議室)****疾病予防・健康管理(1) (9:30—10:18) 座長 佐藤祐造 (名古屋大学)**

2aF11 大学生における血液検査データと肥満度との関連

○安井 謙 (愛知工科大学) 唐 誌 陽 (中京大学)

田中豊穂 (中京大学) 中川武夫 (中京大学)

清水卓也 (中京大学) 内山 明 (中京大学)

家田重晴 (中京大学) 滝 克己 (中京大学)

2aF12 大学生における肥満度の変動と高血圧の関連

○内山 明 (中京大学大学院) 尹 小 儉 (中京大学大学院)

中川武夫 (中京大学) 田中豊穂 (中京大学)

白石安男 (東京理科大学)

2aF13 大学生における血液検査基準値の検討

○臼井若菜 (中京大学大学院) 武田美紀 (中京大学)

滝 克己 (中京大学) 家田重晴 (中京大学)

清水卓也 (中京大学) 中川武夫 (中京大学)

田中豊穂 (中京大学) 白石安男 (東京理科大学)

2aF14 大学生の血液検査値の安定性 —入学時検査と3年後の検査の比較—

○中野充恵 (中京大学体育学研究科) 福田由紀子 (中京大学体育学研究科)

臼井若菜 (中京大学体育学研究科) 大塚貴史 (中京大学体育学研究科)

瀬瀬智宏 (中京大学体育学研究科) 黒田真二 (中京大学体育学研究科)

滝 克己 (中京大学体育学部) 家田重晴 (中京大学体育学部)

中川武夫 (中京大学体育学部) 田中豊穂 (中京大学体育学部)

**第2日 11月18日(日) F会場 (第4会議室)**

**疾病予防・健康管理(2) (10:18—11:18) 座長 宮下和久 (和歌山県立医科大学)**

- 2aF15 小児糖尿病を持つ児童生徒をめぐる家庭および医療機関と学校との連携に関する研究  
 ○石走知子 (名古屋大学医学部保健学科)  
 福田博美 (愛知教育大学) 天野敦子 (愛知教育大学)
- 2aF16 学生のVDT作業と疲労について  
 ○藤江善一郎 (常磐短期大学) 神長亜紀 (常磐短期大学)
- 2aF17 色覚異常を有する児童の視点より見た学校生活の質について  
 ○野宮幸美 (平賀町立大坊小学校) 佐藤雄一 (弘前大学教育学部教育保健講座)
- 2aF18 保健室における滅菌・消毒方法の実態  
 ○山田玲子 (北海道教育大学) 荒島真一郎 (北海道教育大学)  
 津村直子 (北海道教育大学)
- 2aF19 身長に基づく標準BMIと健康管理への活用  
 ○中畑朋美 (和歌山大学附属中学校) 青木京子 (安原小学校)  
 小串陽子 (和歌山県教育庁) 土谷由味 (雑賀崎小学校)  
 松本久美子 (和歌山大学附属養護学校) 豊田智津 (紀北養護学校)  
 吉岡千彰 (和歌山大学附属小学校) 坂田清美 (和歌山県立医科大学)  
 北山敏和 (和歌山県教育庁)

**第2日 11月18日(日) G会場 (演劇練習室)**

**精神保健(2) (9:30—10:30) 座長 近藤 卓 (東海大学)**

- 2aG06 高校生の日常生活ストレスと精神的健康に関する因果モデル  
 ○田原義雄 (宮崎大学大学院教育学研究科) 伊藤武樹 (宮崎大学教育文化学部)  
 伊藤菜緒 (九州保健福祉大学社会福祉学部) 島田彰夫 (神戸山手大学)  
 安部真由美 (宮崎大学大学院教育学研究科)
- 2aG07 中学生の無気力感に関する心理学的研究  
 ○平松恵子 (岡山大学大学院教育学研究科 岡山市立福南中学校)  
 松岡洋一 (岡山大学大学院教育学研究科)
- 2aG08 高校生の学校嫌いとの内向性性格の関連についての検討  
 ○木場深志 (金沢学院大学文学部) 赤倉貴子 (東京理科大学工学部)
- 2aG09 保健室登校に関する研究 (第1報) —保健室登校の実態に関する傾向—  
 ○伊藤寛生 (宮城教育大学大学院教育学研究科) 数見隆生 (宮城教育大学)
- 2aG10 保健室登校に関する研究 (第2報) —保健室登校の教育的意義に関する検討—  
 ○数見隆生 (宮城教育大学) 伊藤寛生 (宮城教育大学大学院教育学研究科)

**第2日 11月18日(日) G会場 (演劇練習室)**

**精神保健(3) (10:30—11:06) 座長 南里清一郎 (慶應義塾大学)**

- 2aG11 思春期のこころの健康(1) —悩みとこころの健康状態—  
 ○中村和彦 (山梨大学教育人間科学部) 浅川和美 (山梨県立看護大学短期大学部)  
 有井良江 (山梨県立看護大学) 大川明宏 (山梨大学大学院)  
 前嶋明美 (山梨県立韮崎工業高校) 森 昭三 (筑波大学名誉教授)
- 2aG12 思春期のこころの健康(2) —こころの健康と人との関わり—  
 ○中村和彦 (山梨大学教育人間科学部) 浅川和美 (山梨県立看護大学短期大学部)

- 有井良江 (山梨県立看護大学) 大川明宏 (山梨大学大学院)  
 前嶋明美 (山梨県立韮崎工業高校) 森 昭三 (筑波大学名誉教授)  
 2aG13 A地区における養護教諭と保健婦の連携 —不登校児を対象とした事例の分析—  
 ○上田真仁 (聖隷三方原病院)

## 18日(日)午後

## 第2日 11月18日(日) C会場 (第1会議室)

## 養護教諭養成(1) (13:00—13:48) 座長 岡田加奈子 (千葉大学)

- 2pC22 養護実習事前指導についての一考察  
 —養護実習に係わる事前指導及び学生の実習中の体験から分析—  
 ○片山良子 (横浜高等教育専門学校) 福西武子 (横浜高等教育専門学校)  
 小笠原紀代子 (横浜高等教育専門学校)
- 2pC23 養護教諭のキャリア発達に関する研究Ⅱ  
 —異動による職業アイデンティティの危機について—  
 ○中村朋子 (茨城大学教育学部) 山道弘子 (茨城大学大学院)
- 2pC24 養護教諭のキャリア発達に関する研究Ⅲ —職業意識およびキャリア・アンカーを中心に—  
 ○山道弘子 (茨城大学大学院) 中村朋子 (茨城大学教育学部)
- 2pC25 教育学部生の養護教諭観に関する研究 —教育実習を通して—  
 ○松田芳子 (熊本大学教育学部養護教諭養成課程)  
 西川美幸 (熊本県御所浦南小学校) 原由紀子 (長崎県立西高等学校)

## 第2日 11月18日(日) C会場 (第1会議室)

## 養護教諭養成(2) (13:48—14:48) 座長 戸野塚厚子 (宮城学院女子大学)

- 2pC26 システム・ダイナミックス・シミュレーションによる養護教諭の需要予測(2)  
 ○軽部光男 (大妻女子大学人間生活科学研究所)  
 大澤清二 (大妻女子大学人間生活科学研究所)
- 2pC27 養護教諭の力量形成に関する研究 (第1報)  
 —養護教諭の学校保健活動における困難要因の分析から—  
 ○萩野和美 (大阪教育大学大学院保健体育専攻教育保健学専修)  
 木村龍雄 (大阪教育大学教育保健研究室)  
 林 照子 (大阪教育大学教育学部附属高等学校天王寺校舎)
- 2pC28 養護教諭の力量形成過程に関する研究 (第2報)  
 —養護教諭の実践に対する自己効力感の分析による—  
 ○林 照子 (大阪教育大学教育学部附属高等学校天王寺校舎)  
 木村龍雄 (大阪教育大学教育保健研究室)  
 萩野和美 (大阪教育大学大学院保健体育専攻教育保健学専修)
- 2pC29 養護教諭の職務に関する一考察Ⅰ —世界の視点から養護教諭の職務を考える—  
 ○宍戸洲美 (渋谷区立中幡小学校) 岩辺京子 (中央区立中央小学校)  
 加藤秀子 (横浜市立川和中学校) 桜田 淳 (清瀬市立第七小学校)  
 渋谷和子 (美瑛市立北瑛小学校) 新谷チヨ子 (調布市立石原小学校)  
 野井友子 (多摩大附属聖ヶ丘中学校・高等学校) 深津由美子 (北区立福田小学校)

- 舟見久子 (調布市立第七小学校) 松本順子 (川崎市立西中原中学校)
- 2pC30 養護教諭の職務に関する一考察Ⅱ —世界の視点から養護教諭の職務を考える—
- 岩辺京子 (中央区立中央小学校) 宍戸洲美 (渋谷区立中幡小学校)
- 加藤秀子 (横浜市立川和中学校) 桜田 淳 (清瀬市立第七小学校)
- 渋谷和子 (美瑛市立北瑛小学校) 新谷チヨ子 (調布市立石原小学校)
- 野井友子 (多摩大附属聖ヶ丘中学校・高等学校) 深津由美子 (北区立稲田小学校)
- 舟見久子 (調布市立第七小学校) 松本順子 (川崎市立西中原中学校)

**第2日 11月18日(日) D会場 (第2会議室)**

**健康相談(2) (13:00—13:36) 座長 荒島眞一郎 (北海道教育大学)**

- 2pD21 健康相談活動に求められる養護教諭の資質に関する研究 (第3報)
- 健康相談活動実践記録用紙の開発—
- 西尾ひとみ (足立区花保中学校) 平川俊功 (さいたま市立大宮東中学校)
- 三木とみ子 (女子栄養大学) 徳山美智子 (愛知女子短期大学)
- 市木美知子 (京都市教育委員会) 後藤ひとみ (北海道教育大学)
- 田嶋八千代 (文部科学省) 星埜京子 (葛飾区立柴又小学校)
- 道上恵美子 (埼玉県立春日部高等学校) 茂木朋子 (女子栄養大学)
- 2pD22 養護教諭の行うヘルスカウンセリング(健康相談活動)のアセスメントに関する研究(第3報)
- 中根浩美 (埼玉県立川越工業高校) ○剣持智恵 (筑波大学附属坂戸高等学校)
- 森田光子 (千葉大学大学院)
- 2pD23 養護教諭の行うヘルスカウンセリング(健康相談活動)のアセスメントに関する研究(第4報)
- 中根浩美 (埼玉県立川越工業高校) 剣持智恵 (筑波大学附属坂戸高等学校)
- 森田光子 (千葉大学大学院)

**第2日 11月18日(日) D会場 (第2会議室)**

**健康相談(3) (13:48—14:48) 座長 三木とみ子 (女子栄養大学)**

- 2pD24 養護教諭のヘルスカウンセリング能力に関する研究 (第1報)
- 聴く能力を高める聴き方尺度の作成—
- 石田妙美 (東海学園大学短期大学部) 梶岡多恵子 (名古屋大学総合保健体育科学センター)
- 大沢 功 (名古屋大学総合保健体育科学センター) 佐藤祐造 (名古屋大学総合保健体育科学センター)
- 2pD25 養護教諭のヘルスカウンセリング能力に関する研究 (第2報)
- 養護教諭志向が聴く能力に与える影響—
- 梶岡多恵子 (名古屋大学総合保健体育科学センター) 石田妙美 (東海学園大学短期大学部)
- 大澤 功 (名古屋大学総合保健体育科学センター) 佐藤祐造 (名古屋大学総合保健体育科学センター)
- 2pD26 養護教諭の相談的対応に関する研究 —内的ワーキング・モデルとしての共感的理解—
- 佐藤妹佳 (青森県立南津軽郡平賀町立平賀東小学校)
- 2pD27 事例からみた養護教諭の相談活動の機能 (第2報) —問題の異なる10例の分析から—
- 清水花子 (都立八潮高等学校) 森田光子 (多摩相談活動研究所)
- 中島玲子 (都立南野高等学校) 根本節子 (筑波大学附属駒場中等学校)
- 松本幸子 (練馬区立光が丘第二中学校) 中根浩美 (埼玉県立川越工業高校)
- 2pD28 保健室・相談室の機能と連携に関する実践報告
- 井上逸子 (私立日本学園中学校・高等学校) 鈴木千晶 (私立日本学園中学校・高等学校)

**第2日 11月18日(日) E会場 (第3会議室)****原理・歴史 (13:00—14:12) 座長 瀧澤利行 (茨城大学)**2pE22 「死」に関する経験・態度・認識についての調査研究<sup>(31)</sup>

—「死」の観念の概念化における『外延』としての「殺人」の問題を中心として—

○板谷幸恵 (女子栄養大学) 藤田祿太郎 (鳴門教育大学)

棟方百熊 (鳴門教育大学) 下八正美 (鳴門市立桑島小学校)

2pE23 「死」に関する経験・態度・認識についての調査研究<sup>(32)</sup>

—「死」の観念の概念化における『内包』としての「殺人」の問題を中心として—

○藤田祿太郎 (鳴門教育大学)

2pE24 学校教育における子どもの生命・健康の位置づけに関する研究 第2報

—養護教諭の執務との関連を中心として—

○齊藤ふくみ (熊本大学教育学部) 小田徳彦 (北海道恵庭北高等学校)

天野敦子 (愛知教育大学)

2pE25 看護学生を対象にしたデス・エデュケーションの研究

○飯塚哲子 (慶應義塾大学看護医療学部)

2pE26 大正から昭和初期における学校歯科保健教育に関する研究

—歯科衛生教授・訓練における教材・教具について—

○鈴木千春 (愛知県立岡崎北高等学校)

2pE27 水野宏の「教育と健康」論に関する検討

—生活史, 社会的問題関心からの関連と統合の視点から—

○高橋裕子 (愛知教育大学教育学部)

**第2日 11月18日(日) E会場 (第3会議室)****発育発達<sup>(2)</sup> (14:12—15:00) 座長 服部恒明 (茨城大学)**

2pE28 仙台市児童・生徒の地域別に見たBody mass indexの推移について

○黒川修行 (東北大学大学院医学系研究科環境保健学分野) 中塚晴夫 (宮城大学看護学部)

佐藤 洋 (東北大学大学院医学系研究科環境保健医学分野)

2pE29 縦断データによる発育と睡眠時間の関連性の検討

○小林正子 (国立公衆衛生院・母子保健学部)

2pE30 幼児期における足底面の発育と重心動揺および運動能力の関連性について

○新宅幸憲 (大阪成蹊女子短期大学) 竹内宏一 (浜松医科大学)

白井永男 (放送大学) 藤永博 (和歌山大学)

乾 道生 (大阪成蹊女子短期大学)

2pE31 道東地方の児童・生徒における身長季節変動

○岡安多香子 (北海道教育大学札幌校) 松永尚子 (北海道教育大学札幌校)

北島由起子 (北海道教育大学札幌校) 西川武志 (北海道教育大学札幌校)

荒島真一郎 (北海道教育大学札幌校)

**第2日 11月18日(日) F会場 (第4会議室)****疾病予防・健康管理<sup>(3)</sup> (13:00—13:48) 座長 百瀬義人 (福岡大学)**

2pF20 学齢期小児における血清尿酸の分布とその意義に関するPopulation-Based Study

(3)血清尿酸と肥満・血液脂質との関連性

○赤星隆弘 (熊本県立教育センター) 勝野眞吾 (兵庫教育大学疫学・健康教育学研究室)

西岡伸紀 (兵庫教育大学疫学・健康教育学研究室)  
 永井純子 (兵庫教育大学疫学・健康教育研究室)  
 釜谷仁士 (兵庫教育大学疫学・健康教育研究室)  
 吉本佐雅子 (鳴門教育大学学校保健研究室)  
 松浦尊磨 (五色町健康福祉総合センター)

2pF21 学童期の血清レプチン濃度とインスリン抵抗性

○神谷和世 (和歌山医科大学・看護短期大学部)  
 有田幹雄 (和歌山県立医科大学看護短期大学部)  
 武田眞太郎 (和歌山県立医科大学看護短期大学部)  
 宮井信行 (和歌山医大・衛生)  
 宮下和久 (和歌山医大・衛生) 村口正宏 (大塚製薬細胞工学研)  
 大橋郁代 (西宮市教育委員会) 五十嵐裕子 (神戸大学附属明石中学校)  
 北口和美 (西宮市立西宮高等学校)

2pF22 学齢期における「インスリン抵抗性」について

○渡辺茂一 (愛知県心電図検診協議会) 関 正巳 (愛知県心電図検診協議会)  
 生川 優 (愛知県心電図検診協議会) 高田和夫 (愛知県心電図検診協議会)  
 木村英司 (愛知県心電図検診協議会) 森 澄 (愛知県医師会)  
 町田元實 (愛知県医師会) 松田秀人 (名古屋文理短期大学)

2pF23 最近の中学生にみられたツベルクリン反応検査の結果

○辻あさみ (和歌山県立医科大学看護短期大学部)  
 有田幹雄 (和歌山県立医科大学看護短期大学部)  
 中井國男 (和歌山県立医科大学看護短期大学部)  
 武田眞太郎 (和歌山県立医科大学看護短期大学部)  
 五十嵐裕子 (神戸大学附属明石中学校)

第2日 11月18日(日) F会場 (第4会議室)

疾病予防・健康管理(4) (13:48—14:36) 座長 鈴木庄亮 (群馬大学)

2pF24 「健康評価」を組み込んだ健康診断の試み 第4報

—健康評価を支持する児童と支持しない児童の比較検討 (小学校) —

○高木悦子 (お茶の水女子大学附属小学校) 山梨八重子 (お茶の水女子大学附属中学校)  
 増田かやの (お茶の水女子大学附属高等学校) 渡辺満美 (お茶の水女子大学附属幼稚園)

2pF25 「健康評価」を組み込んだ健康診断の試み 第5報

—健康評価を支持する生徒と支持しない生徒の比較検討 (中学校) —

○山梨八重子 (お茶の水女子大学附属中学校) 増田かやの (お茶の水女子大学附属高等学校)  
 高木悦子 (お茶の水女子大学附属小学校) 渡辺満美 (お茶の水女子大学附属幼稚園)

2pF26 「健康評価」を組み込んだ健康診断の試み 第6報

—健康評価を支持する生徒と支持しない生徒の比較検討 (高校) —

○増田かやの (お茶の水女子大学附属高等学校) 山梨八重子 (お茶の水女子大学附属中学校)  
 高木悦子 (お茶の水女子大学附属小学校) 渡辺満美 (お茶の水女子大学附属幼稚園)

2pF27 「健康評価」を組み込んだ健康診断の試み 第7報

—小・中・高を通した児童・生徒の「健康評価」に対する受けとめ方の検討—

○渡辺満美 (お茶の水女子大学附属幼稚園) 増田かやの (お茶の水女子大学附属高等学校)

山梨八重子 (お茶の水女子大学附属中学校) 高木悦子 (お茶の水女子大学附属小学校)

**第2日 11月18日(日) G会場 (演劇練習室)**

**健康評価 (13:00—13:48) 座長 衛藤 隆 (東京大学)**

2pG15 高校生におけるライフスタイル及び生活の質的満足度と疲労自覚症状との関連

○富田 勤 (北海道教育大学・札幌・教育保健学) 佐々木胤則 (北海道教育大学・札幌・教育保健学)  
大谷美由紀 (北海道教育大学・札幌・教育保健学) 五十嵐直子 (北海道教育大学・札幌・教育保健学)

2pG16 小学生の欠席の実態とその背景に関する研究 (第1報)

○森山より子 (鳴門教育大学学校保健研究室) 吉本佐雅子 (鳴門教育大学学校保健研究室)

2pG17 健康中学生の腋窩温の研究 (第7報) 起床時からの腋窩温の日内変動～夏

○大川佳代子 (姫路市立大白書中学校) 正木健雄 (日本体育大学大学院)

2pG18 夏期高校とスポ少野球練習時の温熱生理学的実態

○大貫義人 (山形大学教育学部)

**第2日 11月18日(日) G会場 (演劇練習室)**

**健康意識・健康行動(3) (13:48—14:48) 座長 高橋浩之 (千葉大学)**

2pG19 高校生・大学生用健康増進ライフスタイル行動尺度の開発 —その妥当性と信頼性の検討—

○田代順子 (聖路加看護大学) 村井文江 (筑波大学医療技術短期大学)

西川浩昭 (筑波大学医療技術短期大学)

成瀬和子 (国際協力事業団ケニヤ国医療技術強化プロジェクト)

小澤道子 (聖路加看護大学)

2pG20 教員養成大学学生における色覚異常に関する調査

○堂腰律子 (北海道千歳高等学校) 上野聡子 (北海道教育大学旭川校)

杉山聖子 (北海道教育大学旭川校) 笹嶋由美 (北海道教育大学旭川校)

芝木美沙子 (北海道教育大学旭川校)

2pG21 高校生・大学生の健康増進ライフスタイル行動と関連要因のバス分析

○村井文江 (筑波大学医療技術短期大学) 田代順子 (聖路加看護大学)

西川浩昭 (筑波大学医療技術短期大学)

成瀬和子 (国際協力事業団ケニヤ国医療技術訓練強化プロジェクト)

小澤道子 (聖路加看護大学)

2pG22 大学生における、一日の歩数からみた生活についての研究

○井狩芳子 (和泉短期大学)

2pG23 大学生のスポーツ活動が食行動と骨密度に与える影響

○大西晴子 (京都教育大学教育学部学校保健研究室)

井上文夫 (京都教育大学教育学部学校保健研究室)

藤原 寛 (京都府立医科大学小児科)

**第2日 11月18日(日) 午前 第4ギャラリー (10:00～11:00)**

**ポスターセッション**

2a01 高校生のストレスの日韓比較

○林 姫辰 (福岡大学医学部公衆衛生学教室)

塩野谷祐子 (洗足学園大学附属中学高等学校)

2a02 中学生の生活ストレスとストレス反応の因果構造

○今村幸恵 (霞ヶ浦高等学校) 服部恒明 (茨城大学教育学部)  
中村朋子 (茨城大学教育学部)

2a03 中学生の犯罪行為に対する意識調査

○井上文夫 (京都教育大学体育学科)  
大西晴子 (京都教育大学体育学科)  
藤原 寛 (京都府立医科大学小児科)

2a04 女子学生の食物摂取スコアに及ぼす生活習慣

○中永征太郎 (ノートルダム清心女子大学) 門田新一郎 (岡山大学)

2a05 身長伸びと生活習慣との関連についての一考察

○三村由香里 (岡山大学教育学部) 後藤安津子 (岡山県立東岡山工業高等学校)  
井駒洋子 (岡山大学教育学部附属小学校) 高橋香代 (岡山大学教育学部)

2a06 児童・生徒の血清レプチン濃度の経年変化について

○後和美朝 (大阪国際女子大学) 神谷和世 (和歌山県立医科大学・看護)  
有田幹雄 (和歌山県立医科大学・看護) 五十嵐裕子 (神戸大学附属明石中学校)  
藤井美恵子 (神戸大学附属明石小学校) 北口和美 (西宮市立西宮高等学校)  
村口正弘 (大塚製薬細胞工学研) 宮下和久 (和歌山県立医科大学・衛生)  
武田真太郎 (和歌山県立医科大学・衛生)

2a07 三瀬小学校児童における通学時身体活動量が持久力、体脂肪率に及ぼす影響

—1971年と1999年の比較研究—

○榎原千里 (福岡大学スポーツ科学部) 大石洋史 (福岡大学大学院体育学研究科)  
村岡保雄 (三瀬小学校) 田中 守 (福岡大学スポーツ科学部)  
清永 明 (福岡大学スポーツ科学部) 田中宏暁 (福岡大学スポーツ科学部)  
進藤宗洋 (福岡大学スポーツ科学部)

2a08 理工系大学生の6年間の体格、血圧の変化と血中脂質の関係

○藤井 香 (慶応義塾大学保健管理センター) 広瀬 寛 (慶応義塾大学保健管理センター)  
勝川史憲 (慶応義塾大学スポーツ医学研究センター) 柴田洋孝 (慶応義塾大学保健管理センター)  
和井内由充子 (慶応義塾大学保健管理センター) 辻岡美南子 (慶応義塾大学保健管理センター)  
齊藤郁夫 (慶応義塾大学保健管理センター)

2a09 幼児の生活習慣Ⅰ —自然覚醒と睡眠時間帯—

新沼正子 (ノートルダム清心女子大学) 高橋ひとみ (桃山学院大学)  
中永征太郎 (ノートルダム清心女子大学)

2a10 幼児の生活習慣Ⅱ —朝食・睡眠・排便の状況と就寝・起床時刻との関連性—

○高橋ひとみ (桃山学院大学) 新沼正子 (ノートルダム清心女子大学)  
中永征太郎 (ノートルダム清心女子大学)

2a11 中学生における高次神経活動・自律神経活動の特徴と生活との関連

○野井真吾 (日本体育大学大学院) 西條修光 (日本体育大学)  
正木健雄 (日本体育大学大学院)

2a12 重症心身障害児の発育指標及び健康指標の相互作用に関する研究 (第三報)

○小林保子 (東京学芸大学保健学研究室)  
鈴木路子 (東京学芸大学保健学研究室)

2a13 中1-高3における6年間のBMIのトラッキング

- 廣原紀恵（茨城県立勝田工業高等学校） 服部恒明（茨城大学）
- 2a14 大規模データを用いた児童・生徒の年齢別体格指数の分布  
○渡辺朗子（東京大学大学院教育学研究科身体教育学コース）  
平山素子（大妻女子大学人間生活科学研究所）  
大澤清二（大妻女子大学人間生活科学研究所）
- 2a15 小学生における足指の最大外転域とフットプリント  
○服部恒明（茨城大学教育学部）
- 2a16 脊柱側彎症学校検診における進行例の検討  
○磯部啓二郎（千葉大学教育学部） 浦 清（東京都予防医学協会）
- 2a17 体力・運動能力発達の因果構造  
○西嶋尚彦（筑波大学） 鈴木宏哉（筑波大学大学院）  
大塚慶輔（筑波大学大学院） 小山 浩（筑波大学附属中学校）  
小沢治夫（筑波大学附属駒場中高校） 鈴木和弘（国際武道大学）
- 2a18 新体力テストにおける体力・運動能力の因果構造  
○鈴木宏哉（筑波大学大学院） 大塚慶輔（筑波大学大学院）  
西嶋尚彦（筑波大学） 小山 浩（筑波大学附属中学校）  
小沢治夫（筑波大学附属駒場中高校） 鈴木和弘（国際武道大学）
- 2a19 ステッピングによる敏捷性の因果構造  
○大塚慶輔（筑波大学大学院） 鈴木宏哉（筑波大学大学院）  
西嶋尚彦（筑波大学） 小山 浩（筑波大学附属中学校）  
小沢治夫（筑波大学附属駒場中高校） 鈴木和弘（国際武道大学）
- 2a20 トランポリン身体協応テスト（TKT）の開発と適用  
○是枝喜代治（国立特殊教育総合研究所）  
鈴木路子（東京学芸大学） 小林芳文（横浜国立大学）
- 2a21 幼稚園児ならびに保育園児の生活状況と健康管理  
○前橋 明（倉敷市立短期大学） 中永征太郎（ノートルダム清心女子大学）
- 2a22 学校スポーツ現場における応急処置に関する調査研究  
○藤原 寛（京都府立医科大学小児科） 大西晴子（京都教育大学教育学部学校保健研究室）  
井上文夫（京都教育大学教育学部学校保健研究室）
- 2a23 児童生徒の不定愁訴症候群に関する縦断的研究  
○平山素子（大妻女子大学人間生活科学研究所）  
渡辺朗子（東京大学大学院教育学研究科）  
大澤清二（大妻女子大学人間生活科学研究所）
- 2a24 茶及びカテキン含有飲料の病原性大腸菌に対する増殖及び毒素産生に対する抑制効果の検討について  
○西川武志（北海道教育大学札幌校） 磯貝恵美子（北海道医療大学）  
磯貝 浩（札幌医大） 大庭文明（ハーバー）  
小柳昌之（ハーバー） 木村浩一（北海道工大）  
工藤智恵子（帯広厚生病院） 蝶野英人（宝）  
土井芳美（北海道教育大学札幌校） 佐藤美和（北海道教育大学札幌校）  
岡安多香子（北海道教育大学札幌校） 荒島真一郎（北海道教育大学札幌校）

- 2a25 柔道選手の黄色ブドウ球菌皮膚創傷感染と対策について  
 ○田神一美 (筑波大学体育科学系環境保健学) 後藤信雄 (筑波大学体育専門学群)
- 2a26 学校環境の衛生学的評価に関する研究 —学校におけるアレルゲン調査第4報—  
 ○上原弘三 (シントーファイン株式会社) 石川哲也 (神戸大学)  
 田中彩美 (神戸大学) 広田 進 (神戸大学)  
 森脇裕美子 (神戸大学) 鬼頭英明 (文部科学省)  
 杉下順一郎 (東京都薬剤師会) 北村庄衛 (兵庫県薬剤師会)  
 村松 學 (武蔵野女子短期大学)
- 2a27 ダニアレルゲン簡易検査キット“マイティチェッカー”の有用性の検討  
 ○田中彩美 (神戸大学) 石川哲也 (神戸大学)  
 広田 進 (神戸大学) 森脇裕美子 (神戸大学)  
 上原弘三 (シントーファイン株式会社)
- 2a28 学生寮における室内空気環境と寮生の体調との相互関係に関する実態調査  
 (I) 健康調査結果と居住環境との相互関連に視点を置いて  
 ○高井 亮 (東京学芸大学保健学研究室) 岩谷昌子 (東京学芸大学保健学研究室)  
 平野 恵 (東京学芸大学保健学研究室) 鈴木路子 (東京学芸大学保健学研究室)
- 2a29 学生寮における室内空気環境と寮生の体調との相互関係に関する実態調査  
 (II) 衛生学的調査結果～住まい方に視点を置いて～  
 ○岩谷晶子 (東京学芸大学環境保健学研究室) 高井 亮 (東京学芸大学環境保健学研究室)  
 平野 恵 (東京学芸大学環境保健学研究室) 鈴木路子 (東京学芸大学環境保健学研究室)
- 2a30 改修一年後の校舎内ホルムアルデヒド濃度等, 教室空気環境調査に関する環境保健教育学的研究  
 ○鈴木路子 (東京学芸大学環境保健学研究室) 平野 恵 (東京学芸大学環境保健学研究室)  
 増野知子 (東京学芸大学環境保健学研究室) 白井正樹 (グリーンブルー株式会社)  
 皆川直人 (グリーンブルー株式会社) 川辺俊雄 (ガスティック株式会社)  
 藤井喜一 (東京学芸大学附属世田谷小学校) 藤田留三丸 (東京学芸大学附属世田谷小学校)  
 丸太文子 (東京学芸大学附属世田谷小学校)
- 2a31 住居環境と少年非行の相互関連に関する教育健康学的アプローチ  
 ○平野 恵 (東京学芸大学環境保健学研究室)  
 鈴木路子 (東京学芸大学環境保健学研究室)
- 2a32 ATPを指標とした子どもの手洗いによる汚れの除去効果  
 ○山本恭子 (兵庫県立看護大学) 鶴飼和浩 (兵庫県立看護大学)
- 2a33 FAX機器から検索可能な学校災害事例データベースシステム  
 ○横尾能範 (神戸大学・総合人間科学研究科) 謝大煒 (神戸大学・総合人間科学研究科)
- 2a34 インターネットを用いた健康・保健情報の共有に関する研究 —ホームページの作成を通して—  
 ○田代加奈子 (雄勝町立雄勝中学校) 岩永則子 (本吉町立馬籠小学校)  
 佐々木胤則 (北海道教育大学札幌校) 富田 勤 (北海道教育大学札幌校)

第2日 11月18日(日) 午後 第4ギャラリー (14:00~15:00)

ポスターセッション

- 2p35 地域と連携した思春期健康支援システムに関する研究 (第1報)  
 —二次性徴に対する相談ニーズと性の情報源に関する調査—

- 秀平佳織 (川崎医療福祉大学大学院) 津島ひろ江 (川崎医療福祉大学)  
 小河孝則 (川崎医療福祉大学) 木村一彦 (川崎医療福祉大学)  
 弘中愛子 (川崎医療福祉大学大学院) 山田景子 (川崎医療福祉大学大学院)  
 萩原浩子 (真備東中学校)
- 2p36 養護教諭を対象とした保健学習に関する研修プログラムの評価  
 ○坂本 崇 (筑波大学大学院) 野津有司 (筑波大学)  
 渡部 基 (北海道大学) 岩田英樹 (金沢大学)  
 久保元芳 (筑波大学大学院) 国吉恵一 (筑波大学大学院)  
 佐藤 幸 (筑波大学大学院)
- 2p37 養護教諭に求められる総合的看護能力 (第9報) —教職員との連携—  
 ○嶋本恭子 (都立大附属高校) 天野洋子 (沖縄県立看護大学)  
 鈴木美智子 (九州女子短期大学) 福西武子 (横浜高等教育専門学校)  
 山田万智子 (元京北中・高等学校)
- 2p38 養護教諭の職務に関する一考察Ⅲ —世界の視点から養護教諭の職務を考える—  
 ○舟見久子 (調布市立第七小学校) 宍戸洲美 (渋谷区立中幡小学校)  
 岩辺京子 (東京都中央区立中央小学校) 加藤秀子 (横浜市立川和中学校)  
 桜田 淳 (清瀬市立第七小学校) 渋谷和子 (美瑛市立北英小学校)  
 新谷チヨ子 (調布市立石原小学校) 野井友子 (多摩大附属聖ヶ丘中学校・高等学校)  
 深津由美子 (北区立稲田小学校) 松本順子 (川崎市立西中原中学校)
- 2p39 保健室活動場面における熟練養護教諭と初任養護教諭の実践的思考様式に関する比較研究  
 ○工藤宣子 (岩手県立都工業高等学校) 栗林 徹 (岩手大学教育学部)  
 森 昭三 (筑波大学名誉教授)
- 2p40 高等学校における中途退学者への援助 —保健室との関わり—  
 ○板倉睦子 (北海道教育大学札幌校) 荒島真一郎 (北海道教育大学札幌校)
- 2p41 高校生における性行動リスク回避行為の把握とピルの認識について  
 ○岩永則子 (本吉町立馬籠小学校) 田代加奈子 (雄勝町立雄勝中学校)  
 佐々木胤則 (北海道教育大学札幌校) 富田 勤 (北海道教育大学札幌校)
- 2p42 薬物乱用防止教育に関する研究 (第2報)  
 —兵庫県及び東京都における高校生の薬物乱用に対する意識と  
 ライフスキルに関する予備調査—  
 ○広田 進 (神戸大学) 石川哲也 (神戸大学)  
 川畑徹朗 (神戸大学) 田中彩美 (神戸大学)  
 森脇裕美子 (神戸大学) 勝野真吾 (兵庫教育大学)  
 原田幸男 (東京都立深川高等学校)
- 2p43 薬物乱用防止教育に関する研究 第3報 —英国Hounslowにおける薬物教育プログラムの検討—  
 ○森脇裕美子 (神戸大学) 石川哲也 (神戸大学)  
 川畑徹朗 (神戸大学) 田中彩美 (神戸大学)  
 広田 進 (神戸大学) 勝野真吾 (兵庫教育大学)  
 西岡伸紀 (兵庫教育大学)  
 吉本佐雅子 (鳴門教育大学)
- 2p44 マルチメディアによる薬物乱用防止教育

—CD-ROM教材の使用方法的の違いによる教育効果について—

○鈴木和弘 (国際武道大学) 小磯 透 (筑波大学附属中学校)  
 斎藤 実 (大妻女子大学) 高石昌弘 (国立公衆衛生院)  
 大澤清二 (大妻女子大学) 國土将平 (鳥取大学)  
 松本健治 (鳥取大学) 勝野真吾 (兵庫教育大学)  
 石川哲也 (神戸大学)

2p45 高校における薬物乱用防止教室プログラム (DARP) の評価

—追跡調査 (介入3ヶ月後) の結果から—

○野津有司 (筑波大学) 菊地宣博 (筑波大学大学院)  
 川原詳子 (岩手県立一関第二高等学校) 入駒一美 (黒沢尻南高等学校)  
 千田雅子 (岩谷堂農林高等学校) 中下玲子 (金ヶ崎高等学校)  
 工藤宣子 (宮古工業高等学校) 遠藤巴子 (岩手県立大学)  
 渡部 基 (北海道教育大学札幌校) 鬼頭英明 (文部科学省)

2p46 小学5・6年生の飲酒に関する意識と実態調査

○林 暁子 (横浜市立茅ヶ崎中学校) 高橋里枝 (横浜市戸塚区保健所)  
 三浦朋子 (聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院) 岡田怜奈 (第一勧業銀行)  
 北岡英子 (神奈川県立衛生短期大学) 熊谷幸恵 (神奈川県立衛生短期大学)

2p47 大学生の集団問題飲酒に関する研究 —体育学および教育学専攻大学生を対象にして—

○柴田宣之 (筑波大学大学院) 岡坂晶子 (筑波大学大学院)  
 野津有司 (筑波大学) 宗像恒次 (筑波大学)

2p48 大学生のイッキ飲み防止にむけての一考察

○田久浩志 (中部学院大学人間福祉学部健康福祉学科)

2p49 中学生の喫煙ステージと予防的介入における知識の変化

○大竹恵子 (神戸女学院大学人間科学部)  
 島井哲志 (神戸女学院大学人間科学部) 伊藤 博 (神戸市立高取台中学校)

2p50 活動報告：患者を講師とした喫煙防止教育

○中久木康一 (東京医科歯科大学医歯学総合研究科顎顔面外科学)

2p51 活動報告：スリランカにおける学校歯科保健教育の展開

○中久木康一 (東京医科歯科大学医歯学総合研究科顎顔面外科学)

2p52 盲学校における全盲の生徒に対する口腔衛生指導について

○中久木康一 (東京医科歯科大学医歯学総合研究科顎顔面外科学)  
 小林樹恵 (社会福祉法人賛育会賛育会病院)

2p53 歯と口の健康教育とセルフエスティームの形成に関する研究 (第2報)

○武井典子 (財団法人ライオン歯科衛生研究所)  
 渋谷耕司 (財団法人ライオン歯科衛生研究所)

中村智子 (東京都北区立田端中学校) 川畑徹朗 (神戸大学発達科学部)

2p54 生徒からみた保健授業の評価

○下村義夫 (岡山大学教育学部) 長藤恵子 (島根県六日町中学校)

2p55 広域科学としての保健科教育に関する研究 —教育健康学の支援を視点として (第一報) —

○増野知子 (東京学芸大学) 鈴木路子 (東京学芸大学)

2p56 女子学生の大学入学時の健康行動と学習経験

- 浅川和美 (山梨県立看護大学短期大学部)  
有井良江 (山梨県立看護大学) 中村和彦 (山梨大学教育人間科学部)
- 2p57 大学生における身長・体重の自己申告値と測定値の関係  
○竹田優子 (茨城大学大学院教育学研究科) 服部恒明 (茨城大学教育学部)
- 2p58 傷跡に対する意識と価値観に関する研究 —男女大学生について—  
○伊藤常久 (三島学園女子短期大学) 土井 豊 (東北生活文化大学)  
川上吉昭 (東北福祉大学)
- 2p59 Health Promoting Schoolに関する研究 —South Australiaにおけるプログラムの分析—  
○田中雅子 (兵庫教育大学学校教育学部)  
永井純子 (兵庫教育大学学校教育学部)  
西岡伸紀 (兵庫教育大学学校教育学部)  
勝野眞吾 (兵庫教育大学学校教育学部)
- 2p60 暗唱学習についての一考察 その1 中学生の意識  
○柴川清美 (近畿大学大学院文芸学研究科)
- 2p61 小学生のソーシャルスキルに関する研究  
—ソーシャルスキルとストレスに関する研究の基礎として—  
○岸真紀子 (千葉大学大学院教育学研究科)
- 2p62 健康教育を目的とした簡易な栄養調査と調査対象学生の栄養に対する認識  
○後藤 章 (大阪教育大学保健体育教育講座)  
池田好美 (大阪教育大学保健体育教育講座)  
徳梅由記 (大阪教育大学保健体育教育講座)
- 2p63 小学校一年生における「からだの学習」での認識過程  
○山本晃弘 (日本体育大学大学院) 野井真吾 (日本体育大学大学院)  
野田 耕 (上智大学) 正木健雄 (日本体育大学大学院)
- 2p64 幼児の手洗い・うがい行動と「バイキン」に対する理解  
○吉川由希子 (青森県立保健大学)

## 会 報

# 常任理事会議事概要

## 平成13年 第3回

日 時：平成13年7月7日(土) (14:00~16:00)

場 所：大妻女子大学人間生活科学研究所内 学会事務局 (大妻女子大学C棟242室)

出席者：森 昭三 (理事長), 和唐正勝 (編集), 衛藤 隆 (国際交流), 林 正 (学術)

大澤清二 (庶務 事務局長) 市村國夫 (幹事 広報) 笠井直美 (幹事) 神山晴江 (事務局)

1. 前回常任理事会の議事録の確認を行った。

2. 事業報告

(1) 庶務関係 大澤庶務担当常任理事より以下の事項が報告された。

- ① 平成13年度科学研究費補助金の交付決定
- ② 厚生労働省「健やか親子21推進協議会」大会に代表者参加
- ③ 第47回年次学会英文抄録の進捗状況
- ④ 日本学術会議体育学・スポーツ科学研連に関する運営費分担金の納入
- ⑤ 第50回日本学校保健学会開催地の調整中
- ⑥ 1999・2000年度の2年間会費未納会員に対する支払いの督促
- ⑦ ニュースレターNo.9の進捗状況 (市村広報担当)

(2) 編集関係 和唐編集担当常任理事より以下の事項が報告された。

- ① 「学校保健研究」投稿論文の査読・受理状況
- ② 「学校保健研究」上での〈編集者への手紙〉(仮題)という枠の設置について委員会にて検討中
- ③ 「学校保健研究」43巻5号の特集(案)について

(3) 学術関係 林学術担当常任理事より以下の事項が報告された。

- ① 平成13年度奨励賞について審査中
- ② 奨励賞・共同研究の活性化について検討中

(4) 国際交流関係 衛藤国際交流担当常任理事より以下の事項が報告された。

- ① 現在国際的に使用されているキーワードに関して検討中

(5) 50周年記念事業について 理事長・各担当常任理事より以下の事項が報告された。

- ① 50周年記念大会の進捗状況
- ② 50周年記念誌の進捗状況
- ③ 学校保健用語集辞典の進捗状況
- ④ 英文誌の進捗状況
- ⑤ 50年史の進捗状況

(6) 第11期役員選挙について 市村選挙管理委員長より中間報告がなされた。

3. 議題

(1) 平成13年度第48回年次学会について (和唐年次学会長)

企画(案)準備状況について説明がなされ、審議が行われた。また、学会長特別「教育企画」を行うことが了承された。

(2) 第11期役員選挙について (市村選挙管理委員長)

役員選挙の日程を当初の予定を変更する提案がなされ、了承された。

(3) 50周年記念事業について (理事長・各担当常任理事)

各委員会の新役員会への引継ぎに関しては、継続して検討することとなった。

- (4) 庶務関係 (大澤庶務担当常任理事)  
「動脈硬化教育フォーラム」後援の依頼について審議が行われ、了承された。
- (5) 学術関係 (林学術担当常任理事)  
平成13年度共同研究の審査について報告がされ、了承された。
- (6) その他 (事務局長)
- ① 名誉会員の推薦についての提案がなされた。
  - ② 平成14・15年度以降の科学研究費補助金の申請・審査等について、学会としてどのように対応していくかが審議され、引き続いて拡大常任理事会でも検討することとなった。
  - ③ 学会役員の定数について審議され、継続して検討することとなった。

大澤清二 (大妻女子大学教授) ほか著

## 改訂 学校保健学概論

A5判 二六頁 定価 三三〇円

本書は、教育の中で学校保健がどのような役割を果たすのか、その仕組みはどのようになっているのか、学校保健の扱う個々の要素としてどのようなものがあり、どんな知識と技術が必要なのかという点について丁寧に解説しています。

藤沢良知 (日本栄養士会会長) 著

## 生き生きの食事学

四六判 一九〇頁 定価 一六八〇円

生活習慣病の時代に入って、一次予防としての健康づくりや食生活の改善が重要視されています。予防に使う百円は治療費の一万円に等しいと言われますが、もっと病気の予防のため、健康づくりのため日々の食生活を大切にしたい。(著者「はじめに」より)

内山 源他著	健康・ウエルネスと生活	定価 二四一五円
内山 源他著	公衆衛生学	定価 三三〇円
大澤 清二著	生活統計の基礎知識	定価 二一〇〇円
大澤 清二著	生活科学のための多変量解析	定価 三九〇〇円
エルキンド著	居場所のない若者たち	定価 二九四〇円
A・ゲゼル著	乳幼児の心理学	定価 五六七〇円
A・ゲゼル著	学童の心理学	定価 五六七〇円
A・ゲゼル著	青年の心理学	定価 五六七〇円

会報

機関誌「学校保健研究」投稿規定 (平成13年4月15日改正)

1. 本誌への投稿者(共著者を含む)は、日本学校保健学会会員に限る。
2. 本誌の領域は、学校保健およびその関連領域とする。
3. 原稿は未発表のものに限る。
4. 本誌に掲載された原稿の著作権は日本学校保健学会に帰属する。
5. 本誌に掲載する原稿の種類と内容は、次のように区別する。

原稿の種類	内 容
総説	学校保健に関する研究の総括、文献解説
論説	学校保健に関する理論の構築、展望、提言等
原著	学校保健に関して新しく開発した手法、発見した事実等の論文
報告	学校保健に関する論文、ケースレポート、フィールドレポート
会報	学会が会員に知らせるべき記事
その他	学校保健に関する貴重な資料、書評、論文の紹介等

ただし、「論説」、「原著」、「報告」以外の原稿は、原則として編集委員会の企画により執筆依頼した原稿とする。

6. 投稿された原稿は、専門領域に応じて選ばれた2名の評議員による査読の後、原稿の採否、掲載順位、種類の区分は、編集委員会で決定する。
7. 原稿は別紙「原稿の様式」にしたがって書くこと。
8. 原稿の締切日は特に設定せず、随時投稿を受け付ける。
9. 原稿は、正(オリジナル)1部にほかに副(コピー)2部を添付して投稿すること。
10. 査読のための費用として5,000円の定額郵便為替(文字等は一切記入しない)を投稿原稿に同封して納入する。
11. 原稿は、下記あてに書留郵便で送付する。  
〒102-0075 東京都千代田区三番町12  
大妻女子大学 人間生活科学研究所内  
日本学校保健学会事務局  
TEL.FAX 03-5275-9362  
その際、投稿者の住所、氏名を書いた返信用封筒(A4)を3枚同封すること。
12. 同一著者、同一テーマでの投稿は、先行する投稿原稿が受理されるまでは受け付けない。
13. 掲載料は刷り上り8頁以内は学会負担、超過頁分は著者負担(一頁当たり10,000円)とする。
14. 「至急掲載」希望の場合は、投稿時にその旨を記すこと。「至急掲載」原稿は査読終了までは通常原稿と同一に扱うが、査読終了後、至急掲載料(50,000円)を振り込みの後、原則として4ヶ月以内に掲載する。「至急掲載」の場合、掲載料は、全額著者負担となる。
15. 著者校正は1回とする。
16. 審査過程で返却された原稿が、特別な事情なくして学会発送日より3ヶ月以上返却されないときは、投稿を取り下げたものとして処理する。
17. 原稿受理日は編集委員会が審査の終了を確認した年月日をもってする。

原稿の様式

1. 原稿は和文または英文とする。和文原稿は原則としてワードプロセッサを用いA4用紙30字×28行(840字)横書きとする。ただし査読を終了した最終原稿はフロッピーディスクをつけて提出する。  
英文はすべてA4用紙にダブルスペースでタイプする。
2. 文章は新仮名づかい、ひら仮名使用とし、句読点、カッコ(「, 『, (, [など)は1字分とする。
3. 外国語は活字体を使用し、1字分に半角2文字を収める。
4. 数字はすべて算用数字とし、1字分に半角2文字を収める。
5. 図表、写真などは、直ちに印刷できるかたちで別紙に作成し、挿入箇所を論文原稿中に指定する。  
なお、印刷、製版に不適当と認められる図表は書替えまたは割愛を求めることがある。(専門業者に製作を依頼したものの必要経費は、著者負担とする)
6. 和文原稿には800語以内の英文抄録、英文原稿には1,500字以内の和文抄録をつけ、5つ以内のキーワード(和文と英文)を添える。これらのない原稿は受け付けない。
7. 正(オリジナル)原稿の表紙には、表題、著者名、所属機関名、代表者の連絡先(以上和英両分)、原稿枚数、表および図の数、希望する原稿の種類、別刷必要部数を記す。(別刷に関する費用はすべて著者負担とする)副(コピー)原稿の表紙には、表題、キーワード(以上和英両分)、英文抄録の日本語訳のみとする。
8. 文献は引用順に番号をつけて最後に一括し、下記の形式で記す。本文中にも、「…知られている<sup>1)</sup>。」または、「…<sup>2)4)</sup>、…<sup>1-5)</sup>」のように文献番号をつける。著者が7名以上の場合は最初の3名を記し、あとは「ほか」(英文ではetal.)とする。  
[定期刊行物] 著者名:表題、雑誌名、巻:頁一頁、発行年  
[単行本] 著者名(分担執筆者名):論文名、(編集・監修者名)、書名、引用頁一頁、発行所、発行地、発行年

—記載例—

[定期刊行物]

- 1) 三木和彦:学校保健統計の利用と限界, 学校保健研究, 24:360-365, 1992
- 2) 西岡伸紀, 岡田加奈子, 市村国夫ほか:青少年の喫煙行動関連要因の検討—日本青少年喫煙調査(JASS)の結果より—, 学校保健研究, 36:67-78, 1994
- 3) Glennmark, B., Hedberg, G., Kaijser, L. and Jansson, E.: Muscle strength from adolescence to adulthood—relationship to muscle fibre types, Eur. J. Appl. Physiol. 68: 9-19, 1994

[単行本]

- 4) 白戸三郎:学校保健活動の将来と展望, (船川, 高石編), 学校保健活動, 216-229, 杏林書院, 東京, 1994

## 会 報 日本学校保健学会第11期役員選挙結果の公示

日本学校保健学会選挙管理委員会は、日本学校保健学会第11期役員選挙を本学会会則および役員選出規定にもとづき、去る6月から9月にかけて行い終了致しましたので、その結果を公示します。

なお、最終的な役員名簿は第48回年次学会の理事会にて決定されますので、その結果については学校保健研究43巻5号に掲載します。

平成13年9月20日

日本学校保健学会選挙管理委員会 市村 國夫  
戸部 秀之  
平山 素子

- 1) 平成13年7月10日(当日消印有効)の締切日までに返送された投票用紙をとりまとめ、7月24日に開票し、評議員82名が選出された。(選挙権所有者1,577名)
- 2) 投票により選出された地区別評議員に、所定数の地区別理事の投票を依頼し、8月17日に開票し、理事30名が選出された。
- 3) 投票により選出された地区別理事30名に、理事長及び常任理事の投票を依頼し、9月1日に開票し理事長1名および常任理事4名が選出された。

### 有権者数および評議員選挙投票率

	有権者数	投票総数	有効票数	無効票数	投票率 (%)
北海道	58	22	22	0	38
東北	106	36	36	0	34
関東※	572	156	156	0	27
北陸	39	22	22	0	56
東海	207	70	70	0	34
近畿	256	110	110	0	43
中国・四国	192	67	67	0	35
九州	147	44	44	0	30
合計	1,577	527	527	0	33

※海外を含む

### 評議員・理事定数

	北海道	東北	関東	北陸	東海	近畿	中国・四国	北海道	合計
評議員	3	6	29	2	11	13	10	8	82
理事	1	2	10	1	4	5	4	3	30

# 第11期役員選挙開票結果〔評議員・理事・常任理事及び理事長〕

(地区別五十音順, ○は理事 ◎は常任理事 ☆は理事長)

## 北海道地区 (3名)

- 荒島真一郎 北海道教育大学札幌校
- 川上幸三 北海道教育大学函館校
- 横田正義 北海道教育大学旭川校

## 東北地区 (6名)

- 数見隆生 宮城教育大学
- 佐藤福島大学
- 立身洋 東北大学大学院
- 面澤政信 岩手大学
- 盛昭子 弘前大学
- 盛昭子 弘前大学

## 北陸地区 (2名)

- 小阪栄進 金沢市立森山町小学校
- 中川秀昭 金沢医科大学

## 関東地区 (29名)

- 飯田澄美子 聖隷クリストファー看護大学
- 磯辺啓二郎 千葉大学
- 市村國夫 常磐短期大学
- 猪股俊二 国際武道大学大学院前教授
- 植田誠二 茨城大学
- ◎衛藤清隆 東京大学大学院
- ◎大澤清二 大妻女子大学
- 岡田奈子 千葉大学
- 小笠直夫 筑波大学附属駒場中学校
- 鎌田直美 新潟大学
- 小磯尚子 女子栄養大学
- 小鈴透子 筑波大学附属中学校
- 小鈴正和子 国立公衆衛生院
- 鈴木庄弘 国際武道大学
- 高石昌弘 群馬大学
- 高橋浩之 国立公衆衛生院顧問・名誉教授
- 高田神一 千葉大学
- 瀧澤利美 筑波大学
- 武田敏之 茨城大学
- 戸部秀敏 千葉大学名誉教授
- 西嶋尚彦 埼玉大学
- 野津有司 筑波大学
- 三木とみ子 筑波大学
- 皆川興栄子 女子栄養大学
- ☆森昭三 新潟大学
- 森田光三 筑波大学名誉教授
- 渡邊正 千葉大学大学院
- ◎和田正勝 東京学芸大学
- ◎和田正勝 宇都宮大学

## 東海地区 (11名)

- 天野敦子 愛知教育大学
- 家田重晴 中京大学
- 大沢功 名古屋大学

- 櫻井しのぶ 三重大学医学部
- 佐藤祐造 名古屋大学
- 竹内宏一 浜松医科大学
- 谷宏健 静岡大学
- 野村和雄 愛知教育大学
- 堀内久美子 元愛知教育大学
- 宮尾克 名古屋大学
- 村松常司 愛知教育大学

## 近畿地区 (13名)

- 石川哲也 神戸大学
- 大山良徳 大阪工業大学
- 勝野真吾 兵庫教育大学
- 川畑徹朗 神戸大学
- 白石龍 大阪教育大学
- 武田真太郎 和歌山県立医科大学名誉教授
- 中神勝 大阪府立大学
- 林正 滋賀大学名誉教授
- 松岡弘 大阪教育大学
- 三宮耕久 兵庫教育大学
- 八木和 和歌山県立医科大学
- 横尾能久 京都大学名誉教授
- 横尾能久 神戸大学

## 中国・四国地区 (10名)

- 石原昌江 岡山大学
- 國土将 鳥取大学
- 斎藤美磨 山口県立大学
- 下村義夫 岡山大学
- 實成文彦 香川医科大学
- 武田則昭 香川医科大学
- 友定保博 山口大学
- ◎松本健治 鳥取大学
- 門田新一郎 岡山大学
- 山本万喜雄 愛媛大学

## 九州地区 (8名)

- 伊藤武樹 宮崎大学
- 鈴木美智子 九州女子短期大学
- 住田実 大分大学
- 平良一彦 琉球大学
- 高倉実 琉球大学
- 田原靖昭 長崎大学
- 照屋博行 福岡教育大学
- 美坂幸治 鹿児島大学名誉教授

第48回近畿学校保健学会は、平成13年6月23日に兵庫教育大学で開催された。

一般演題

A-1 学校における保健室の位置についての研究

白石龍生 (大阪教育大学)

A-2 Health Promoting Schoolに関する研究(1) —プログラムの目的等の国際比較—

田中雅子 (兵庫教育大学), 永井純子 (兵庫教育大学)

西岡伸紀 (兵庫教育大学), 勝野真吾 (兵庫教育大学)

A-3 中学生における健康意識・生活習慣と自己満足感との関連

宮慶美恵子 (京都市立六原小学校), 西 能代 (京都市立境谷小学校)

小原さかえ (京都市立神川中学校), 樋口義之 (京都教育大学), 松浦賢長 (京都教育大学)

A-4 女子高校生の健康の実態とその要因に関する研究

佐伯洋子 (大阪明浄女子短期大学), 中神 勝 (京都ノートルダム女子大学)

A-5 薬物乱用防止教育に関する研究 (第1報)

—薬物乱用に関する意識とライフスキルに関する予備調査—

広田 進 (神戸大学), 石川哲也 (神戸大学)

川畑徹朗 (神戸大学), 勝野真吾 (兵庫教育大学)

A-6 中国における小学生の健康教育をめぐって (第一報) —教育課程における位置づけと実施状況—

王 天奎 (和歌山県立医科大学), 山本博一 (和歌山県立医科大学)

宮井信行 (和歌山県立医科大学), 森岡郁晴 (和歌山県立医科大学)

武田真太郎 (和歌山県立医科大学), 宮下和久 (和歌山県立医科大学)

A-7 中国における小学生の健康教育をめぐって (第二報) —重点校における実態—

王 天奎 (和歌山県立医科大学), 山本博一 (和歌山県立医科大学)

宮井信行 (和歌山県立医科大学), 森岡郁晴 (和歌山県立医科大学)

武田真太郎 (和歌山県立医科大学), 宮下和久 (和歌山県立医科大学)

A-8 児童の栄養摂取バランスにおける給食の影響 —Goshiki Health Study—

永井純子 (兵庫教育大学), 中川昌幸 (兵庫教育大学)

西岡伸紀 (兵庫教育大学), 吉本佐雅子 (鳴門教育大学)

松浦尊磨 (五色町健康福祉総合センター), 勝野真吾 (兵庫教育大学)

A-9 タイの都市近郊における生徒の生活習慣の実態

山本博一 (和歌山県立医科大学), 宮井信行 (和歌山県立医科大学)

坂口俊二 (和歌山県立医科大学), 富田耕太郎 (和歌山県立医科大学)

森岡郁晴 (和歌山県立医科大学), 宮下和久 (和歌山県立医科大学)

武田真太郎 (和歌山県立医科大学), 板谷裕美 (和歌山医大・看護短期大学部)

有田幹雄 (和歌山医大・看護短期大学部), 後和美朝 (大阪国際女子大学)

A-10 発達支援が治療上重要であった小児心身症の2例

上本未夏 (大阪教育大学), 堀内康生 (大阪教育大学)

A-11 1型糖尿病児の学校生活の問題点

伸山綾子 (滋賀医科大学), 見岳誓子 (滋賀医科大学), 西島治子 (滋賀医科大学)  
 泊 祐子 (滋賀医科大学), 大矢紀昭 (滋賀医科大学)

A-12 中学生における事故要因の縦断的検討

板持紘子 (滋賀大学教育学部附属中学校), 間壁恵子 (滋賀大学教育学部附属小学校)  
 中村清美 (大津市立仰木の里小学校), 林 正 (滋賀大学)

A-13 ファクシミリ利用の学校災害事例共有システムの開発

謝 大偉 (神戸大学), 横尾能範 (神戸大学)

B-1 スポーツにおける高校チャンピオン集団の比体表面積の比較

野崎美帆 (兵庫教育大学), 成山公一 (京都文教大学)  
 山本忠志 (兵庫教育大学), 三野 耕 (兵庫教育大学)

B-2 比体表面積の発育曲線をもとにした高校ボクシング選手の体重調整の実践について

杉ノ原淳文 (兵庫教育大学), 武元前川 (南京都学園)  
 山本忠志 (兵庫教育大学), 三野 耕 (兵庫教育大学)

B-3 スポーツ選手となった生徒・学生の血清所見について

萩野早苗 (和歌山医大・看護短期大学部), 北出綾果 (和歌山医大・看護短期大学部)  
 辻あさみ (和歌山医大・看護短期大学部), 神谷和世 (和歌山医大・看護短期大学部)  
 有田幹雄 (和歌山医大・看護短期大学部), 宮井信行 (和歌山県立医科大学)  
 宮下和久 (和歌山県立医科大学), 武田眞太郎 (和歌山県立医科大学), 猪尾和弘 (和歌山大学)

B-4 中・高女子における血液像に及ぼす運動の影響について

山本忠志 (兵庫教育大学), 三野 耕 (兵庫教育大学)

B-5 女子大学生の骨密度と運動習慣

大西晴子 (京都教育大学), 井上文夫 (京都教育大学), 藤原 寛 (京都府立医科大学)

B-6 児童生徒の体力・運動能力の推移と個人差について

中川昌幸 (兵庫教育大学), 永井純子 (兵庫教育大学)  
 西岡伸紀 (兵庫教育大学), 勝野眞吾 (兵庫教育大学)

B-7 比体表面積発育曲線の年次推移からみた21世紀の子どもの体力・運動能力について

三野 耕 (兵庫教育大学)

B-8 京都府下児童・生徒の肥満及びやせの頻度 ～地域差の検討～

井上文夫 (京都教育大学), 大西晴子 (京都教育大学), 衣笠昭彦 (京都府向陽保健所)  
 藤原 寛 (京都府立医科大学), 白木文代 (京都府教育庁)

B-9 ウエスト周囲径測定による肥満の判定

藤原 寛 (京都府立医科大学), 大西晴子 (京都教育大学)  
 井上文夫 (京都教育大学), 名和三知恵 (京都教育大学附属京都小学校)

B-10 ダウン症生徒の肥満評価

吉岡隆之 (神戸市看護大学), 芝垣伊都子 (神戸市看護大学)  
 笠松隆洋 (神戸市看護大学), 福嶋美津子 (大阪教育大学附属養護学校)  
 藤田弘子 (兵庫県立塚口病院), 綾部 捷 (近畿知的障害養護学校研究協議会健康安全部会)

B-11 身体発育の成熟度を考慮に入れたBMIの基準値について

後和美朝 (大阪国際女子大学), 亀高美果 (ヒューマンアカデミー)  
 北口和美 (西宮市立西宮高校), 白石龍生 (大阪教育大学)

- B—12 成熟度と比体表面積の評価を用いたグループ編成が授業評価に及ぼす影響について  
三野 耕 (兵庫教育大学), 五十嵐雅敬 (姫路市立小学校), 山本忠志 (兵庫教育大学)
- B—13 加速度脈派からみた若年者における末梢循環の年齢変化 (第3報)  
—身体別基準曲線の作成とその応用—  
宮井信行 (和歌山県立医科大学), 山本博一 (和歌山県立医科大学)  
南 佳宏 (和歌山県立医科大学), 富田耕太郎 (和歌山県立医科大学)  
森岡郁晴 (和歌山県立医科大学), 武田真太郎 (和歌山県立医科大学)  
宮下和久 (和歌山県立医科大学), 神谷和世 (和歌山医大・看護短期大学部)  
有田幹雄 (和歌山医大・看護短期大学部), 白石龍生 (大阪教育大学)
- B—14 血清レプチン濃度と肥満・運動量との関係  
山本景子 (和歌山医大・看護短期大学部), 杉本静香 (和歌山医大・看護短期大学部)  
有田幹夫 (和歌山医大・看護短期大学部), 後和美朝 (大阪国際女子大学)  
宮井信行 (和歌山県立医科大学), 宮下和久 (和歌山県立医科大学)  
武田真太郎 (和歌山県立医科大学), 村口正弘 (大塚製薬・細胞工学研)  
猪尾和弘 (和歌山大学), 藤井美恵子 (神戸大学発達科学部附属明石小学校)  
五十嵐裕子 (神戸大学発達科学部附属明石中学校), 岡田由香 (神戸大学)  
北口和美 (西宮市立西宮高校), 大橋郁代 (西宮市教育委員会), 白石龍生 (大阪教育大学)
- B—15 最大発育年齢, 初経年齢と血中レプチン濃度の関連について  
後和美朝 (大阪国際女子大学), 神谷和世 (和歌山医大・看護短期大学部)  
板谷裕美 (和歌山医大・看護短期大学部), 有田幹雄 (和歌山医大・看護短期大学部)  
武田真太郎 (和歌山医大・看護短期大学部), 村口正弘 (大塚製薬・細胞工学研)  
五十嵐裕子 (神戸大学発達科学部附属明石中学校), 北口和美 (西宮市立西宮高校)  
宮井信行 (和歌山県立医科大学), 宮下和久 (和歌山県立医科大学)

## 公開教育講演

「子どもたちの心の健康と学校の役割」 浅川潔司 (兵庫教育大学教授)

## 特別講演

「薬物乱用防止教育の考え方と進め方」 勝野眞吾 (兵庫教育大学教授)

## シンポジウム

「健康・安全に関わる「総合的な学習」の現状と展望」

岩辺京子 (東京都中央区立小学校養護教諭)

白井哲朗 (兵庫県小野市立小学校教諭)

小西康久 (兵庫県播磨養護学校校長)

佐藤 真 (兵庫教育大学講師)

田中克己 (神戸大学発達科学部附属明石中学校教諭)

お知らせ

第2回動脈硬化教育フォーラム

—生活習慣病の患者指導—

主催：日本動脈硬化学会

日時：平成14年1月19日(土) 10:00~17:00

会場：シェーンバツハ砂防

住所：東京都千代田区平河町2-7-5 電話：03-3261-8386

当番世話人：帝京大学内科学講座 寺本 民生

プログラム

基調講演(1) 生活習慣病と動脈硬化

日本動脈硬化学会理事長 松澤 佑次

基調講演(2) 職域における生活習慣病

富士銀行 廣部 一彦

基調講演(3) 国家公務員における生活習慣病の実体と予防対策

元・人事院 石塚 正敏

講演：生活習慣病 —患者指導の実際—

千葉大学 齋藤 康, 筑波大学 山田 信博,

埼玉医科大学 片山 茂裕, 日本医科大学 及川 眞一

パネルディスカッション —生活習慣病とガイドライン—

金沢大学 馬淵 宏, 札幌医科大学 島本 和明

滋賀医科大学 柏木 厚典, 大阪大学 船橋 徹

(医師会生涯教育講座5単位, 日本医師会認定産業医の専門研修2単位が取得可能)

定員：700名 (参加ご希望の方はFAXもしくはE mailで下記にご連絡下さい。登録証をお送りします。

なお定員に余裕がある限り, 当日参加も受け付けます。)

参加費：医師 2,000円, 非医師 1,000円

問い合わせ先：〒173-8605 板橋区加賀2-11-1 帝京大学医学部内科学講座内

第2回動脈硬化教育フォーラム事務局 木下 誠

TEL 03-3964-1211 (ext.1542), FAX 03-3964-7637

E mail: makkino@med.teikyo-u.ac.jp

## 編集後記

昨年の日本学校保健学会においても学校を場とする子どもたちの健康に関する諸問題が報告されていたように、子どもたちの健康・体力・生活などは劣化の一途のように感じられます。しかしこうした問題を明らかにしている学会活動は少なく、そのため問題解決への取り組みに健康科学の視点が欠け、問題の解決は遅々としているとも言えます。そんな意味でも本学会・本学会誌からの情報

発信は極めて重要です。会員諸氏のますますの学会活動並びに本誌への投稿をお願い致します。

また、今後さらに必要とされる研究は、問題の解決法・対処法です。子どもの生活や健康・体力、あるいは学級や学校がこんな方法によりよい方向に変化した、といった実践的研究が待たれています。研究機関と連携した現場からの報告をぜひ投稿して頂きたいと思います。(小沢治夫)

「学校保健研究」編集委員会	EDITORIAL BOARD
編集委員長 (編集担当常任理事) 和唐 正勝 (宇都宮大学)	<i>Editor-in-Chief</i> Masakatsu WATO
編集委員	<i>Associate Editors</i>
磯辺啓二郎 (千葉大学)	Keijiro ISOBE
小沢 治夫 (筑波大附属駒場中・高等学校)	Haruo OZAWA
川上 幸三 (北海道教育大学函館校)	Kouzo KAWAKAMI
小阪 栄進 (金沢市立森山町小学校)	Eishin KOSAKA
佐藤 祐造 (名古屋大学総合保健体育科学センター)	Yuzo SATO
佐見由紀子 (東京学芸大附属小金井中学校)	Yukiko SAMI
鈴木 庄亮 (群馬大学)	Shosuke SUZUKI
瀧澤 利行 (茨城大学)	Toshiyuki TAKIZAWA
宮下 和久 (和歌山県立医科大学)	Kazuhisa MIYASHITA
百瀬 義人 (福岡大学)	Yoshito MOMOSE
盛 昭子 (弘前大学)	Akiko MORI
門田新一郎 (岡山大学)	Shin-ichiro MONDEN
渡邊 正樹 (東京学芸大学)	Masaki WATANABE
編集事務担当	<i>Editorial Staff</i>
山野 由紀 (大妻女子大学)	Yuki YAMANO

【原稿投稿先】「学校保健研究」事務局 〒102-0075 東京都千代田区三番町12  
大妻女子大学 人間生活科学研究所内  
電話 03-5275-9362

学校保健研究 第43巻 第4号	2001年10月20日発行
Japanese Journal of School Health Vol. 43 No. 4	(会員頒布 非売品)
編集兼発行人 森 昭三	
発行所 日本学校保健学会	
事務局 〒102-0075 東京都千代田区三番町12	
大妻女子大学 人間生活科学研究所内	
電話 03-5275-9362	
事務局長 大澤 清二	
印刷所 勝美印刷株式会社 〒112-0002 文京区小石川1-3-7	

# JAPANESE JOURNAL OF SCHOOL HEALTH

## CONTENTS

### Preface:

Play in Childhood.....Mitunori Murata 266

### Research Papers:

A Study on Methods of Weight Loss  
in Female College Students at Different Periods of Their Lives  
.....Yoshiko Kameyama-Matsuoka *et al.* 267

Physique and Its Recognition in Male Students  
.....Hideko Urata *et al.* 275

The Background of Junior High School Students  
with Little Interest in Activity :  
The Relations between CDI Score, Psychosomatic Complaints and Family  
.....Atsumi Hori 285

### Report:

Comparative Study of Physical Standards of the Infant, Children  
and Pupils Based on the Measurement Data Taken by  
the Ministry of Education and the Ministry of Health and Welfare  
.....Fukuji Uenobe *et al.* 299

Report of the JASH Research Consortium  
Perspectives of Adolescent Risk Behavior Surveys :  
An Overview of Adolescent Risk Behavior Surveys and Some Directions  
for Future Research  
..... Masaki Watanabe *et al.* 310

Japanese Association of School Health

平成十三年十月二十日 発行

発行者 森

昭三

印刷者

勝美印刷株式会社

発行所

東京都千代田区三番町12  
大妻女子大学人間生活科学研究室内

日本学校保健学会